
リリカルなのは～中２病な（元）中２の異世界転生記～

爺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜中2病な（元）中2の異世界転生記〜

【Nコード】

N 6 5 4 5 V

【作者名】

爺

【あらすじ】

中2で中2病全開の馬鹿正直な男が転生してひたすら暴れる物語！チートな力を引っ提げて知らない原作をバラバラに砕く？

ほとんどコメディー？たまにシリアス？

ダメな作者の描くダメダメ物語

気に食わないなら読むんじゃないやねえ！

第1話 転生？なにそれ？おいしいの？（前書き）

前書きい？そんなもんねえよ

第1話 転生？なにそれ？おいしいの？

いきなりですが、今、俺
真っ白な世界に立ってます

H A H A H A

・・・落ち着こう

何があつた？俺の身に？

「たしか・・・飯食つて、糞して、歯磨いて、風呂入って、GO
TO BED！だよな？」

あ、そうか、夢だね！夢なんだね！

よく2次創作とかにある死んだから転生！とかいう人が行く空間
じゃあないよね！

「よくわかつたのお、これから貴様におこることが」

あるえゝ？目の前にいわゆる神様っぽいおじさんがいるよ？

「誰が神様っぽいおじさんじゃ！わしは神そのものじゃ！」

さすが夢！心を読まれた上に神だつて！

「現実を見よ、おぬしはわしが間違えて殺したんじゃ」

What？

「はあ、現実逃避もほどほどにせい」

「うそん」

「ほんと」

「つーかなんで寝ただけで死ぬんだよ！ふざけてんのか！ああん？」

「こわっ！こいつ怖い！神の襟つかんで脅迫してきた！」

「なんですか？俺の寿命を表す時計でも落としたか？」

「・・・なんでわかる？」

「真実なのかよ！」

俺は寝巻の帽子を地面に思いっきりたたきつけた

「なんで俺の冗談がこんなに連続で当たるの！？」

「落ち着いてくれんか？」

「落ち着けるかぁ！」

くしばらくお待ちくださいく

「落ち着いたか」

「まあ、一応」

はあく俺まだ中2だよ、未来を背負って立つ子どもたちだよ。なん
で死ぬのさ？

・・・神の手違いで

「本当にすまなかった、なんで貴様を転生させてやろうと思う」

「でたよ、転生させて自分の罪を帳消しにしようとするの」

「ぬう・・・」

「まあ、良いけど、もちろん能力はつけてくれんだよね？」

「もちろんじゃ、制限はあるかの」

「じゃあ、まず魔術士オーフェンはぐれ旅よりディープドラゴンの
暗黒魔術」

「・・・かなりマイナーな能力じゃの」

うるさい、強いんだよ、ディープドラゴン

「2つ目、FAIRY TAIL より「^{クラッシュ}破碎」」

「ずいぶんとチートな・・・」

「最後に・・・」

「どうせFateとかガッシュの能力じゃろ」

「いや、こいつを作ってほしい」

俺はポケットから1枚の紙切れを出した

> i 2 8 9 9 3 — 3 7 3 2 <

「重機剣ガイア・グランザーヴ？何なんじゃ？この中2病全開の武器は？」

「俺の考えた武器、別にいいだろ、俺中2だし」

これ考えた時作者もほんとに中2でした

「まあ・・・いいじやろ、作ってやろう」

「ほんとか！サンキューな！できれば重さは前世の今ぐらいの俺が片手で自由に振り回せるぐらいでたのむわ」

「身体能力とかはいいのか？」

「うゝんできれば、前世の俺、そのままで」

「そうか、見た目はどうする？」

「超モブキャラで、ただし、あくまで普通な、きもいのは無しだ」

「物好きな奴じゃな」

「目立ちたくないんだよ」

これは本音だ、前の俺は俗に言うイケメンってやつで女子がうるさかったんだよ

作：ちつ、リア充が・・・

「転生先は？どうするんじや？」

「んゝ神様のお勧めは？」

「リリカルなのは、かのう？」（ハーレムに苦しむ転生者の姿が愉

快すぎるわい)

ん？何か一瞬神が笑った気が・・・

「んだそれ？まあいいや、じゃあそこで」

そう言うと、神が何かを思い出したように

「そうじゃ、重機剣ガイア・グランザーヴは小型化しておくぞ」

「ありがてえ、そのままじゃ持ち運びにくいしな」

「大きくするときは「set upガイア・グランザーヴ！」と言っ
んじゃ」

「OK」

「ついでにガイア・グランザーヴ起動時に甲冑をつけてやろう、な
にがいい？」

自棄に気前がいいな、じゃあお言葉に甘えますか

「戦国BASARAの伊達正宗Ver2で」

「OKじゃ！ガイア・グランザーヴには人工知能を組み込んだいた
からの。ほれ、この剣の形をしたキーホルダーが待機形態じゃ」

俺はガイアを受け取った、だがここまでくると

「・・・なんかあやしいな」

「何がじゃ？」

「お前の態度だよ、なんでそんなにきまえがいい？」

「・・・まだ教えられん・・・」

「そうかよ、じゃあ、いつ教えてくれる？」

「おぬしが転生し、時が着たらじゃ」

「なら、待つとするか、転生して、な。」

大方俺以外のイレギュラーがその世界に入り込んだんだろ
だったら仕方ないよな

「うむ、頼んだぞ・・・」（いえん、ハーレムの修羅場を乗り越えるため。なんて絶対に言えん・・・）

「じゃあ、またな。話してくれるのをまってるぜ」

「では、行くぞ！」

神はどこにあったのか分からないひもを引っ張った

「やっぱり？」

俺の真下に大きな穴が開いた

「がんばるんじゃぞー」

「ふざけんなあああ・・・」

俺は真下にできた穴へと落ちて行った

第1話 転生？なにそれ？おいしいの？（後書き）

はっはっはーこの作品での俺は超偉そうにすることにしたぜ！

「うわー最低な作者だ・・・」

リア充が！黙るがよい！

「・・・すみませんうちの作者が無礼を・・・」

ファーハッハッハッ

「仕方ない。・・・暗黒魔術・・・」

え？

「すこし反省てろ」

俺が俺でなくなるううう！

ばたっ

「全く・・・」

第2話 俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー（前書き）

連続投稿。

ただそれだけだ・・・

「いや、全然かつこよくないから」

第2話 俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー

またもや突然ですが！

「うおおあああああ！」

俺！絶賛落下中！

つてした山か？へえー近くに町もあるー
つて現実逃避してる場合じゃない！

「どうするどうするどうする（ry」

【マスター俺を起動しろ】

どこからともなく声が聞こえた！？

「だれ！？」

【俺だ、ガイア・グランザーヴだ】

しゃべった！？・・・あ、人工知能搭載されたんだっけ

「それで助かるのか！？」

【ああ、早くしろ】

うおお！もうすぐ地面だ！

「setupガイア・グランザーヴ！」

俺がそう叫ぶとポケットに入っていたガイアから光があふれた

「おお！」

光がやむと俺は右手にガイアを持ったバサラの伊達正宗になった

【マスター雷の弾を装填して・・・】

「そっからはわかる！」

その設定考えたの俺だし！

ガチャン！

俺はガイアを折り曲げ、弾の装填口に雷の弾を入れた
そして・・・

「リロード！」

ガキン！

俺はガイアを元に戻した

ガイアの刀身に雷の力が宿る・・・

「サンダーインパクトオオ！」

その力を衝撃として地面に放った

ドオオン

地面が広く抉れ、落下の衝撃をすべて相殺した

「た、助かった・・・」

【マスター疲れている所悪いが人が来るぞ】

「まじ？めんどくさい・・・かくれるk」その君。」わーお、速いなー来るの」

俺がガイアを待機モードにして隠れようとしたとき2本の小太刀を持った男性に見つかった

「ここに何かおちてこなかったか？」

俺は隠すのは苦手だ、どうせそのうちぼろが出る。
なら

「それ、俺です」

「何を言っているんだ？」

「いや、だからおちてきたのは俺なんですよ」

「え？」

うん、普通の反応！

「さらに言つと俺、転生者っていうのかな？とりえず別世界から転生したんで」

「・・・頭は大丈夫かい？」

心配された、うん普通だ。

「信じてもらえないかもしれませんが、これが真実です。」

まあ、しんじるわけな「君がそこまで言うなら信じよう」わーお。
信じてくれたよ、この人。

「本当ですか？そんなこと言って実は精神科医に連れていくつもりなんじゃ・・・」

「さっきのことを話している君の眼に冗談を言っている様子はなかった、確かに信じがたい話だが、証拠なんてそれだけで十分だ」

なんて器の広い人なんだ、俺ちょっと感動したね、うん。

「信じてくれてありがとうございます。ちなみに、ここはどこですか？」

「地球の海鳴市だよ」

おお、異世界から来たけど同じ地球に来るとは、まあ、海鳴市なんてないからパラレルワールドなんだろうけど

「そうですか、では」

さあて、今日はどこで寝ようかな」

「ちょっと待つんだ。」

「はい？」

「行くあてはあるのかい？ 転生者なんだろ」

「ありませんよ、だから、野宿です」

「一回やってみたかったんだ」野宿

「なら、家に来なさい」

What!?

「え？」

「泊まるあてのない子供を放っておくわけにもいかないからな」

この人は・・・

「器でかすぎでしょ・・・」

ん？子供？

「えっと・・・今の俺って？」

「子供の姿をしているよ」

H A H A H A

「まじか・・・」

「前世が何歳だったか知らないが今の君は子供だ、放ってはおけない」

仕方ない・・・

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。えっと・・・」

「高町士郎だ、士郎でいい」

「じゃあ、士郎さん。今日は お邪魔させてもらいます」

「ああ、しばらく 家で面倒を見てあげるよ。えっと・・・」

あら？さりげない強調は効果無しかな？
つと、名前決めて無いや。じゃあ・・・

「大地で。」

「苗字は？」

「とくにありません、親も家族もこの世界にはいないんで」

「じゃあ、うちの子になるかい？」

「いやいや、戸籍面とかで問題が・・・」

神：おもしろそうじゃな、その話。戸籍に 高町 大地 を養子として加えておくかの

「・・・大地君、今の声って」

「はい、神です。なんか、問題あっさり解決しましたね・・・」

「ご都合主義ってやつか!？」

「まあ、問題も解決したし。これで君はうちの子だ」

「本当にいいんですか？」

「ああ、構わないさ」

「この人は・・・」

「器広すぎだろ」

うん、2度目だこのセリフ

と、いうわけでやってきました高町家！

「道場まであのか・・・」

一言で言うだけでええ！

「じゃあ、入るときはただいま。だからな」

「了解」

士郎さん・・・いや、父さんが玄関の扉を開けた

「「ただいま！」」

俺は、新しい家族を手に入れた

「道場か・・・剣道の相手してくれるかなあ？」

転生、意外と疲れるけど、面白いなおい。

第2話 俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー（後書き）

「士郎さん、優しすぎだろ・・・目から涙が・・・」

スミマセンスミマセンスミマセン（ry

「こっちは絶賛ぶっ壊れ中か・・・」

トオル「おーこれが作者の新しい作品か^{バカ}」

「徹さん！」

トオル「よう。大地だったか？」

「はい、先輩にあえて光栄です！」

トオル「先輩って・・・まあ、そんなことより俺もたまにこっちに
来るからな」

「お願いします」

トオル「んじゃあ、このへんで」

「「また今度！」」

主人公設定

作：これが今作の主人公DA

・高町大地（イメージCV：竹内順子）

・年齢：14↓8

・性格：嘘をつくのが大の苦手、馬鹿で単細胞だが人のことが大好き。とくに、仲間のためにならどんな無茶でもする。いわゆる熱血主人公タイプ。ただし、前世は母親の影響で少しオタクなところがある。また、祖父と父が剣術道場をやっていた、持ち前の運動神経でどんなことでも真似てみようとする。

そのため普通に剣道もできるが、戦いの型がバサラの片倉小十郎ベースになっている。

ちなみに中1の時に剣道全国大会で優勝している。

ただ、頭は悪いのに理屈っぽく相手を説き伏せるのが大得意。それで友達に少し引かれていた。

・口癖

・絶賛中！

・特技

・剣道

・裁縫

・運動

・マシンガントーク（うざい相手を説き伏せる質問攻め）

・機械弄り（その気になればハッキングも可）

・技

・暗黒魔術：視線を媒体に生物・非生物を問わず、ありとあらゆる物に暗示をかけることで支配する。視線の範囲内ならば、並みの物体を一瞬で損壊させる、空間に「距離は0である」と暗示をかけたの擬似空間転移、生物の精神に暗示をかけ五感を共有した使い魔にする事や、魂を消滅させ廃人にする等極めて強力な能力を持つ。
・らしい

クラッシュ

・破碎：触ったものを破壊、分解する技、神のはからいで自分の周りにフィールドを張り、その範囲のものを破壊、分解することも可能となった。（ただし、範囲は狭いので防御にしか使えない）

・武器

・重機剣ガイア・グランザーヴ：中2病全開の自作武器、神にデバイスへと改造された。

刀身と柄の間を折り曲げることが可能、そこにある装填口に 弾を入れるとその属性に対応した攻撃が可能になる。色のイメージはデジモンのアグニモン。

起動するとバサラの正宗のような服装になり、追加で腰の左側に弾のホルダー、右にライフラインがある。

弾のリロードは基本的に1度に3発が最高、4発以上のリロードはオーバーリロードといい、通常のリロード以上の力を発揮できる、ただし、体が壊れる恐れが出てくる。リロードの本数が多いほど体にかかる負担も大きくなる。

同じ属性の弾を同時に3発以上リロードすると刀身の色が変わる。また、通常のデバイスのカートリッジシステムとは全くの別物。

・弾：重機剣ガイア・グランザーヴも付属品のようなもの。属性は火、水、氷、雷、闇、光がある。

これ自体は使い捨てのアイテム。

装填せずともそのまま投げても使用可。その場合、火は着弾点から爆発、水は水が噴出、氷は周りが凍りつく、雷は半径1メートルの敵を麻痺、闇は相手の影を固定し行動を制限、光は閃光弾効果となる。大地の生命力を変換したもので、ガイアを起動するとホルダーに自動的に作られる。

・ライフライン：シークレット

作：こんな感じですかね？

「チートだな」

作：本人が言うか？本人が？

「・・・暗黒魔術は制限しと・・・」

作：俺に使ったくせに・・・

「・・・ごめん」

作：ちなみにCVに異論があったり、こっちのほうが良くね？とか言うのがあったら教えてください。

「後、紛らわしいけど弾のもとになる生命力は地球の 大地 からもらっているもんだ」

作：大地自身の生命力でもよかつたんだけど、それだと大地がすぐ死ぬから（笑）

「笑い事じゃねえ・・・確かにガイアをベースに戦うからな、俺。」

作：じゃあ、今回は後書の分もここで済ませちゃたんで、ここらへんで。

「「また今度！」」

第3話 新しい家族と誘拐！？（前書き）

ちよつと時間かかりました

「別に問題ないんじゃない？」

ならいいけど・・・

第3話 新しい家族と誘拐！？

しろ・・・じゃなくて父さんの妻と思わしき人がでてきた、
っ！か若っ！

「その子はだれなの？」

「山で見つけて・・・えっと・・・何て説明しようかな？」

俺は正直に話す。

「大地です。この世界に前世の記憶を持ったまま転生しました。森
で土郎さんに拾われて、この家の養子になりました。」

「え？」

「戸籍は俺を転生させた神が勝手に書き変えたので、今俺は2人の
養子の高町大地ってなってます」

「はっきり言うね・・・」

「嘘は苦手ですから」

「本当に？」

おうおう、信じてないな・・・
まあ、普通の反応だ

「はい、真実です。迷惑なら出て行きますよ。俺は1人で大丈夫で

すから。」

嘘はない、飯なら2日位抜いても余裕だし。
寝床はどうにかなるさ。

「・・・」

考えてるな・・・

普通なら受け入れてくれる筈がない

「やっぱり、迷惑ですよ。失礼しました。」

俺は一礼して外に出た

「ちよつと、大地君！」

「土郎サン、やっぱり迷惑ですよ。俺の事は忘れて下さい。転生者と何て関わっても日常が壊れるだけです」

「そんなこゝそんなことないわ」桃子・・・」

あら？

「大丈夫、家には3人の子供がいる、1人増えても変わらないわ」

その見た目で子供3人！？何した！？

「それに、転生者でも子供よ」

桃子さんは俺の肩に手を置いた

「放っておくわけにはいかないわよ。それに、もう高町大地なんですよ。自分の息子を見捨てる親はいないわよ」

この人は・・・

「・・・器広過ぎでしょ」

「何か言った？」

「いえ、なにも。じゃあ、母さん、今日からお願いしますね。」

桃子母さんは胸を叩いて

「もちろん！」

といった

優しいなあ・・・この家族

ぐうぐう

「あ、」

俺の腹が鳴った

「お腹空いてるの？」

「転生してからは、何も・・・」

「じゃあ、美味しいご飯。作るわね。」

「有難うございます」

俺はその後、母さんの作った夕飯（時間的に夜食？）を食べた。マジ旨かった。本当にそれだけ。

寢床は仕方無く道場に布団を敷いて寝ることに。

「転生初日から色々あったな・・・」

俺はポツリと呟いて眠りに就いた

翌朝、父さんよりも早く起きた父さん似の人に不審者とされ、道場から投げ出された

本当に投げ捨てられたよ。

仕方無く状況を説明したが聞く耳もたず
まったく、本当に父さん達の子供なのか？
と、いうわけで

「お前を倒して家から追い出してやる！」

今、兄貴っぽい人にやられそうです

「いやいや、俺は父さん達の養子だから・・・」

「貴様が父さんのことを父さんと呼ぶな！」

兄貴はいきなり木刀で殴りかかってきた

「わーお」

あら？いつの間にか俺は空中を舞っていた
兄貴にかちあげられたか・・・

「っと」

俺は片手で着地し、そのまま床を押して飛び上がり、後退しつつ立ち直した

「俺の一撃を受けて平然としている！？」

あれぐらいなら前世の親父のアップーのが痛い。
あれは意識飛んだからね、本当に。

「急になにすんの？兄さん」

「貴様に兄さん呼ばわりされてる筋合いはない！」

「痛っ！」

こいつ・・・割と本気で殴りやがったな！

「目的はなんだ！？まさかなのはか？なのはをさらにきたか！？」

「ちよっ、落ち着いて・・・」

「なのは俺が守る！」

「話を聞けー！」

なんだコイツ！？勝手に妄想して暴走した！？

正当防衛だよな・・・これなら攻撃しても正当防衛になるよな。

「無刀で無月極殺か・・・うまくいくか？」

俺は無月極殺の構えをとった

「うらぁ！」

まずは蹴り

「がつ・・・」

怯んだ所に肘打ちやヘッドバットをきめる。

「おらおらおらぁ！」

そのまま刀で・・・っと今は無刀だった

仕方無い、服を掴んで叩きつけてから投げるか、

「うおらぁ！」

バン！

「どおらぁぁ！」

バキッ！

「あ・・・」

ヤバっ、やり過ぎた！

最後、投げた力が強過ぎたかな？
天井に頭埋めてぶら下がってるよ・・・

「なんだ今の音は！？」

「父さん・・・」

父さんが道場に駆けつけた
・・・もう少し早く来て欲しかった

「恭也！？大地、何があつたんだ？」

「あははは・・・」

俺は苦笑いしながら父さんにさっきの事を話した
その後、兄貴に俺の事を教えた

「恭也、伝えてなかったのは悪かったが、いきなり襲いかかったのはいけないな」

「すみません・・・」

「父さん、俺は気にしてないからいいですよ。あと、今日からよろしくな兄さん。」

「さっきは急に攻撃して悪かった。これからよろしくな大地。」

俺は兄貴と握手を交わした

「にしても、さっきの体術、どこで習ったんだ？」

「ゲームの動きを自分風にアレンジしたんだ。」

「へ、へえ……」

「教えようか？」

「いや、遠慮しとく……」

「そう？」

結構簡単なんだけどなあ……

「とりあえず、今日は朝の稽古はなしだな。」

「天井、後で直さなきゃな……父さん、この近くにホームセンタ
ーって有る？」

「ん？ああ、有るぞ、後で行くか。」

とりあえず、今日の予定は決まったな

「父さん、朝飯の前に自己紹介しときたいんだけど」

昨日の話からして、あと2人居るはずだからな

んで、朝食前

「昨日から養子としてこの家の一員になった大地、転生者だ。」

ポカーンといった音が聞こえてきそうだ・・・

「嘘をつくのは苦手なんで、はつきり言っておく」

2人の姉妹は呆然していた

「俺に関わる以上、守って貰うことがある」

「大地！そんな話聞いてないぞ！」

父さんは急に立ち上がったが、今は無視。

「まず、俺の力は人の命を簡単に奪える。だから、あまり他言しないでくれ。」

次に、俺のとする行動に文句は受け付けない。まあ、それでも多少は言うことは聞くけど。

最後に、何時でも俺を忘れられるように心を持て。転生者は何時世界の修正の力によって消されるかわからない。俺が消えたら俺を忘れる。悲しまないですむように」

「・・・」

沈黙

「まあ、それが条件だ。それが無理ならみんなの記憶から俺を消して、出て行くさ。」

「大地！なんで君は二言目には出て行くというんだい！そんなに私たちの事が嫌いなのか！」

「違います。好きだからこそ、です。」

「どういう意味だい？」

「俺は転生者、何時消えるかわからない。だから、消えた時にみんなに悲しんで欲しくないんですよ」

・・・沈黙

「さあ、ご飯が冷めちゃいます。食べ始めましょうか」

・・・沈黙

「暗い暗い！もっと明るく生きましょう！」

「・・・お前が原因なんだが・・・」

「あははは・・・」

苦笑いするしかないよな・・・

飯食った直後、俺に荷物が届いた。
差出人は不明

・・・つーか恐らく神

「結構でかいな。」

「大地君！早く開けてみるの！」

「なのは、これは俺宛ての荷物だぞ」

「いいから早く開けるの！」

なのはとは飯食ってる時に仲良くなった

ガイアにこっそり聞いたが、今俺の肉体年齢はなのはと同じ8歳らしい。

「open！」

勢い良く箱を開けた
中には

ランドセル

どこかの制服

生徒証

教科書

手紙

が入っていた

・・・入学準備？

すると中身をみたなののはが

「この制服、なのはの通う学校の制服なの！大地君！転校して来るの？」

と言った

「少し落ち着け」

「痛っ！」

あまりに五月蠅いのでデコピンで黙らせた

「んで、手紙の内容は？」

大地君、二度目の人生エンジョイしとるか？

君のために小学校への転入手続きをしておいた。

明日から君はなのはのクラスメートじゃ！

学校生活、楽しむんじゃぞ！

B y 神

「小学校からやり直しですか？」

「？」

「大地―木の板買いに行くぞー」

つと、荷物の確認をしていたらもうそんな時間か。

「今行きます！」

「なのはも行く！」

「・・・多分つまらないぞ」

「別にいいの。」

もの好きな奴だ

ホームセンターでの買い物が終わり、俺達の前を黒い車が通り過ぎた中には縛られた女の子が2人と銃を持った男の人が3人いたこれから辿り着く答えは・・・

「誘拐！？」

「大地、急にどうした？」

俺は事情を簡単に説明、転生者の力で助けると伝え、返事を聞かず駆け出した

「止めはしない、ただ。絶対無事に帰ってこい！」

「はい！」

「え！？え！？」

言われなくても！

俺はひたすら車を追いかけた。

暗黒魔術で肉体強化しているので、かなり速い。

ただ、他人からは認識されないように空間に暗示をしているので、誰も俺に気づいてない。

・・・暗黒魔術、超便利

そんなことを考えていると車は港の倉庫の1つに入ってしまった。
まだ、様子を見るか？

sideアリサ

ほんとにサイアク・・・

ずずかとなのはの家に行く途中に誘拐されるなんて・・・

「バンクス家と月村家のお嬢様が、意外にあっさり誘拐できたな。
あとは、身の代金をたんまり貰うとするか？」

「なかなか上玉じゃねーか・・・」

誘拐犯の1人がいやらしい目をこっちに向けた

「・・・おいおい。お前、趣味わりいな、ロリコンだったのか？」

「ぐへへ・・・」

きもっ！

本当にこんな笑い方する人いたの！？

「近寄るんじゃないわよ！変態！」

「その強がりも何時まで続くかなあ」

「・・・ほどほどにな」

「じゃあ！頂きまゝす！」

「イヤアアア！」

嫌だ・・・誰か・・・助けて・・・！

「こんにちは！宅配便です！」

「!？」

誘拐犯達は一斉に声のした方をむいた

声の持ち主は私達と同じぐらいの少年だった・・・
side out

「イヤアアア！」

悲鳴！？

仕方ない、乗り込むか！

「こんにちはー！宅配便です！」

「!？」

ひいふいみい・・・
15人か・・・

「誰だ！」

中でもbossっぽいやつが俺に聞いてきた

「宅配便ですって、」

「なら、何を届けにきた？」

周りの仲間が銃を構えた

俺はそれを無視して柱に縛られた2人の女の子を指差して

「代金引き換えです。代金はその子達の解放。」

「ふざけるなあ！」

「そして荷物は・・・これだよ！」

俺は暗黒魔術を発動した

「月読！」

《1日中剣で刺され続ける幻覚を見る》という暗示を誘拐犯に掛けた
ぶつちやけナルトの万華鏡車輪眼です

『ギヤアアア！』

おお！意外に出来た！

暗黒魔術超便利！

「・・・またのご利用お待ちしております。」

「あんだ誰・・・？」

金髪の女の子が俺に話しかけてきた

「転生者だ」

「転生者・・・？」

「そ、」

「ふーん」

「信じるのか？」

「目の前であんな事されたらね」

俺は縄を解きながら金髪少女と話している

「・・・何で助けてくれたの？」

「可愛い女の子助けるのに理由はある？」

「か、可愛い！？／＼」

「あれ？自覚無かった？2人とも可愛いぞ」

「・・・」

あれ？反応が無い？

「おい、どした？」

「な、何でもないわ」

良しっ！ほどけた

「ほどけたぞ」

「ありがとう。私はアリサ・バニックスで、こっちは友達のすずか」

「月村すずかです」

「そうか。じゃあな。」

「待ちなさいよ！」

バニックスに呼び止められた

「名前は・・・？」

「名乗る程のモンじゃない。」

振り返りつつ

「通りすがりのお人好しさ。」

「っ！／／」

あれ？バニックスの顔が赤い？
いや、多分夕日せいだな

「じゃあな。」

俺はその場を去った

sideアリサ

「・・・どうしちゃたんだろう、私」

あいつの最後の顔が頭から離れない

心臓の鼓動が早い

顔が熱い

「アリサちゃん？」

「また、会えるかな？」

「？」

あいつにまた会いたい。

そればかり考えている

「あゝもう！なんなの！」

この気持ちは！

第3話 新しい家族と誘拐！？（後書き）

フラグが立った！

「？どこに？誰が？」

・・・こいつ馬鹿だ

「？」

まあ、とりあえずハーレムにはするつもりだけど。

「誰を？」

・・・

「急に黙ってどうした？」

いや、呆れただけ

「そう言えばこの小説ジャンルはコメディータったよな？」

まあ、そうだけど

「なくね？」

・・・

「コメディーの部分、無いよね」

うるさい！これからいれるんだよ！

「まあ、がんばれ」

・・・タオルよりも優しい

「先輩が厳しいだけだろ？」

そうだな

じゃあこの辺で！

「「またな！」」

第4話 登場！影の主人公！（前書き）

今回この作品の2人目の主人公が出できます！

「おう！」

後、OP、EDが決まりました！

「おお！良いじゃん！」

OP：英雄（ウルトラマンネクサスのOP：doa）

ED：朝ANSWER（銀魂のED：PENGIN）

だ！

「OPウルトラマンかよ・・・」

英雄なめんな！超かっこいいぞ！

「ならいいけど」

第4話 登場！影の主人公！

おっす！おら高町大地！絶賛説教中だ！

「大地！聞いているのか！」

「・・・すみません」

あの後道に迷って家に帰ったのが夜になってしまい父さんに怒られている。

「まあ、反省はしているみたいだし、今回はこの辺で許す。さあ、飯にしよう。」

「はい」

やっと終わった・・・

～夜～

今日も道場で寝ようとしたが、母さんが

「同い年なんだし、なのはの部屋で寝れば？」

と言ったので、なのはの部屋で寝ることに
・・・安心しろ、俺は昼間のロリコンとは違う

兄貴がうるさかったが・・・黙らせた

んで今は・・・

「なのは、俺は蒲団は無いけど床で寝るぞ?」

「なんで?なのは別に一緒のベットで寝てもいいよ?」

「いや・・・そういうことじゃあ・・・」

ピンチだ、このままだとなのはと同じベットで寝ることに・・・
もちろん、何もしないが色々とまずい気が・・・
母さん、なぜ蒲団を隠した!

「大地君はなのはと寝るの、いやなの?」

上目づかいに涙目のコンボだと!?
断れない・・・だが!

「だが断る!」

俺の意思は固い!

「・・・お父さんとお兄ちゃんに大地君に「イタズラ」されたって
いうよ。」

「すみません・・・」

それは無理・・・

「じゃあいつしよになるの?」

「楽しそうだな、おい」

「だって旅行見たいでしょ？」

「・・・」

そうなる？

「じゃあ寝るか・・・」

「うん」

俺はなのはとベットに入った

・・・うん。ここだけだといろいろoutだな

「おやすみ、大地お兄ちゃん」

「・・・お兄ちゃん？」

「うん。」

「別にいいけどよ。」

「じゃあ、おやすみ」

「おう、良い夢をみなよ」

そして眠りについた

（翌朝）

「・・・苦しい」

え？何故かって？そんなもん決まってる？

「なのは、起きろ。そして離れろ。」

なのはが俺を抱き枕にしてんだよ
しかも向きあつた状態で・・・
ん？よく考えたら超顔が近い！？

「あと5分・・・」

「いいから起きろ！」

返事は無い

「こつなつたら！」

身動きが取れない、だが頑張れば寝返りは打てる
・・・なのはごと
みなさん、もうお分かりですか？

「落ちろ！」

寝がえりをとつてなのはとベットから落ちた。
でも、それがまずかった

『んん!!』

向きあつたままおちたのでそのまま・・・ねえ
俺がなのはを押し倒してキスをした。みたいな状況になってしまった
しかも最悪なことになのはの服が少しはだけている

「大地君？何をしているんだい？」

「あらあら」

・・・父さんに母さん？

とりあえず俺となのはは高速でなりをただした

「いや、これはちよつとした事故で・・・なあ！なのは！」

「そ、そうだよ！ただの事故なんだよ！」

「2人でむきになっちゃって・・・大地君、なのはをよろしくね」

「ちよ、待ってください！誤解ですって！しかも一応俺となのはは
兄弟ですよ！」

「でも、血のつながりはないじゃない」

「うつ・・・」

「しかたない・・・なのはがいいなら・・・大地君ならなのはをし

「しっかり守ってくれるだろう。」

「父さん！？そう言うのじゃないって！」

「そうだよ！これは事故なの！」

「ただ、もう少し経たないと籍は無理だぞ」

「違うから！お願い信じて！」

話を聞いてくれええええ！

食卓

危ない危ない・・・危うく変な方向に進むところだった・・・

「大地君、なのはがほしくなったらいつでも言うてね♪」

「いやいや、兄弟ですから。しかもなのは気持ちがあるでしょう」

「うふふ」

はあ、母さん。冗談はやめてくれ……

朝の一件のせいで俺となのはの間に流れる空気が気まずくなつてしまつた

・ ・ ・ 今日から学校だったのに。

⌈
•
•
•
⌋

「そう言えばもう結構時間たったけど、なのは？学校行かないのか？」

「ふえ？あ！ほんとだ！もうこんな時間！行ってきたーす！」

世話の焼ける妹だ・・・

「じゃあ、また後でな」

「うん」

こうしてなのはは学校へと出かけた
さて、俺も出るか

～学校～

sideアリサ

「はあ」

あいつ・・・何て名前なんだろう？

「今日はこのクラスに転校生が決めます！」

転校生ねえ・・・まあ、私には関係ないだろうけど・・・

「じゃあ、入ってきて！」

「はい。」

ん？この声？

「高町大地、なのはとは義兄弟だ。これからよろしくな」

・・・え？

「ええええ！？」

「アリサちゃん？どうしたの？」

「なななんであんたがここにいるのよ！？」

「ん？おお！バニクスか。」

「つーか何よ！なのはと義兄弟だったの！？」

「まあな」

「・・・2人とも知り合い？」

「腐れ縁です。」

「じゃあ、知り合いの近くのほうがいいわね。あなたの席はアリサちゃんの隣ね」

「わかりました」

・・・再会、意外に早かったわね。

「アリサちゃん、すずかちゃんから・・・」

「ありがとう」

なんかすずかが紙切れを回してきたわね？

「えっと・・・」

『探してた王子様が隣になったよかったね。』

ななな何言ってるのよ！？

しかもにこにこしながらこっち見て手振ってるし！

「？どうした？」

「なんでもないわよ！」

「ん？ならいいけど・・・」

side out

んで色々あつて昼休み！

いろいろ省いたのは作者の都合だ！

「お兄ちゃん、お昼食へに行こう！」

「はいはい」

俺はなのは達のところへ向かえなかった

「あの〜どいてくれない？」

クラスの悪ガキどもが道を塞いだのだ

「お前転入生のくせにうちのクラスの3大美女と仲良く昼飯が食えると思ってるのか？」

「？妹と同じとこで飯食って何が悪い？」

「うるせえ！お前は黙ってここで一人さみしく弁当食べてな！」

「うぎぎ・・・」

「んだと！？」

ここは前世の技で切り抜けますか・・・

（これはかなりめんどくなるので飛ばしてもらっても結構です）

「なに？君たちは俺が転入生だからといって俺の行動範囲を制限できるの？そんな権限を持ち合わせているのなら校長にその権限の証明書でも書いてもらったか？うん、そんなに自信満々なんだ、きつとあるんだろう。今すぐ見せてくれ。もしないのならそれぐらいの用意をしてから俺に命令するんだな。俺が人である限り、俺の自由と人権は日本の法律の下、認められている。俺が人でないのなら話は別だが。少し話がそれだな、俺が彼女たちと昼飯を食べるのがいけないのは君が勝手に決めただけだろう？法律が、憲法が校則が決めたとくでもない。なら、俺が彼女たちと昼食をとっても問題は無い。というわけだ、さっさとそこをどけろ。」

「ごちゃごちゃうるせー！」

悪ガキの1人は俺の挑発に乗り、俺に殴りかかってきた

バキイ
ドサッ

俺はそれをよけずに食らい、オーバ－リアクションをとった

「へっ馬鹿が」

「殴ったよな？俺を？」

「？」

「なら、殴り返されても文句は言えない！」

俺は本気で俺を殴った馬鹿を殴り返した

バアアン！

そいつは吹き飛んで壁にたたきつけられた
周りのやつらがガタガタ震えている

「さあ、まだ殺る？」

『済みませんでした！』

「OK」

パン、パン、パン

「?」

拍手をしながら俺に近づくやつがいた
女のように金色の髪を伸ばしているが、男らしい雰囲気のやつだった

「すごいね、君」

「どうも」

そいつは手を出して握手を求めてきた

「俺は影乃終夜^{かげのしゆうや}、よろしくな。」

「おう、よろしくな」

俺はそいつと握手をした

「今日の昼食、一緒に良いかな?」

「構わないぜ」

く屋上く

「へえく転生者」

「そつだ。信じるか?」

「信じるよ、もともと、俺も忍一族の末裔だし」

「そうなのか！すごいな！」

俺と影乃はすっかり意気投合し互いのヒミツを言い合える仲になっていた

「むゝ男の子同士でばかり話して私たちのこと忘れないでよ！」

「悪い悪い」

「ははっ」

俺はこの時知る由もなかった

影乃が俺と背中を合わせて戦う相棒になるとは……

第4話 登場！影の主人公！（後書き）

では、キャラ紹介です

影乃終夜（かげのしゅうや イメージCV：風間勇刀）

見た目：ロックマンゼクスのジルウエ

装備：クナイ、手裏剣

技：忍体術

「忍者・・・」

中二病な君にぴったりの相棒だろ？

「あれ？デバイスとか魔法は？」

それはおいおい・・・

「ふーん」

じゃあ今回はこの辺で

「「またな！」」

第5話 初戦闘！俺の實力しかとその目ん球に焼き付けな！（前書き）

作：今回から前書きでは名（迷）言コーナーをやることにしました！

大「んでもって、これが記念すべきひとつ目だ！

『トサカに来るぜ！』… プーブラ・コカペトリ（ロックマンゼロ4）

大「・・・What？」

作：・・・なぜ？

大「何がしたいんだお前！？」

作：まて！ただてきとうにくじ引きで選んだらこうなったただけだ！

大「ふざけんな！次からはまじめにやれ！」

作：yes, sir!

作：ちなみに今後のデバイスの会話ですが、基本は日本語、セツトアップや簡単なものは英語で書きます。

第5話 初戦闘！俺の實力しかとその目ん球に焼き付けな！

〈放課後〉

「さあ、帰るか。」

「私達は塾に行くから先に帰ってていいよ。」

「わかった先帰るわ。終夜はどうすんの？一緒に帰るか？」

「俺は修行が・・・」

「修行か、なら仕方ないな」

「って何あんたは納得してんのよ！小学生が修行っておかし過ぎでしょー！」

俺はアリサの肩に手を置いて
笑顔でサムズアップ

「気にすんな！」

「そついう問題！？」

「アリサちゃんと大地君仲良いよね。」

「なに言ってるのよ！」

「そう見える？まあ、仲がいいのは良いことだ！」

と言いつつアリサの肩に手を回した
ん？理由？

ノリだよノリ

「！？」

ん？アリサの顔がみるみる赤く・・・

「どうした？」

俺はアリサの顔を覗き込んだ

「！！（顔が近い！？）」

「ん？」

「大地・・・（馬鹿だ）」

「お兄ちゃん・・・（たらしだ）」

「アリサちゃん・・・（良かったね）」

2人共？何で俺から離れる？

すずか？何でそんなにこやかなんだ？

作：あんたが原因だ

「大地の・・・」

「なんだ？アリサ？」

「馬鹿あゝ！」

「ガハア！」

いい・・・パンチだ・・・

「「自業自得」」

「青春だね。」

「・・・すずか、オバサンくさいぞ」

「どこが？（黒笑）」

「・・・俺が悪かった」

今日はさっさと帰って仮眠取ろう・・・

～夜～

うん、なかなか楽しい学校だったな、さてもうそろそろ・・・
ん？なのはの部屋が騒がしいな・・・

俺は何があつたのかを確かめる為になのはの部屋に向かったが、

「なのは？」

どこか急いだ様子で家を飛び出した姿を確認出来た。

・・・世話の焼ける妹だ

「父さん、なのはを追いかけるので、少し出掛けますっ」と。

俺は底にあったメモに文を書き残して家をでた

【マスター、なのは様は動物病院に向かったと思われます】

「サンキュー、ガイア。道案内、頼めるか？」

【了解しました】

「あと、マスターじゃなくて大地で良いぜ」

【了解しました。大地様。】

ガイアの声がまんま小十郎だから政宗になった気分だな・・・

「OK! are you ready?」

【無論、何時でも！】

「さあ！ partyの始まりだ！」

・・・1度言ってみたかったんだこれ

s i d eなのは

何なの？これ？

私は今喋るフェレットを抱えて黒い怪物から逃げてます。
誰か助けて〜！

「にゃあ！」

やばい・・・躓いちゃた！

「
■ ■ ■ ■ ！」

「誰か！助けて！」

私は目を閉じた
やられる！

・・・あれ？何も衝撃が来ない？

「・・・俺の妹に手え出したんだ、覚悟はいいな？化け物。」

「・・・大地・・・お兄ちゃん・・・？」

「またせたな。」

大地お兄ちゃんが
おそわれる直前に助けてくれたみたい

「安心しな、お前は俺が絶対守る」

「お兄ちゃん・・・」

・・・この状況でそのセリフは反則なの

「にしても」

「なに？」

「・・・お前軽いな」

「ふえ！」

急になんで！？そういえば今の体制って・・・

「お姫様抱っこされてる！？」

「嫌だったか？悪い、あの状況からだこの体制が楽だったから。」

「うう」

今朝押し倒されてファーストキス奪われた上に（事故です）お姫様抱っこまで・・・（非常事態です）

「大地お兄ちゃん・・・」

「ん？どした？」

「責任、取ってくれる？」

多分今の私、顔真っ赤なんだろうな・・・

「なんの？」

「いいから！」

「まあ別に構わないけど・・・」

「絶対だよ！」

「？」

アリサちゃんには負けないの！

side out

・・・一体何の責任だ？

まあ、馬鹿な俺が考えてもわからねえな。
それより！

「なのは、ここから離れろ」

俺はなのはを降ろして化け物を見据えた

・・・ナニアレ？ヘドロ？

「無理だ！魔法が使えない人にジュエルシードは封印出来ない！」

「なら、破壊するまで」

「なっ！」

フレットが五月蠅いが無視だな

「いくぜ！」

【御意！】

「ガイア・グランザーヴ、s e t u p！」

「え！？デバイス！？」

ガイアのセットアップにより俺は政宗の鎧を身に纏った

「ん？なんか見慣れた目線の高さ？」

【私をセットアップすると前世の死ぬ直前の体格に変わります。また、15歳になった時点でその設定は解除されます】

「おお！」

【そんな事より、来ます！】

「つと！そうだった！」

「■■■■■！」

俺はバックステップで攻撃を避け、構えた

「転生者・・・高町大地、推して参る！」

俺は化け物にむかって駆け出し、左右1回つつ切り上げた
その後一度切り下ろし、サイドに動きながら横薙2回・・・
っと！ジャンプで避けやがったよ！
なら、ここは・・・

「対空専用・・・」

平突きのをとる。

だが、これはただの突きじゃない！

「牙突参式！」

俺は空中の化け物に斉藤一の牙突を放った

グシャア・・・

きもっ！刺さった時の感覚きめえ！

「とおおりやあ！」

化け物はガイアを抜くことが出来ていない

俺はガイアをフルスイングし、化け物を刀から抜きつつ地面に叩き
つけた

俺は急いで刀身を折り曲げる

ガキョン！

「リロード！」

俺は火の弾をリロードした

「炎斬剣！」

落下の速度を加え化け物に刀を振り下ろした

「■■■■■！？」

化け物は声にならない悲鳴を上げた
だが、まだ生きている

「止めだ！」

俺が化け物に止めを刺そうとした時、背後から桜色の光が天に向かって伸びた

「なのはか？」

俺が振り返るとアニメに出てくる魔法少女のようなコスプレをしたなのはが立っていた

「リリカル・マジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

【Sealing Mode setup】

なのはの持っていた杖から羽みたいな物が生え、リボンみたいな物を化け物に巻きつけた
すると化け物の眉間に21と浮かんだ

【Stand by ready】

「リリカル・マジカル、ジュエルシードシリアル21、封印！」

【sealing】

すると更にリボンが出て来て化け物を貫いた

「
■ ■ ■ ■ !」

すると化け物は消え失せて、綺麗な青い石が残った

「なんなんだよ・・・いつたい・・・？」

「大地お兄ちゃん、大丈夫だった？」

なのはが駆け寄ってきた

「・・・なのは、言い訳を聞こう。なんでイタいコスプレをしている？」

俺も人の事言えないか？

「イ、イタいコスプレ？君はデバイスを持っているのに知らないのか？」

フェレット？何を言い出すんだい？

「デバイス？なにが？」

「だって、それは・・・」

ファンファンファンファン・・・

「やっぱ！サツだ！逃げるぞ！」

「わ、わかったの！」

俺はなのはを連れて走り・・・

「誰だ！」

出せなかった。

俺は背後に人の気配を感じ振り返った

「誰もいない・・・？」

「どうしたの？」

「いや、気のせいだったらしい・・・」

いや、嘘だ、気のせいなんかじゃない。
あの一瞬で姿を隠したらしい・・・
いったい誰が？

「とりあえず行くぞ！」

「うん」

俺たちは近くの公園に向かって駆け出した・・・

side 三人称

「・・・」

1つの黒い影が大地たちを見ていた・・・

その闇夜に紛れる漆黒の服に身を包み、

月明かりに照らされ、美しく輝く金色の長髪をなびかせながら・・・

忍 その一文字が良く合う

「大地・・・何をしようとしている・・・？」

side out

第5話 初戦闘！俺の實力しかとその目ん球に焼き付けな！（後書き）

ガイアグランザーヴはデバイスなのか？それとも？

次回、明らかに・・・

大「いやいや、キャラ説に書いてあったから。」

作：だとしたら、デバイスを使える君にも念話が届くはずだが？

大「言われてみれば・・・」

作：ねたばれは禁止だ。さうてここらで締めるか？

大「そうだな。」

「「またな！」」

最後の金髪はフェイトじゃありませんよ。
この作品でもフェイトはしっかり女です。

安心してください。

第6話 巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！（前書き）

じゃあ、名言！

『こんなもんじゃ 俺の魂は折れねーよ』・・・銀時（銀魂）

ほいじゃ！本編、行ってみよう！

第6話 巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！

「ハアッ、ハアッ、ハアッ…」

つ、疲れた…

「大丈夫？」

「うる…さいぞ…イタチ…モドキが…」

あの後なのは足が予想以上に遅かったので、仕方無く担いで走ったから…

絶賛疲労中だ…

「駄目だ…息が…出来な…」

あ、あの糞神が見えてきた…

「大地お兄ちゃん！？」

「たたた、大変だ！今すぐ治療魔法を！」

短い…2度目の人生だった…

「燃え尽きたぜ…」

真っ白にな…

くしばらくお待ち下さい」

「いや、助かったぜイタチモドキ！」

「いや…フェレットだからね。」

「本来なら今すぐに挽き肉にして食べるつもりだったけど」

「（何で！？）」

「命の恩人にそんな事は出来ない。と、言うわけで事情を聞こうじゃないか？イタチモドキ。」

俺はイタチモドキの首の辺りをつまみ適当なベンチに腰を下ろした

「だから、フェレットだって…じゃあ、まずは…」

イタチモドキ改めてユーノは俺達にこれまでの経緯を話した。

「偉いような、無謀なような…」

「巻き込んでしまってますみません。しばらくして、魔力が回復したら「自分1人で探すってか？」…はい。」

「馬鹿やろう、こっちは巻き込まれただけかもしれんが、巻き込んでおいて放置ってどうなのよ？」

「それは…」

「俺が協力してやる。放っておけるか」

「わ、私も協力するよ！」

「2人とも…」

コーノはフェレットの姿で器用に土下座した

「本当にありがとう！」

「あ、なのはは協力させないぞ」

「ふえ！？」

「あたりまえだろ」

「何でなのはは協力しちやいけないの！？」

なのはは手をブンブンと回しながら異議を唱えた

それに対応してツインテールがピコピコ動いている

…何この可愛い生き物？抱きしめていい？

「あのなあ、さっきみたいな危険な事を何度もやるんだぜ？死ぬかもしれないんだ、可愛い妹を易々命の危険にさらすわけにはいかな
いんだよ」

「でもでもでも」

しつこい！

「なのは、ちょっと立て」

「何？お兄ちゃ…」

俺はなのはを立たせ足払いをして転ばせた後、なのはにまたがり手頃な木の枝を首に突きつけた

「さっきの事に首を突っ込むって事はこれより危険な目に遭うって事だ…いいかこれは警告だ。協力するのは俺だけでいい」

ぶるぶると震えだした…

少しやり過ぎたか？

「…そんな事わかってるもん！」

…コイツ…

「本気なんだな？」

「うん！」

真っ直ぐで迷いの無い目…

「…わかった、ただし怪我はなるべくしないよーに」

「ありがとう！お兄ちゃん！」

そう言っただけなのは俺に飛び付いた

「離れろ！って近！？」

近い！顔近い！

「あの～？ちょっといい？」

「わかったから離れろ！」

「やだ～」

（僕、忘れられてる？あつ…なんか涙が…）

閑話休題

「で？デバイスって？」

「あ、はい。え～っと。基本的に魔導師は・・・」

～長そうなんで飛ばします～

「で？デバイスっぽいガイアを持つ俺は魔導師じゃないの？ってことか？」

「まあ、そんな感じです。」

「で、本当のところどうなの？」

【大地様は魔力を持っています。 リンカーコア が存在しませんので。 ちなみに私は地球の生命力で動いています。 強いて言うならデバイスもどきですね。】

「へ」

「へ」

「????」

あれ？なのはは理解できてないっぽい？

「って！そんなの聞いたことありませんよ！！貴方は何者なんですか！？」

「転生者。」

「しんじられるか！」

お、ナイス突っ込み。

「まあ、話はこの辺にして家に帰るぞ」

「そうだね。」

「ちょ、僕の意見は！？」

「「聞いてない（なの）」」

「ええ！？」

く高町家く

お？電気がついてますねく

「ただいまく！」

「ちょ、お兄ちゃん！声がでかいてば！（ひそひそ）」

「おかえり、大地。」

「父さん！」

「なのはも。」

「た、ただいま・・・」

「キュ、キュウ・・・」

さあて、どこから話そうかな・・・

sideなのは

せっかくヒミツにしようと思ったのに・・・

「なんで話しちゃうの〜!」

「いや、隠しても意味ないし。俺だとすぐばれる。」

なんなの〜!

「それより、お前はこれから説教だな。」

「ふえ!?!」

「じゃ、がんばれよ〜」

「ええええ〜!?!」

お兄ちゃんのかあ〜!!

side out

ばたん

俺は自分の部屋に入った

「……で?何か用?」

「……いつ気付いた?」

俺は窓に寄りかかりおそろく窓の向こうにいる ヤツ に話しかけた

「さくって何時かな」

「・・・さつきだな」

「もうばれた!？」

「・・・図星か」

「まさかの誘導尋問!？」

「・・・馬鹿」

「何だと!？」

「・・・要件を言おう」

つと、危つく冷静さを失うところだった・・・

「ジュエルシード、といったな。あれで何をするつもりだ？あれは危険な代物、小学生のてにおれるものじゃあ・・・」

「・・・終夜、俺は普通じゃないんだ・・・」

「!？」

「お前が俺が危険にさらされるのを避けたいってのはわからんでもない。だが、俺なら他のやつが集めるよりも安全なんだ。」

「ならせめて俺も手伝う！俺も普通じゃ「だめだ」・・・」

「これはお前の首を突っ込むことじゃない。」

「俺はつながりを二度と失いたくない・・・」

「終夜・・・悪い。今回のことは忘れてくれ・・・」

「・・・わかった・・・」

いつしゅんの沈黙が流れ、終夜が姿を消した

「・・・行つたか・・・」

悪かったな、終夜・・・

side 終夜

俺に・・・俺にもっと力があれば・・・

大地は転生者、おそらく神に何らかの力をもらつたんだろう・・・

ならおれもそれに近い 人ならざるもの の力があれば・・・

・・・チカラか

side out

第6話 巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！（後書き）

大「えーっとこれにこれ、それとこれも！」

終「おいおい、持ちすぎだ・・・」

大「だって刹那大先輩のところに行くんだよ！3日は泊まるー！」

終「迷惑だから・・・」

作「あはははは・・・」

終「せめてお土産は持っていこう・・・」

大「ガイアのレプリカ！」

作「おいおい・・・」

終「忍具一式かな・・・？」

作「すみません前奏曲さん・・・」

終「クナイ100、手裏剣100、煙玉・閃光弾各2、忍者刀、鍵縄、鍵開け用の針金、大型手裏剣3、兵糧丸10日分・・・」

作「物騒だよ！？」

第7話 みんな！サッカーやろっぜ！（前書き）

作：はい！恒例の名（迷）言コーナーだよ！！

しゅん・・・

作：・・・大地たちがまだ帰ってこない・・・さみしい。

『悪・即・斬』・・・斎藤一（るろくに剣心・明治剣客浪漫譚・）

作：それじゃあ、本編、どうぞ・・・

注！今回はユーノとアリサのキャラが崩壊気味です。

第7話 みんな！サッカーやろっぜ！

只今、絶賛爆睡中だ・・・
眠い・・・

「ちょっと！授業中よ！起きなさい！（小声）」

ぬう・・・小声で怒鳴るとはなかなか器用だな・・・

「寝かせてくれよう」

「ふざけないで！」

「無理」

ぽてっ

「！！」

あ、柔らかくて暖かい・・・

「ちょ、ちょっと・・・」

お休みなさい・・・

そして俺が意識を手放した直後、チャイムが鳴り、昼休みとなった

sideアリサ

まったく、何でこうなるの・・・

「すう・・・すう・・・」

・・・にしても可愛い寝顔・・・

じゃなくて！

「起きなさいよ！」

何で私の膝の上で寝るのよ！

「こんな事なら教科書見せるんじゃないかった・・・」

そう、さっきの国語の時間は大地が教科書を忘れたので『仕方無く』机と椅子を寄せて教科書を見てたの。

だから今大地が私の膝枕で寝てるわけ。

「・・・相変わらずだな、此処は学校だぞ。」

「なによ！終夜！これはコイツが一方的にやってるだけで、私は許可なんてしてないの！」

「なら、さつさと落とせばいい。大地の独断なら文句は言われない筈」

「そ、それは・・・」

「ふう・・・だから相変わらずと言ったんだ。」

か、勝てない・・・

「すずか達と屋上で先に弁当を食べてる。」

「え!？」

「だからゆっくりイチャつくといい」

「ちょ、ちよつと!」

ガラッ

「・・・どうすんのよこれ・・・」

side out

「・・・さい」

アリサ・・・？

「・・・きなさい!」

五月蠅い・・・

「起きなさいよ！」

「・・・起きたけど？」

まだまだ寝足りないんだ。

「っーか柔らかくて気持ちいいな〜おい・・・」

俺はスリスリと頼ずりした

「っ!？」

何だろ？

・・・駄目だ、気持ち良すぎる。考える事ができん。

「なにすんのよ!」

「痛い!」

こいつ!殴りやがった!

「んだよ!人が夢見心地で・・・」

衝撃により目がスッキリ覚めた俺は上体を起こすとすぐに状況を把握した

- ・顔が真つ赤なアリサ
- ・俺が座っているのはアリサの隣
- ・さっきの国語の時間から机や席が近いまま
- ・柔らかくて暖かい感触・・・

結論！

・・・膝枕。

なにいいい！？

「・・・／／」

「あ・・・えつと・・・」

落ち着け落ち着け落ち着け落ち（ry

「気持ち良かったぜ！」

そうじゃない！（泣）

「・・・そう」

あれ？

「怒らない？」

何で？

「・・・」

・・・駄目だ調子が狂う！アリサっぽくない！
こうなったら・・・俺は変態と呼ばれても構わない！

「また、頼めるか？」

さあこい！俺を殴れ！

「・・・べ、別にいいけど／＼」

嘘・・・だろ・・・？

これは嬉し・・・あ、イヤイヤイヤ！

今度は何時・・・でもなくて！

「アリサに何があつたんだあああ!？」

↓
放課後
↓

まあ、色々あつたけど・・・

ぐぐぐう
ツ
パ
ア
ン

ヘアバン装着！

「みんな！サッカー！やろっぜ！」

『おおー!』

今はサッカーだあああ!

「・・・」

「あ、アリサちゃん・・・」

「あのあと何をしたらコイツがこんな骨抜きになるんだ?」

「むう・・・なんか負けた感じがするの・・・」

・・・なににあいつら?見学?

・・・まあ、いいや。

今俺達、翠屋JFCはサッカーの練習をしている。
但し、ただのサッカーじゃあない!

「風助!」

「はい!」

「そよかぜステップ!」

ヒュォオ!

「山本！」

「おう！」

「ザ・マウンテン！」

バーン！

「こい！火燃！」
かねん

「ハアアア！」

「爆熱ストーム！」

ズドオオ！

「いくぜ！」

「ゴッドキャッチ！」

バシィィ！

「なかなか良かったぜ！火燃！」

「次は決める！」

もうわかりだろう。

コイツらみんな俺の特訓によって必殺技がある。
つまり……

「これが超次元サッカーだ！」

「あいつ・・・なにいつてんだ？」

「終夜君、気にしたら負けだよ。」

「すずか？それは非道いんじゃない・・・」

くしばらくして

「試合も近い！今日はここまで！」

『はい！』

・・・その試合負ける気がしないぜ！

閑話休題

く神社く

「わん公が！やんのかこらあ！」

「ぐるるる・・・」

「わ、わん公つて・・・一応ジュエルシードが暴走した姿何だけど・・・」

うるさい！

サッカーの練習後にチームメイトにアリサの事でからかわれて機嫌が悪いんだ！

「噛み殺す！」

「バオウ！」

「か、噛み殺す・・・（汗）」

糞っ！風助のやろっ・・・

（回想）

「つつかれたー！」

俺は芝の上に転がった

「お疲れさん。」

「お疲れー」

みんな着替えが終わり帰ろうとしていた。

「あれ？大地、アリサがいるのに膝枕して貰わないの？」

「おま・・・ちよっ！何を急に！？」

『膝枕あ！？』

「風助、詳しく聞かせろ。」

「いいですよ。」

「おいこら、ちょっと待て」

その話はさせるわけにはいかん！

「闇！止める！」

「わかった・・・後で聞かせろよ・・・」

それぐらい抜いてやる！

「影縫い！」

「あだっ！」

しまった！？油断した！？

「しばらく待つてな・・・」

「闇！放せ！」

くそっ！

「・・・で・・・して・・・」

「ふむふむ。」

「・・・だっ たんですよ！」

「なにいい！？」

「羨ましい・・・」

「・・・間に合わなかった・・・」

「・・・終わったみたいだな・・・」

闇は俺の拘束を解いた

「大地。」

「・・・急になんだよ」

「式には招待してくれよ。（b^_^.）」

「ふざけんな！！っーか顔文字！？」

アリサと俺ってどんな組み合わせ！？
有り得ないから！

俺ってモブな顔付きですよ！
釣り合わないから！

「おい！アリサもなんとか言え・・・」

「・・・／／」

何で真つ赤！？

キイン

「！？」

ジュエルシード！？
助かった！

「悪い。急用思い出した！」

全力ダッシュ！！
カオスから逃げるために！
何故なら、面倒くさいから！

〽回想終了〽

「・・・よし！封印完了。ナイスなのは」

「うん！」

「イヤイヤイヤ！戦闘描写無かったから！」

「・・・ナニヲイウノカナ？」

「チャントタタカッタジャナイカ？」

「ひくわー」

「ひくのー」

「ええ！？何で！？」

「空気読めよ・・・」

「作：・・・なんかラッキー？」

「作者さんもなにいつてるの！？」

「うわっ！電波なセリフ！？」

「ひくのー」

「・・・僕、泣いていいよね？」

作：うわっ！知らないレアカードダブった！？これ強いけど俺使いこなすためのカードが無い！？

「ちょっ！何でカード買ってたの！？執筆中だろ！！」

作：買ってない。開封だ

「ドンマイ作者！」

作：おう！めげないぜ！おれ！

「がんばれなの」

「（・・・今日の夕飯何だろう？）（現実逃避）」

第7話 みんな！サッカーやろっぜ！（後書き）

大「たっだいまゝ！！」

作「お帰り！！待ってたぜ！！」

大「っつか刹那先輩強すぎだろ・・・」

作「負けたか？」

大「暗黒魔術使って勝てなかった。ようし！今から特訓行ってくるー！！」

作「ちょっと待てよ！？」

大「じゃあ！行ってきたゝすー！！」

作「・・・行っちゃった・・・また一人だけ？」

終「いや、俺がいる。」

作「終さん！？」

終「しゅ、終さん・・・？」

作「最後のせりふだけでいいんで！一緒にお願いします！

終「別にいいぜ？」

作：よっしゃ！じゃあ・・・

「またな！」

大地の身体能力について説明が一切なかったのでここに説明をくわえておきます

異常な筋力を持つ。

スピードは終夜ほどは無いが、常人の4倍ほどはある。

転生前は正拳突きで鉄筋コンクリートの壁を砕き、跳躍は片足飛びで二階建ての一軒家の屋根の上に登れた。

転生により体が小さくなったので今はガイアをセット・アップしないとそこまでのことはできない。

追伸、大地の 親父 はこれ以上の異常な筋力があるらしい
・・・どんな親子だ？

こんな感じです。

あと、もう少しで期末試験があるのでしばらく更新はできません。
では、また次回！！

第8話 護る覚悟。(前書き)

お待たせしましたー！

ドラクエのデータが消えてショックを受けた作者です。

少し遅れたんで、お詫びに3話更新しますー！！

第8話 護る覚悟

「ハアアアア！」

「負けるかああああ！！！」

ドン！

バキヤッ！！

バチコーン！

「・・・ドッチボールだったよね？」

「大地お兄ちゃんががんばれなの！」

よお！

俺、高町大地！

今学校の授業のドッチボールで終夜と絶賛マジバトル中だ！

「おのれ・・・ちょこまかと！」

「ふっ・・・忍の速さをなめるな！」

俺と終夜以外は全員外野だ

俺と終夜が全て倒したからな。

「入り込む余地が無い・・・」

「先生も呆れてたしね」

まだまだあ！

「負けるかあああ！！！」

閑話休題

〈校長室〉

「すみません……」

「いやいや、元気な事はいいんだけど。少し、押さえようね。」

……やりすぎたか？

あのと、決着が着かず昼休みに勝負がもつれ込んだ
んで、気がついたら観客がいっぱい。

そいでその騒動が校長の耳に入ってたってわけだ

「……」

「……」

ぐぬう……沈黙が痛い……

キーン

「!？」

ジュエルシード!？」

クツ!タイミングが悪い・・・

「キャアア!？」

「すずか!？」

校庭からすずかの悲鳴が聞こえるとほぼ同時に校長室の扉が開いた

「校長先生!急に校庭にへんなロボットが現れて・・・」

「くそっ!」

「大地!待て!」

「終夜はみんなと非難してろ!あと、なのはをに待ってるって伝え
といてくれ!」

俺は校長室を窓から飛び出した

「大地君!危ないから戻りなさい!」

悪い先生・・・俺は止まらない!

校庭には戦隊ものの巨大ロボみたいなやつがいて暴れていた
・・・まだ逃げれてない生徒もいる
しかもすずかが捕まってる

「ガイア!派手にやってあのロボットの気を引くぞ!」

【御意!!】

力がばれるだとか、結界が無いとか関係ない!!
俺はみんなを護る!!

「ガイア・グランザーヴ! s e t ! u p !」

俺はガイアをしっかりと握る

「リロード!!」

【リロード・・・火、火、火・・・トリプルファイア! ファイアモード!】

火を3つリロードするとガイアから機械的な声が聞こえた
これは最近ガイアに頼んで追加した機能だ
え? 理由? カッコイイから。

まあ、それは置いていて・・・
刀身が赤く変色し炎に包まれる
これは炎系の強力技を出す準備だ!

「いくぜ! ロボット野郎!!」

「・・・・・・!!?」

・・・本田忠勝?

まあ、いいや

俺はガイアを振りかぶり、技を放つ

フロミネンス
「P U R O M I N E N S U ! !」

太陽の紅焰の名を持つこの技は相手を『焼く』なんて生易しい技じゃない

相手を『焼き尽くし』、『破壊し』、『蒸発』させるための技だ
・・・まあ、機械相手じゃそこまでは無理だな

この技見た目が派手なんだよ

俺がガイアを地面に叩きつけると地面が割れはじめそこから灼熱の炎がアーチ型を何度も描いて地面を跳ねるようにロボに迫る！

ブオワアアアン

フロミネンス
P U R O M I N E N S U がロボに直撃しバランスが崩れ、さすがに放り出された

「っ！？間に合え！」

俺は全力ダッシュですずかのもとへ駆け寄る
届け！

俺はヘッドスライディングですずかが落ちてくる地点に滑り込んだ

「ていいりゃ！！」

「きゃっ！」

あ、危ねえ！間に合った・・・
15の体で良かった・・・

「大丈夫か？」

「う、うん・・・」

・・・怪我がなくて何よりだな
俺はすずかを立たせた

「・・・もしかして、大地君？」

「もしかしてじゃなくて大地だ」

「な、何で大きくなってるの？」

・・・っと、そうか。ガイアで成長してんのわからんわな

「詳しく話は後な。今は逃げとけ。」

「大地君はどうするの？」

「俺は・・・」

俺は体勢の直った口ボを睨んだ

「俺はあいつを倒す」

「む、無理だよ！」

「安心しな」

俺はさすがの頭に手を乗せて笑った

「お前も、学校みんなも、俺が護る。」

「!!!／／」

俺は少しずかの頭を撫でるとロボに向き直った

「・・・待たせたな」

「・・・」

「これ以上、お前の好きにはさせねーよ、ロボット野郎。」

「・・・」

俺はガイアの刀身を折った

・・・火は効かないな。
だったら！

「リロード!!!」

【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！サンダーモードー！】

こいつでっ！！

「牙突雷式！！飛雷牙突！！」

バチバチイツ！！

俺は牙突に雷を纏わせ、それをロボに飛ばした
それは一筋の光を残しロボを貫い・・・

あれ！？傷一つ無い！？

「嘘だろ！？」

【大地様！！どうやらあのロボは本体ではないようです！！】

「まじ！？じゃあどうすんの！？」

【本体の反応はロボの中心部分・・・コクピットです！！そこだけ
少し防御が薄いようなのでそこを壊して本
体を引きずり出すか・・・】

「クッ！だったらもう一度飛雷牙突を！？」

急に力が抜けて膝を着いた

「ぐっ……」

【先ほどの終夜様との勝負に加え、弾を6発も使ったんです!!これ以上は「何発だ?」……なにをする気ですか?】

「後何発リロード出来る? 答える。」

【……3発……それ以上は命に関わります】

3発か……

「……」

【大地様!! 来ます!】

ロボの拳が俺目掛けて振るわれた

「縮歩!」

目にも写らない速さのステップでその拳を避け

水の弾を3つ握る

相手の関節部分にそれを投げ、もう一度弾を握る

……ミサイル

縮歩デ回避

関節二投ゲ、弾ヲ握ル

「・・・？」

関節二・・・

side 終夜

大地の動きが変わった？

無駄な動きが一切無い・・・

それに加え、迷わず相手の攻撃に飛び込んで・・・

なんか、そう

・・・感情が無い機械・・・

・・・凄いな。

それに比べ俺は・・・！

俺は手から血が出るほど強く拳を握った

side out

・・・つぷ。

よし、彼奴の関節部分は全力濡れたな。
後は！

俺は氷の弾を6つ握った

もう一度あれを・・・

「縮歩！」

懐ニ潜リ込ム

肩、肘、膝ニ弾ヲ投ル・・・

ピキィィ！！

・・・つふう。よし、命中。

関節部分を凍らせたから彼奴は動けない！！
んで！

「リロード！！！」

【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！！サンダー
モード！！】

「コイツで終わりだ！！！」

〔牙突雷式！！迅雷牙突！！〕

俺はロボに向かい突撃した

でも、

「・・・!!」

ガキイン

「プロテクションだと!？」

ぐらっ

「っ!？」

「・・・!!」

砲撃!?

「くそっ!動け!!」

だめだ!力が!!

せめて・・・

「暗黒魔術!」

俺は暗黒魔術で目の前に障壁を張った
薄い!?!これじゃあ防げない!!

「・・・!!」

「グアアアア!!」

砲撃が直撃し俺は力無く地面に落ちた

「く・・・そ・・・」

俺は負けるのか？

みんなを守れないのか？

氷を砕き、自由になったロボが俺の前に来た
その時・・・

「だめえ!!」

「すずか!？」

すずかが急に俺の前に飛び出してきた

第8話 護る覚悟。（後書き）

作「ぼろぼろじゃないか!？」

大「俺弱い?」

作「それでもチート主人公か!？」

大「すまん。」

作「と、この後書はここまで。次のお話で!」

第9話 強く・・・（前書き）

さて！2話目です！

第9話 強く・・・

ロボが俺たちを踏み潰した
・・・はずだった

（動きが止まった！？）

「・・・！？」

ロボはすずかの姿を見て固まっていた

「・・・やるなら今しかない！！」

【大地様！！何を！？】

「オーバーストリート！！」

俺はガイアの制止を無視して雷の弾を“5つ”握った

【オーバーストリート！！！！雷×5！！フルドライブ・サンダー！！】

「貫け・・・」

オーバーリロードされた雷はガイアを包み込んでさらに、長く、鋭くなった

「迅！！」

突きの構え

「雷！！」

雷が激しく唸る

「一！！」

足腰に力を込める

「閃！！」

俺の視界はモノクロになり、世界は高速で流れ、次に世界が色を取り戻した時には俺はロボを貫いた後だった。

「いよっし！！」

【大地様！！ロボが後数秒で爆発します！！】

「じゃあ、早く！？」

ヤバイ・・・動けないや

【大地様!!早く!!?】

すずかも巻き込んでしまう・・・
くそっ・・・

【大地様!?!】

俺の意識はそこで途絶えた

side 終夜

「っ・・・間に合え!!」

俺は気がつくと走り出していた

・・・何となく

何となくだが、大地が動けなくなっている気がしたから駆けつける
用意はしていた

口ボを貫いた後、大地が気絶。

そして気がついたら駆けだしていた

「仕方ない・・・」

〔忍体術・疾風！！〕
はやて

俺は手で印を組み、“氣”を練り上げた
それを足に集めて

（地面を蹴るときに・・・）

解き放つ！！

すると、15m程さきのすずかの本に一瞬でたどり着いた
そしてすずかを抱えて大地に向かい跳んだ
俺は大地をすれ違い様に大地を抱えた
その直後、ロボが大爆発し、俺達はギリギリ助かった・・・

「危なかったな・・・」

さて、次の問題は・・・

俺は地面に着地するとすずかを立たせ、大地を寝かせた

「終夜君・・・？あなたは・・・何者なの？」

「・・・それは後で」

俺は大地の様子を調べた
すると・・・

「ごふっ!!」

「!？」

吐血!?

【大地様!？大地様!!大丈夫ですか!？】

「なんだ？刀が喋った・・・？」

【終夜様!!説明は後でします。今は大地様の治療に協力してください!!】

「とりあえず、わかった。俺はどうすればいい？」

【先ずは私を大地様の横で地面に突き刺して下さい。】

俺が言われた通りにやると大地を温かい光が包み込んだ

【これで傷はゆっくりですけど、癒えます】

「・・・じゃあ次は俺が治療させて貰おう」

俺は気を練り、大地に流し込んだ

【す、凄い・・・大地様の治癒速度が格段に上昇した・・・】

「気には与えた者の生命力を一時的に高める。まあ、俺のは生命力を“弱める”事も可能だが。」

まあ・・・好きな力じゃないけどな。

「さて、お前はなんなんだ？」

【・・・わかりました。全て説明しましょう】

俺はガイアから大地の力について詳しい話を聞いた

【・・・以上です】

「神の与えた力・・・」

そうか・・・俺が彼奴の隣に立って、彼奴を助け、護るには人智を超えた力が必要なのか・・・
俺にその力が、

俺は気絶している大地を見ていた

その力があればこんな事にはならなかった・・・

【終夜様・・・】

「・・・んう・・・」

「大地!？」

「あれ?終夜?」

「気がついたのか・・・」

【大地様！！】

「わりい、心配させたか？」

「まったく、お前は・・・」

普通こんな早く起きないぞ
まあ、一安心かな？

side out

「・・・とりあえずシードの封印を」

俺は痛む体を無理に動かしシードのもとに向かった
シードは光を失ったまま、地面に落ちていた

「あれ？光って無い？」

【おそらく、あの口ボに全ての力を使ったのでしょう】

「・・・道理で強いわけだ」

俺はガイアでシードに触れ、しまった

「・・・？人形？」

「これ・・・!？」

「どうした？」

すすかは俺が見つけた人形を拾った

「この人形は昔私がよく遊んでたお気に入りの人形でね・・・」

すすかは人形の頭を撫でながら

「最近無くして、探してたんだ。」

「なるほど」

あそこでロボが攻撃を中断したのはすすかがきたからで、あのロボを動かしたのが・・・

【この人形ですか】

「多分、捨てられた。と思って、主人の本に戻りたいっていう願いが強かったんだろ」

俺の推測が終わるとすすかが近寄ってきた

「大地君・・・」

「何だ？」

「助けてくれてありがとう。」

「前に言っただよな？可愛い女の子助けるのに理由は要らないのさ」

「・・・その笑顔はズルいよ・・・／＼（ボソッ）」

「で、すずか。」

「？」

「体が動かないんだ。終夜、呼んできてくれね？」

ドサッ

「大地君！？」

俺はそれだけ伝えると地面に倒れ込んだ

【無茶し過ぎです】

「うつせえー」

・・・校長達になんて説明するか？

・・・いや

悩む必要なんて無い。

全部ハッキリ言うだけか・・・

ただ・・・巻き込んだしまったなー

コレじゃあ力を貰った意味がない

強くなきゃな。

とりあえず、

今は寝るか。

俺は近づく終夜の姿を確認して意識を手放した

side 終夜

「無茶しやがって・・・」

俺は大地を背負って学校へ歩き出した

「大丈夫なの？」

「多分、な。疲れただけだろう。」

少しオロオロしていたすずかは俺の一言で安心したみたいだ

・・・コイツはとんだ女たらしみたいだな
・・・本人無自覚の

第9話 強く・・・（後書き）

作「しまらない主人公でした。（笑）」

大「もうしばらくしたら、今回出た技とかの説明を加えたキャラ紹介をするぜ！」

第10話 ココロノヤミ(前書き)

今回の簡単なまとめ

校長がかっこいい!?

イナズマ!?

大地のキャラが!?

新キャラ?

ラッキースケベ!

です。

終夜と話す『』の部分は子安の声で脳内再生お願いします。

第10話 ココロノヤミ

・・・ここは？

「気がついたみたいだね。」

「ふあゝあ」

むう・・・どうやらここは学校の保健室らしいな

「で？校長はなにを聞きに？」

「単刀直入に言おう。」

校長は一層険しい顔をした

「君は何者だい？」

「・・・信じてくださいよ」

俺はゆっくりと今までの事を話した

「んで？どうします？学校から追い出しますか？」

「・・・そんな危険な力は学校に置いておくままには出来ない。」

「ですよーだっ「ただ、」・・・？」

校長はにっこりと笑った

「君のその力は私達と学校を守ってくれた素晴らしいものだ。危険な力でも、君みたいな人が使ったら人を『守る』事ができる。」

「君は私達の生徒（教え子）だ。学校（い）に居て悪い訳がない」

「校長・・・」

「今日は帰ってゆっくりするといい。今日の授業は中断だ。また、元気に登校して来てくれ。」

「・・・はい。」

この世界の住人は心が広いな。

～日曜日～

まあ、土曜日は破碎と暗黒魔術の特訓に一日中瞑想してた
どうやら、破碎も暗黒魔術も、この世界の魔力とは違う魔力を使う
らしい。また、魔力の使用にも体力は使う
それを知らなかった俺は行動全てにいちいち魔力を使っていた、だ
からロボ戦で体力兼魔力切れになったらしい
っわけではらくは瞑想だな。うん。

「と、言いつつ。俺はフィールドに立っていた」

「なにいつてんだ？」

「キンスンナ」

「片言？」

はい。今日は翠屋JFC対不思議サッカー研究隊の試合の日です。
なんだ？不思議サッカー研究隊って？
っわけで今からキックオフ

「大地ー！！活躍したらお前の前欲しがってたパソコン買ってやる
ぞー！！」

「気合い入って来たー！！（「。□。」）」

「大地!？」

俺は審判に駆け寄った

「たんま!選手交代!！」

「え!？」

「竜!俺が変わりにフォアードに入る!！勇助!！変わりにキープ
ー入れ!！」

「お、おう」

「は、はい!！」

「奴らに格の違いを教えるぞ!！」

『お、おう!！』

そしてパソは俺の物だあ!！

フォーメーション

FD 火燃 大地

MF 風助 闇 林道

MF 雷戸 光

D F 水木 山本 真条

G K 勇助

ホイッスルが鳴り試合が始まった

「跪けえ！！！」

ボールを少し浮かすと大地が鳴動し光が右足に集まる

「ガイア・ゼロ！！」

右足に集まった大地の力を解放しボールを蹴った
大地を大きく挟るシュートは最早砲撃と呼べるものだった

ごばあああん！！

「ご、ゴール！！」

「フハハハハ！！泣き叫べえ！！」

く応援席く

「お兄ちゃん・・・怖い」

「後でお話ね。」

その後・・・

「グランド・ファイア！！」・・・火燃

「ギヤアアアア」

「ダーク・フェニックス！！」・・・闇

「へぶらあああ」

「ガイア・ゼロ！！」

「ガイア・ゼロ！！」

「ガイア・ゼロオ！！」

「イヤアアアア！！」

「フハハハハハ！！足掻け足掻け！！
全てこの私が破壊し尽くしてくれるわ！！
クハハハハ！！ハッハッハッハ！！」

『キャラ崩壊！？』

で、結果

翠屋JFC対不思議サッカー研究隊
361対0

「ハーツハツハツハー！！我は破壊者だ！！」
メシア

得点王

347点・・・高町大地

「よくやったぞ。大地。」

「これでパソ買ってくれるよね！！」

「勿論だ」

「やたー！！」

「さあ、みんな今日は良く頑張った。翠屋で昼飯だ！」

『きたあああ！！』

「よし！！いくぜ！」

がしい

？両肩を捕まれた？

「お兄ちゃんは」

「ちよつとお話だよ？」

「ふ、2人とも？」

目が光つてないよ？

「「覚悟はいい？」」

「ぬう・・・仕方ない・・・」

モードチェンジ。

「全ク、コンナ事ニ利用スルナヨ・・・」

「あれ？雰囲気か？」

「俺八剣・・・イヤ、今八大地力・・・ノ半身、ブレイ。二重人格
ダ」

「ふええええ！？」

「悪いガ見逃シテヤツテクレ。彼奴ハ彼奴ナリニ息抜きが必要ナン
ダ」

「ん？今あんた大地を剣つて呼ばなかった？」

「氣ニスルナ。」

その頃・・・

s i d e 終夜

俺は今公園を散歩している

考えているのは一昨日の事

昨日一日中家の忍の秘伝書を読んだが、人智を超えた力は無かった

「・・・どうすれば」

俺が途方にくれていた時、頭に声が響いた

『力が欲しいか？』

「！？誰だ」

俺が周りを見渡すと世界の色が変わり、俺以外の動きが止まった

『力が欲しいか？』

「・・・ああ」

『貴様は何故力を欲する？』

「繋がり、友を守るため」

『そのために自分がこの世界から外れた存在になってもか？』

「力が手にはいるなら!!」

『・・・いいだろう貴様に力をくれてやる』

俺の前に光り輝く青い石が現れた

「ジュエルシード!？」

『さあ、その石を握り、願うのだ。』

『力を寄越せと』

「・・・力が手に入るなら・・・」

「俺は悪魔にも魂を売ろう!!」

俺は石を強く握り締め
強く願った

「俺に力を!!」

俺は黒い光に包まれた・・・

side out

「気持ちいい」

「たまには親子で風呂もいいだろ」

「ですね」

今俺は父さんと絶賛入浴中だ。
たまにはいいもんだな

ゾワアア!!

「!？」

「ん？大地？」

「今は・・・ジュエルシード!？」

俺は急いで風呂場を飛び出し、なのはのもとへ行った

「なのは!!!今ジュエ・・・」

ああ・・・なんてバツタイミング

なのはもさっきの感覚に気づいたらしく
着替え中でした

「だ、大地？服は？」

「あ」

俺は風呂場から急いで来たので全裸
つまり、男の大事なところもノーガード

「キヤアアア！！」

「へぶらあああ！！」

今のは完全に俺が悪いな。うん。

しばらくして

「ガイア、反応は？」

俺達はガイアのレーダーを頼りにジュエルシードを探している
わざわざレーダーを使う理由は・・・

大規模な事件が起きておらず、場所がわからない。というのがあ

【公園です。ただ・・・】

「ただ？」

【既に結界が張られており、中に人・・・終夜様の反応があります】

『!?!』

「急ぐぞ!!」

俺達は全速力で公園に向かった

く公園く

「・・・ついたな」

公園の真ん中には終夜が立っていた

「終夜!!」

「・・・大地か」

「良かった。無事みたいだな。ジュエルシードを見なかったか？」

「・・・ジュエルシード? コレのことか?」

終夜は青い石を俺に投げた

「!?!」

「何でお前が持つてるんだ? とでも言いたいのか?」

「大地！大変だよ！」

「ユーノどうした！？」

「このジュエルシードは力が抜けてる・・・ただの石になってるんだ！」

「まさか！？」

俺は終夜を見た

最悪のパターンなのか！？

「お前は・・・俺に力が無いと言った。」

終夜はゆっくりと右手を上げる

「だから俺は力を求め」

肩の高さまで上げ、手を止め

「この力を手に入れた！！」

強く手を握りしめた

「終夜！！そんな危険な力に頼るな！！」

「・・・闇の力は闇に生きる俺が全て消す。」

「終夜・・・」

「構える大地。俺の力を見せてやる」

「終夜!!」

【大地様!!説得は倒してから出なければ効果が薄いようです!!】

「やるしかないのか・・・?」

「ガイア・グランザーヴ!!set・up!!」

俺はガイアを構えた
するとなのはが隣に立った

「私も協力するね。」

「いや、お前はさがつ「同時に来い」なんだと!？」

「いくぞ」

終夜は右手を前に出した

「シャドウ・・・set・up・・・」

「「!？」」

黒い影が終夜を包み込んだ

次第に人影を形作り、黒さが引くと、底には成長し、更にバサラ2
の猿飛佐助の衣装ver2を纏い、腰に大手裏剣を付けた終夜が立
っていた

「驚くのはまだ早い」

更に、終夜は幾つかの印を結ぶと影で出来た分身を作り出した

「さあ、これで2対2だ」

終夜は腰の手裏剣を手に取り、構える

「油断するなよなのは・・・」

「うん・・・」

「勝って終夜の目を醒まさせる！！」

ここに・・・忍と転生者の闘いの火蓋が切って落とされた！！

第10話 ココロノヤミ（後書き）

作「うゝん微妙・・・」

大「終夜が魔法の力を手に入れた・・・？かなりの強敵だな。」

「？？」『ちよつと俺様の出番もつと増やしてよ』

大「誰！？」

作「君は一応キーキャラの一人なんだから、増えるよ。」

「？？」『マジで！？俺様大感激』

つーわけで、今回はここまで。

感想やらなんやらお待ちしてまーす。

第11話 人生は不完全だからこそ楽しい。(前書き)

はい。連日投稿です。

うゝん戦闘描写が難しい・・・

後、後書にちょっとしたアンケートみたいなものがあるんで協力お願いします。

終夜の分身の声は子安さんで(笑)

第11話 人生は不完全だからこそ楽しい。

大地対終夜

「ハアアアア！」

「遅い」

ガキイン

「まだまだあ！！」

俺は終夜に対し高速で斬撃を与え続けた

ガキキキキキン！！

終夜は全て一歩も動かず防ぐ

「そこ。」

「っ！！」

どっっ！！

斬撃をよけた蹴りを放ってきた

俺は防御出来ず、まともに食らい、後ろにとばされた

「強い・・・」

「・・・」

「でもよ・・・」

「!？」

終夜の足元には大量の火の弾が落ちていた

「こいつでどうだ!!」

ズドオオオン

火の弾は爆発を起こした

「よし!!」

「・・・何がよしなんだ？」

上から終夜の声が聞こえ、見上げると宙に浮く終夜がいた

「飛んでる!？」

「此方からいくぞ・・・」

終夜が印を組むと5つ大きめの漆黒の魔力弾が現れた

「魔法!？」

シャキーン
「影の弾」

終夜が手を此方に向けると魔力弾が此方に迫ってきた

「（速さはそこそこだな・・・なら！！）^{ジャンプ}疑似移転！！」

俺は魔力弾を引き付けてから暗黒魔術で終夜との距離を縮めた

「牙突参式！」

「あまい。」

終夜は牙突を受け流した

ドドドドド

「かはっ・・・っ・・・いび弾・・・？」

先ほどよけた弾が後ろから直撃した

「忍体術・・・浮雲・乱空」

ドカツ！！バキッ！！ズドッ！！ガッ！！ゴン！！

終夜は追い討ちに5連続の足蹴りで俺を叩き落とした

「俺はお前を超えた・・・これから俺がお前を護る」

s i d eなのは

なのは対分身

「いやーまさかこんな事に成ると思わなかったな」

「え、えーと・・・」

「油断しちゃ駄目だよ・・・何かを狙ってるのかも・・・」

「いやいや。なーんにも狙って無いから。お嬢さんもそんな構えなくともいいって・・・」

な、なんか調子狂うの・・・

「俺は戦う積もりはないんだよ。」

「・・・」

「俺はジュエルシードの中の『意思』で、ちょっとした目的があつて宿主を探してたのさ」

嘘臭いの・・・

「俺はジュエルシードの意思の唯一の光でさ。他の闇の意思を抑えたいだけなんだよ・・・おねがーい信じて」

「・・・」

「酷い！！そんな目で見ないで！？俺様泣いちゃうよ！？」

・・・うざっ

「レイジングハート？」

『な、何でしょう・・・』

「デイベインバスター撃って良いよね？」

『マ、マスターしかし・・・（ブルブル）』

「い・い・よ・ね？」

『all right!!』

「・・・デイベインバスター!!」

「え！？ギヤアアア!!」

「・・・ご愁傷様・・・」

スッキリしたの!!

そっだ！これからは悩んだらデイベインバスターでスッキリするの！！

作：テレテツテテゝなのはは魔砲少女に転職した。

「話し・・・聞いてくれよ・・・（ガクッ）」

side out

大地対終夜

「・・・な」

「!？」

俺はガイアを杖代わりにし立ち上がった

「ふざけんなよ・・・」

「（あれだけの攻撃を受けて立つのか!？）」

「力が有るだけで人が護れるのか？違うだろ？」

暗黒魔術で自身の治癒力を全開にして傷を少し治した

「大事なのは心だろ!!」

「・・・知ったようなことを言うな!!」

「!？」

「力だけで人が救える訳じゃ無い事ぐらい知ってるさ・・・力で人が傷つくことも・・・」

「だったら何故力を求める!？」

「繋がりを守るためだ。」

「？」

「お前みたいな奴には解らないだろう。繋がりを失う辛さが・・・」

「大切な繋がりを自分で断ち切ったつらさがな!！」

「自分で断ち切った・・・!? 終夜・・・一体何が・・・」

「貴様に何が分かる!?!」

終夜は俺に大手裏剣を投げた

「ちっ・・・」

がいん!!

俺は大手裏剣をガイアで弾いた

「たたみかける!!」

終夜は魔力で大量のクナイを作り出した

「シャドウダガー!!」

「リロード!!」

【リロード・・・氷、氷、氷・・・トリプルアイス!!アイスモード!!】

「凍り付く波動!!」

俺はガイアから衝撃波を出し、シャドウダガーを凍らせた

「オーバーリロード!!」

【オーバーリロード!!!!雷、火、雷、火、光!!The・legend!!】

「闇を滅ぼせ!!」

聖なる雷火がガイアを包んだ

「ギガスラツシュ!!」

「ぐあっ!？」

聖なる斬撃が終夜に当たり、終夜がのけぞった
ここでたたみかける!!

「シャイニング!!」

俺はガイアを掲げた

そこから光が発生し公園全体を包み込み終夜を攻撃した

「ぐうう・・・」

この攻撃はジュエルシードの力を低下させ、暴走を止める力がある、
これで!!

「まだだあ!!」

だけど終夜の変身は解けていなかった

「嘘だろ!？暴走が止まらない!？」

「当たり前だ・・・俺は力を使いこなしてる。」

「!？」

「これは俺の意志だ！！俺は俺の意志でお前と戦う！！」

シャドウショット
「影の弾！！」

「ぐあっ！！」

俺は避ける事が出来ず、もろに攻撃を食らった

「ハアッハアッハアッ・・・」

「フーツ・・・フーツ・・・フーツ」

「次で決める・・・」

「いい加減めえ覚ませよ・・・」

俺も限界ギリギリ・・・
次で決めるしかないな

「リロード・・・」

【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！！サンダーモード！！】

「忍体術・・・奥義・・・」

〔牙突雷式!!雷牙!!〕

〔影斬り!!〕

ガキーン！！

技を打った直後俺たちは場所が入れ替わり背中を向けあって立っていた

「・・・俺の勝ちだ」

終夜はその場に倒れ・・・

「と、言いたいけど引き分けかな？」

俺も倒れた。

「俺は・・・弱い・・・」

「なあ、終夜・・・なんでそんなに力にこだわるんだ？」

「・・・俺は自分の手で大好きだった両親を殺した・・・」

「!？」

「俺は・・・両親から忍の技を教えてもらった・・・」

俺の一族は忍の技を受け継いできた。

しかも俺たちはその中でも特殊で“氣”を使った技を使える一族だった

まあ、一族といっても生き残っているのは俺たちだけだったが。

俺は両親に沢山の愛情を注がれて育った

俺は気の扱いに天性の才能があった。

俺は両親に褒められるのが大好きだった。

で、ある時。俺は両親に褒められるため身の丈に合わない技の習得をしようとし

・・・・・・暴走した。

しかも気が暴走するだけで偶然自我が飛ばなかった。

だから俺は俺がこの手で両親を殺した瞬間を今でもはっきり覚えている

俺はしばらくショックで立ち直れなかったがあるとき家の地下室に迷い込んだ

そこで俺は家の掟を発見した
本来は相当な量の氣と技術がないと読めないのだが俺はそれを完全に理解できた

そこにはあることが書いてあった

忍の力を学ぶ者には1度身の丈の合わない技に挑戦させ、技の危険性を体に覚えさせる。と

どうやら俺はその試練をやらされた時に両親を殺したらしい
本来なら死ぬことは無いのだが・・・
俺の持っていた中途半端な力のせいで両親は死んだんだ。

しかも掟の中には
忍に重要な冷酷さを手に入れるため必ず親を自らの手で殺させる。
と書いてあった

俺は正直絶望した。

俺はこの力を守るものだと思っていたからな。

俺は決意した。

中途半端じゃない、完璧な力を手に入れて
こんな掟のある『闇』の力は同じ『闇』に生きる忍の俺が消す！

「そんなことが・・・」

「だが結局『完璧な力』なんて・・・」

「完璧なんて楽しくないぜ？」

「？」

「完璧になっちまったら他人とのかかわりが無くなる。成長が無くなる。」

「人生も、世界も不完全だから楽しいんじゃない？」

「！？」

「自分に足りないなら他人に頼ればいい。な？」

「・・・ああ、そうだな。」

「だろ？」

（・・・俺がこいつに勝てるわけがないな・・・）

「へへっ！！じゃあ終夜！！俺から頼み事だ！！」

「なんだ？」

「ジュエルシード集め、手伝ってくれるか？俺にはお前の力が必要だ。」

「！？・・・ああ！！」

「・・・なんか俺たちの出番少なくなね？」

「気にしちゃいけないの。またデイベイン・バスター撃たれたくないなら黙ってようか？」

チャキ・・・

「すみませんでしたー！！」

第11話 人生は不完全だからこそ楽しい。(後書き)

終夜との和解!!

そして終夜の設定が色々めんどい!!

大「次回はキャラ説明です」

終「技の詳しい説明とかがあるぜ」

んで、アンケートってのは・・・
プレシアを生かすかどうかです。

プレシアがいるかどうかでこの後の話に影響が出るんで・・・

じゃあ！お待ちしています!!

オリキャラ図鑑？（11/27更新）

高町大地

見た目

円堂大人版の髪型にロックマンZXのヴァンの顔を組み合わせた感じ。なお、瞳の色は茶色。

なんだかんだいって意外にイケメン。

理由は神がめんどくさがって前世の体を流用したため。

自身の気の量はほぼ無限。但し、体がそれにリミッターをかけている。通常時でも常人の10倍以上の気がある。終夜の感じた気の量は大地の気のすべてのほんの一部にすぎない。

技

牙突：形により様々なに変化する平突き。大地はよく使用する

PURROMINENSU：ガイアを叩きつけ太陽のプロミネンスを擬似的に発生させ攻撃、攻撃射程圏は高さ15m距離20km。火の弾3個使用

凍り付く波動：ガイアから衝撃波を飛ばし、当てた物を凍らせる。

氷の弾3個使用

ギガスラッシュ：某有名RPGの技そのまま。The・legge ndでないとは打てない。

同系統にギガブレイク、ギガクロスブレイクがある。

が、

legend 1 度にギガスラッシュは4発撃てる

ギガブレイクはギガスラッシュの2倍、

ギガクロスブレイクは4倍のエネルギーを使う。

シャイニング…あの神作ゲームの主人公の技、浄化作用がある。

縮歩…縮地のステップ版、大地は縮地を使用出来なかったので仕方無くこうなった。

クラッシュ
破碎…フェアリーテイルの魔法の1つ。触ったものを壊す力がある。

暗黒魔術…自分の視線を媒体とする魔術攻撃。使用時のみ瞳の色が深緑色になる。

ダッシュパンチ…高速の踏み込みからパンチへ繋げる。専制に持つて来いの技。

但し、攻撃の筋は単純なので防ぎやすい。

Mode Change

スーパーモード…体にかかっている気のリミッターを1つ解除した状態。

使える気の量が上昇し、身体強化がされる。

髪と眉毛が金色に光り、瞳が翡翠色に。名は、スーパーサ○ヤ人から。

他のキャラからの一言

S「賑やかなやつだよ」

A「一緒にいると楽しいわね。」

N「自慢のお兄ちゃんなの！」

影乃 終夜

見た目

ロッキーマンZXのジルウエ。ただし、眼鏡はつけていない。

性格

冷静沈着。親を殺していて、自分の力を含め、闇の力を嫌っている。大地のよき理解者で。大地との勝負の後力に対しての考えを改め、もともとその雰囲気があったのだが、バトルマニアになった

ジュエルシードにより魔力に目覚めた。自分の魔法に気を混ぜることによりベルカ式でもミッド式でもない魔法を使う。最大の特徴として、魔法の使用時に魔法陣が出ないことがあげられる。

気の量はかなりあるほう。ただ、どちらかというと、大量に開放するよりは細かく操作するほうが得意。なので、魔法との併用は威力の底上げになっている。

両親を殺してしまった原因の忍術の副作用で、精神年齢が小学3年

生にしては高め。家事全般は得意である。

技

忍体術・疾風…気を脚に溜め高速で移動する。

忍体術・浮き雲…乱空…高速で5回の蹴りを与える。魔力との併用により空中での乱舞が可能に。

影の弾…自動追尾の魔力弾。汎用性が高い。多少気が混じっている。

シャドウ・ダガー…漆黒のクナイを大量生産する。多少気が混じっている。

影切り…高速で相手に近づき、すれ違いざまに1撃で相手を沈める。

斬空…魔力と気を練り合わせたものを脚に乗せ、斬撃にして飛ばす。練りこみの純度が高ければ厚さ10?ぐらいの鉄板も切れる。

忍体術・空蝉…攻撃を受けると同時に影分身と入れ替わり、相手の上から強襲するカウンター技。

影分身…気と魔力で作り上げた影の分身。実態があり、任意でコントロールすることもできる。

忍体術・流転…相手を高速で回転させ、平衡感覚を奪う技

忍体術・振頭…相手の脳に気を直接たたきこむ技。最大まで手加減すれば脳震盪で済むが、全力だと脳が破裂する。普通の威力でも相

手は死んでしまう。血が出ないので、暗殺にむいている。
ちなみに終夜はこれをマスターしており、脳の特定の部分に気をあ
て、動きなどを制限したり、魔法を使えなくしたり出来る。

Mode Change

B (Blue)・S (Shadow)・M (moon)モード…シ
ヤドウがもともとジュエルシードであることを利用した姿。
ジュエルシードの願いをかなえる力を自身の力として引き出し、操
作するもの。

ジュエルシードの力自体が不安定なので持続時間は3分と短い。
名前の由来は使用時の終夜が青白く光っていることから。

他のキャラからの一言

D「気の使い方教えてくんね？」

K・T「なかなか面白い戦い方だな。今度試合してみないか？」

S・T「将来が楽しみだよ。今度家で修業しないか？」

デバイス

シャドウ (CV子安武人)

見た目 (人型時) : BASARAの猿飛佐助

終夜の願いがジュエルシードで叶えられ、誕生したデバイス。
もともとジュエルシードに眠っていた意思が具現化したもの。

終夜は魔力に気を練りこんで使うので半分忍術化していて、魔法陣が現れない。

特別なデバイスで一応インテリジェントデバイスの分類に入るが人型になれる。

性格

陽気でお調子者などところがあるが、しまるところではしっかりしめる。

正直、バサラの佐助そのまんま。大地いわく『これ、糞神あいつの差し金じゃね?』だそうです。

特殊機能

Jシステム：ジュエルシードの願いをかなえる力を自身の力として引き出し、操作する。

元がジュエルシードのシャドウならではの能力。

イメージ画像（武器本体）

> i 3 5 9 3 2 — 3 7 3 2 <

作：下手な絵ですみません。

その他

日野ひの 火燃かねん

翠屋JFCのメンバー、炎系の技を使う。イメージは豪炎寺。

宮之みやの
風助ふうすけ

翠屋JFCのメンバー、風系の技を使う。イメージは松風天馬。

無風むふう
林道りんどう

翠屋JFCのメンバー、林の技を使う。

曇天どんてん
雷戸らいど

翠屋JFCのメンバー、雷系の技を使う。

日月ひつき
光こう

翠屋JFCのメンバー、天空の使徒の使う技を使う。

日月ひつき
闇やみ

翠屋JFCのメンバー、魔界軍団Zの使う技を使う。

水木みずぎ
小池こいけ

翠屋JFCのメンバー、水または氷の技を使う。

山本 岩 やまもと がん

翠屋JFCのメンバー、岩系の技を使う。

真条 真 しんじょう まこと

翠屋JFCのメンバー、技は無いがスキルが多い。

前野 勇助 まえの ゆうすけ

翠屋JFCのメンバー、青いゴットハンドなどを使う。イメージは立向居。

親父

この作品のジョーカーキャラ
大地が『親父』と呼ぶ大地の前世の父親。
大地いわく超絶自信家で実際超強い。
どんくらい強いか？というと、転生者がどれだけ強いスキルを持つ
ても、それを使わせる前に倒せるらしい。
一応普通の人間。

オリキャラ図鑑？ (11/27更新) (後書き)

11/27 シャドウイメージ画像追加

第12話 日常・・・でも俺には平穩がない（泣）（前書き）

最近は時間がなかったんで、名（迷）言コーナーができていなかったけど、今回からふつかっつ！！

それじゃあ・・・いってみよう！！

『言っただ、オレは格下は相手にしねーんだ。』・・・リボーン（家庭教師ヒットマンREBORN！）

第12話 日常・・・でも俺には平穩がない(泣)

「ねみいー」

「だからといって学校で寝るな。」

「起こす苦勞も考えてよね。」

「善処する」

【いや、やる氣無いだろ・・・】

はい、という訳で俺は今学校です。

因みにシャドウもとい猿飛佐助は音楽プレイヤーになって終夜の首にぶら下がってまゝす

え？シャドウが佐助って名前になった理由？

それはシャドウが

『シャドウよりもカツコイい名前で呼んでくれね？』

と言ったから俺が付けた

人型はBASARAの猿飛佐助にそっくりだからな

「に、しても俺に様々な殺氣が向けられてるようだが・・・なぜ？」

・・・死なないから別にいいけど

く昼休みく

いつものメンバーで昼食を取りつつ俺はパソとガイアを繋げてパソを改造・・・等と考えていた

「大地!!」

「・・・うつさいなく何だよアリサ？」

俺がアリサの声に反応するとすずかとなのはが落ち込んだ

【ほー。なのはやすずかが呼びかけても反応しなかったのにアリサには1発で反応したねく】

「・・・まさにバカップル（ボソッ）」

「ん？終夜、今何か言った？」

「何でもない」

「そうか？んで、なんの話だっけ？」

「やっぱり話聞いてなかったのね・・・」

「その出来の悪い息子を見るような目をやめない？」

アリサは少し溜め息をついた

「将来の夢よ。」

「なーる」

「それで。あんたの夢は？」

「うーん・・・その前に一度みんなの夢をききたいかな」

「わかったわ」

「じゃあ、俺から順に言うな」

「りょーかい」

終夜がはじめに言うことになった

「俺は忍としての腕を磨いて世界の強者と戦う。」

・・・バトルマニア？

次にすずか

「優しくて強い人のお嫁さん♪」

・・・何で俺を見て赤くなる？
んで、なのは

「お兄ちゃんのお嫁さん！！」

「つまらない冗談だな」

「むうー冗談じゃないの!!」

はいはい、兄をからかうのはやめようね
最後にアリサ

「とりあえず大学に入って、科学分野に進む。かな」

「科学か!!お前らしくていいじゃん!」

「そ、そう?」

パシイ

「え!?!」

「応援するぜ!」

俺は勢いでアリサの両手を握った

「え・・・あ・・・ありがとう!!!!」

アリサは手を握られたのが恥ずかしかったのか頬を赤らめた

「うん。可愛いよお前。何なら俺と結婚する?」

「けけけ!!結婚!?!」

「釣り合わないのは解るけど、お前がいいなら・・・な?」

「う．．．あ．．．える．．．／／／」

「．．．冗談だ。」

「っ！？大地の馬鹿あ！！」

「ははっ！捕まえてみな」

俺はからかいで怒ったアリサとの追いかけっここが始まった

「バカップル．．．」

「いいなゝ羨ましい．．．」

「．．．あいつらは何を言ってた？

閑話休題

「悪かったって」

「ふん!!」

少しからかい過ぎたな・・・仕方ない。

俺は前世でこれやられるの大好きだったし、アリサともそれなりに仲良いから平気だろう、きつと

ぎゅっ

「「「!?!」」」

【ひゅゝ・・・やるねえ・・・大地の旦那】

【しかし・・・これは少しやり過ぎでは?】

「!?!?!? / /」

「これで許せ、な?」

俺はアリサを抱き寄せて頭を撫でた

「し、しかたないわね。あ、あ後少しこのままでいたら許してあげ

る／／」

「ハイハイ。わかりましたよ。お嬢さま」

ぎゆうう

「あっ・・・／／」

俺は少しばかり抱き締める力を強くした

「・・・大地のバゝカ・・・／／／／」

「っ!」

幸せそうな顔しやがって・・・
くそっ・・・可愛いじゃねーか

「なんか2人だけの空間が・・・」

「ブツブツ・・・（黒）」

「ブツブツ・・・（黒）」

「・・・モテる男は辛いな・・・大地・・・」

「大スクープはっけええん!!」

カシャツ
×5

「ふ、風助!？」

「忍の俺が気配に気付無かった!？」

「そこお!？突っ込みそこお!？」

「そっだな・・・見出しは『大地×アリサ!まさかの熱愛発覚!？』」

かな？」

「ちよっ！なんでそうなるのよ！！」

「そうだ！！何でアリサが俺なんかと付き合う事になってんだ！？」

「馬鹿！！」

「いだっ！！」

何で殴られた！？

「この記事なら新聞の一面を飾れる！！早速文をまとめなくては！！とおう！！」

風助は柵を乗り越え屋上から飛び降りた

「！？待てっ！！」

直ぐに柵から見下ろして見ると風助が2階の窓から校舎に入るのが見えた

「くそがああああ！！」

俺も同じ行動を取り、風助を追いかけた

「・・・大地はまだわかるけど風助・・・あいつは人間か？」

「生身で壁蹴って登れるひとに言われたくないと思うけど・・・」

「すずか？それは意外と傷つくぞ・・・」

くしばらくして教室

「に・・・逃げ切られた・・・」

何だあいつ！？
何が

『新聞記者の執念！見せてやるぜええ！！』

だよ！！

速すぎだろ！！

どんな新聞記者だ！？

「遅かったな」

「・・・」

「どうやら、捕まらなかったみたいだな。」

「へんじがない ただのしかばねのようだ」

「じゃあまた放課後な。」

もう、今日は寝よう・・・

「寝るな!!」

「いだっ!!」

くそう・・・

クスクス

女子。俺とアリサを見て笑うんじゃない

「ちっ・・・リア充め」

「リア充爆発しろ」

「M O G E R O」

そして男子。意味の分からない言葉を使うな。
俺のどこがリア充なんだ？

代わりたきゃ代わってやるよ。
喜んでな。

「放課後」

「なのは？　ずずか？　歩きづらいんだけど？」

「お昼の時間の分今ここで相手してもらおうね、ずずかちゃん」

「うん」

俺は今右手になのは、左手にずずかが抱きついてる

「アリサ、助けて」

「ふん！！」

「放置？　俺泣くよ？」

「あ、そういえば。」

終夜が何かを思い出したような反応をした

「大地？　結局お前の夢ってなんなんだ？」

「あ」

「そういえば」

「聞いてなかったね」

4人の視線が俺に向く

「そんなにききたい？」

「「「うん」「」」

「俺の夢はな・・・」

「夢は・・・」

「ない！」

ズルツという音と共に4人はコケた

「『『『無いの!?!?!?!』』』」

「無い!」

「大地……」

「あんだねえ……」

「だってよー将来を考えるってことは未来を限定するってことだぜ? つまらなさすぎだろ?」

「『未来は無限大』ってな。自分の人生自分で作って過ごしたらつまんねーよ。何が起こるかわからねえ。だからこそ人生は楽しいんだ。」

「お前らしくていいじゃないか。大地?」

「だろ?」

「……考えるのが面倒くさいだけじゃないの?」

ギクウ！？

「ソ、ソシナコトナイヨ」

「凶星ね」

アリサ！何で見抜くんだよ！？

「あんたの考えなんてお見通しよ」

不幸だ・・・

【（大地の旦那・・・なんかまるで妻に隠し事ができない夫みたいになってるんだけど？）】

第12話 日常・・・でも俺には平穩がない（泣）（後書き）

さて、前回質問みたいなのがあったんでここに一応書いておきますね。

アンケートの期限は詳しくは決めません。

話でプレシアが管理局に捕まるまで、つてことにします。

サイバスターさん、勝手に期限を変えてすみません。

と、いうわけで感想やら質問やらまってまっす。

では

「またな!!」

第13話 『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』（前書き）

すみません！週末になるまで時間がとれなくて・・・

じゃあ！名（迷）言コーナー！！

『いったいどのあたりが『はんせい会』なんだよ！』・・・クロノ
（クロノ・トリガー）

さすが主人公！！どつかのKYとは書くが違う！！

大「クロノは神作だ！」

ですよねー！！

ちなみに今回はフェイト登場回です！
やっとここまで来た・・・

さて、フェイトにフラグを立てるのは誰だっ！！（今回はまだ立たないけどww）

第13話 『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』

おはよーございまーす！！みんな大好き大地君だよ？

・・・うえ、きもつ。やつぱやるんじゃなかった・・・
というわけで大地だぞこらア。今日はすずかの家にお呼ばれされた
ぜ！！

さて、今はバスの中。メンバーは俺、なのは、恭也、の3人だ。
恭也はすずかの姉、忍さんに会いに行くらしい。

・・・まあ、行くときに美由紀にジト目で見られてたな。

そうそう、終夜も来るぜ？

ふっふっふっ・・・あいつは私服で来るらしい。

今日はいいつに伊達眼鏡をかけさせる！！

ジルウエのコスプレをさせるのだああああ！！

「はーはっはっはー！！」

「バスの中で騒ぐな！！」

「すまそ・・・」

くすずかの家の前

でっかいな～うん。

ん？その前にいる人って・・・

「遅かったな？」

やっぱり終夜か。

服装は白いズボンに黒のＴシャツ、その上に赤いジャケット。
赤い靴に黒い指の出るグローブをはめている。

・・・うん、コスプレさせる必要ない。まんまジルウエです。
ごちそうさまな感じです。

「すまんすまん。なのはの準備が長くてな。」

「ふえ？私のせい？」

「こら大地、あまりなのはをいじめるなよ？」

「おいっす」

ピンポン

俺たちがインターホンを押すと中からきれいなメイド服を着た人が
出てきた

やっべー！！本物のメイドじゃん！！イイネ！！なんか！！

ぎゅううう

「なのは？足踏んでる。」

「気のせいだよ。」

「・・・」

「えっと・・・なのは様に恭也様、大地様と終夜様ですよね？」

「なんか・・・すみません・・・家の兄弟たちが・・・」

「恭也さん、ノエルさん、こいつらはいつものことなんで、気にしなくていいですよ。」

「そ、そうですか・・・では、こちらに。」

俺たちが部屋に着くとすでにそこにはさすがとアリサがいた

「あ！なのはちゃん！それにみんな！！」

「おまたせー」

「なのはちゃん！いらっしやい！！」

キター！メイドキター！！

「はじめまして、高町大地と申します。」

「なんで急にあらたまるんだよ・・・」

「恭也いらっしやい。」

「ああ。」

「なんかあつちはあつちで2人だけの世界入ってるし・・・」

「お姉ちゃんと恭也さんはラブラブだからしかたないよ。」

「お茶をご用意いたしましょう。皆様、何がよろしいですか？」

「任せるよ。」

「私も、お任せします。」

「俺は結構です」

「俺も、自分で持ってきているので。」

「かしこまりました。ファリン？」

「はい、了解です。おねー様」

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから。」

「はい、そちらにお持ちします。」

ノエルさんとファリンさんは礼をして飲み物を取りに行った

「なんでそんな物足りなさそうなんだよ・・・」

「うるへー」

俺たちはそれぞれ席に着いた

「おはよー」

「おはよーさん」

「あんた・・・学校ではよく寝るのに朝は平気なのね・・・」

「いいか？アリサ？学校は寝るためにあるんだ。」

「いや、違うから。」

え？

「何言ってるのこいつ？みたいな顔するな。お前が間違ってる。」

閑話休題

お茶をしつつ話をして結構もり上がった

「よっ、はっ、とっ」

「すごい！！」

「・・・佐助の忍術見てるだけじゃねーか。」

「まあまあ。楽しんでくれてんだからいいだろ？」

「っと！忘れるとこだった。すずかー！」

「？」

俺はバッグの中から人形を取り出しすずかに渡した。

「ほれ、頼まれたもんだ。」

「ありがとう！！直してくれたんだ！！」

「頼まれたもんだからな。」

「なかなか上手く出来てるじゃないか。」

「俺の特技は裁縫だぜ？（ドヤア）」

「ドヤ顔はやめとけ。」

俺らが下らない漫才をしていると佐助がふらふらとちかづいてきた

「旦那後は任せた」

「？」

「じゃー！」

どうやら忍術の見せるのに疲れたらしい。

「・・・仕方ないな・・・じゃあこいつでも聞かか？」

終夜はポケットからハーモニカを取り出した

「得意なのか？」

「一応音楽は好きでね。・・・子供のころよく父さんが聞かせてくれたんだ・・・」

終夜は父親のことを思い出したのかさびしそうな目になった

「そうか・・・」

「じゃあ・・・なんにしよう？」

ズルッ！？（こける音）

決まってるのかよ！？

「あーじゃあこれで。」

俺は持っていたメモに楽譜を書いた
俺も音楽は得意だからな。

「これは？」

「『歌う山』俺が前世で好きだったゲームのBGM」

「わかった。いくぞ。」

終夜は近くの木にもたれかかりハーモニカを吹き始めた

♪♪♪

「きれいな音色・・・」

「もともといい曲だけど・・・ここまできれいに吹けるとはな」

「・・・ふうこんな感じかな？」

「サイコーだったぜ!」

「プロみたいだったよ」

「それはよかった。」

キイイイン

「「「!?!」」」

これって・・・ジュエルシード!?

どうやらなのは達は念話でなんか話してるし・・・

あれ?俺って仲間はずれ?

・・・ぐすん。泣かねーよ・・・悔しくなんてねーんだよ・・・

【(大地様!!シャドウから通信が!!)】

どう出ると!?

【(念じるだけで構いません!!)】

了解!

【(大地の旦那ア!俺たちは用があるってことで席をはずすから、旦那となのはちゃんは今から逃げるユーノを追いかけるんだ!!)】

yes sir!!

【(英語?)】

気にすんな!

【(はあ・・・)】

よし!!!作戦実行だ!!!

side out

side 終夜

「なのは！大地！」

「あ！終夜君！！」

あれ？大地の反応がないが・・・？

【終夜様、それが・・・】

（事情説明）

「はあ？」

大地自身は魔力を持ってないから結界を張る前にガイアを手放すと結界内に入れない。
んでユーノが結界を張る直前にガイアを落として結界の外に取り残されたってか・・・

「妙なところで抜けてるなーこいつ。」

「あははは・・・」

「仕方がない、ガイアは俺が持つておこう・・・」

【その心配はありません】

ガイアを光が包むとそこにはオールバックの髪型の強面気味の男性が立っていた

やくざのような雰囲気があるが服装からして侍なのか？

「お前もなれたのか？」

「いや、佐助の魔力に充てられたのが原因だろう」

？口調が変わった？

「これが俺の本来の口調さ。デバイスのなら言葉づかいじゃないほうがいいと思ったからな。」

「へえ。つと、じゃあ、急ごうか？」

「「「はい（おう）！！」」」

ズシイン

『にゃ〜』

「え・・・？」

「ふえ・・・？」

「こゝこれは・・・？」

「大きい子猫・・・？」

俺たちの近くに異常な大きさの子猫が立っていた。

「な、なんなんだ？これ・・・？」

【だ、旦那・・・あいつはおそらくジュエルシードの力であの猫の『大きくなりたい』って願いが正しくかなったもんだろ？】

「・・・大きくなるってそういうことじゃないだろ・・・お前らってそこらへんてきとうだよな？」

【細かい作業とか人の意思をくむとか苦手なんだよ・・・まあ！俺は違うけどな！！】

「そうか。それじゃ、このままでも危ないし、はやく終わらせようか？」

「そ、そうだね。あの大きさじゃすずかちゃんも困るだろうし・・・」

『にゃ〜』

「任務・・・巨大化した猫からジュエルシードを回収。
条件・・・猫にはなるべく傷をつけない。

・・・任務受諾、これより任務を遂行する。」

「・・・旦那、それ必要か？」

「現代の忍は個人的な依頼をこなすのが仕事だったからな。つい癖で。まあ、今は俺しか忍はいないから任務なんてなかなかないけどな。」

「へ、へえ・・・」

「次は状況の確認だ。」

俺は任務対象を見た。

「・・・様子からして攻撃の意思はなし。危険度もそれほど高くない。」

それに加え今は結界の中、人に見つかる心配はない。

こちらの戦力は高速戦闘特化1、遠距離狙撃特化1、接近戦闘特化1、防御専門1。

とくに問題はなさそうだな。では、これより任務かいs・・・」

俺が任務開始の合図を出そうとした瞬間黄色い魔力弾が任務対象を襲った

「!？」

「何だ!？」

俺たちから少し離れた電柱の上、そいつは立っていた。

・・・俺と同じ綺麗な金色の髪を持つ可愛らしい少女が立っていた。だが、その綺麗な髪とは対照的に瞳には深い闇が見えた。

そう、大地に会う前の俺のような『闇』が・・・

こついう奴は放っておくと壊れる。

俺は他の誰にも俺と同じ思いなんて味わってほしくない。

俺の『闇の力』はこつゆう『闇』を持つ奴のためにある。

「バルディツシュ、フォトンランサー、連撃。」

俺は金髪の少女が猫に向かい魔力弾を放つ体制になった瞬間、俺は動いた。

ガキイイン!!

俺は右足で少女の武器を蹴りあげ攻撃を中断させた

「撃たせるわけにはいかないな。」

「！？（速い！！）」

少女はすぐに後退し、俺の間合いから出た。

「なのは！ガイア！ユーノ！封印は任せた！」

「はい！！」

「この人・・・強い・・・」

「任務変更。内容、魔導師の足どめ。対象、魔導師の少女。」

俺は対象をしっかりと視界にとらえ、構えをとった。

・・・この子の持つ『闇』を無くすためにも今は倒す。

大地は闇を照らす『太陽』・・・

なら俺は・・・

「・・・任務開始・・・！」

俺は太陽のが上がるまで人を導く『月』になる!!

第13話 『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』（後書き）

あーはっはっはっはっ！！何この主人公！！結界内に入れないでやんの！！（爆笑）

大「くそがああああ！！！」

終「まあまあ。」

大「放せ！終夜！！こいつだけは粉碎で粉々にするんだ！！！」

今回は終夜とフェイトの戦闘回だからおめえの出番はねえ！

大「ええ！？次回も！？」

無印編は大地より終夜が主人公っぽいけどなww

大「うそん」

まじでww

大「orz」

と、いうわけで次回をお楽しみに〜！

第14話 あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？b y

お・れ・のターアアアアン！！

大「何が！？」

というか今回は終夜×フェイトのターアアアアン！！

大「俺のターンは！？」

AS編に大地×アリサのターアアアアン！！
があるよww

大「アリサの突っ込みに俺がどこまで耐えられるかでも実験すんの
！？やめて！！身が持たない！！」

今回の題名に大地が勝手に出てる件について（笑）

大「話を逸らされた！？」

じゃあ名（迷）言！

『粉碎 玉砕 大喝采！！』・・・海馬瀬戸（遊戯王）

第14話 あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？b y

side 終夜

まずは小手調べ・・・

「さんくう斬空！！」

魔力と気を混ぜた物を足に乗せ放つ！

「バルディツシュ！サイズモード！」

『了解』

「アークセイバー！」

ドオオン・・・

俺の飛ばした衝撃波と少女の斬撃が空中で相殺され爆発した

「・・・くる！」

ヒュンヒュンヒュン！！

爆発により発生した煙の中から先ほどの斬撃が飛んできた

「シャドウスローー！！」

俺は影で作られた手裏剣を投げ撃ち落とし・・・

「忍体術・・・空蝉うつせみ！」

「！？（消えた！？）」

「あまい！」

「きゃああ！？」

ふむ・・・斬撃を囨に本体がその鎌で背後から直接叩きに来たか・・・

「なかなかいい動きだけど、それじゃあ当たらないな。」

「くっ・・・」

「じゃあ、今度はこっちからだ。」

ヒュン！！

ガシィ

俺は疾風はやてで少女の前にいき、手を掴んだ

「いつの間に！？」

「同じ高速特化が対決したらどっちが勝つと思う？」

少女は俺が掴んでいた手を振り解こうとしているが俺のほうが力が

強く振りほどけていない

「純粹に速い方が勝つ。」

「忍体術・・・流転るてん！」

俺は少女に足掛けをしつつ頭を押し、高速で側転させた。

「ふえ！？」

「忍体術・・・振頭しんとう」

その直後おでこを指で一突き。

「あ・・・あれ？上手く飛べない？」

「当たり前だよ。脳に気を当てたから」

「え？」

「わからない？説明してもいいけど、その前に・・・ちょっと失礼。よつと」

「え！？／／」

俺は少女の頭と膝に手を回し、抱き上げた。
俗に言うお姫さま抱っこかな？

「このまま飛行魔法で脳に負担かけると障害ができる可能性があるから。恥ずかしいかもしれないけど、我慢しろよ？」

「は、はい・・・／／」

「いい子だ（ニコツ）」

「っ！？キュ／／」

「あ、あれ？」

いきなり目を回して気絶した？

なんか脳に負担かけたかな？

なんか顔も赤いし・・・

「家に連れて帰って様子見た方がいいか？」

【旦那、それじゃあ気絶した少女を家に連れ込む犯罪者ロリコンになるぜ？】

「・・・潜影せんえい使えばみつからないさ。」

【旦那・・・術の使い道が違うって・・・】

「・・・臨機応変にならないと・・・な？」

さて、ジュエルシードの封印も済んだみたいだし、地上に降りるか？

side out

side金髪の少女

「ここは・・・？」

確か・・・私、金髪の男の人に負けて・・・

「はう・・・／／」

そうだ。お・・・お姫さま抱っこされて気絶しちゃったんだ。
ううー・・・恥ずかしい・・・

思い出すだけで顔が熱くなる・・・

ガチャッ

扉が開くと私と同じくらいの金髪の男の子が入ってきた

「気がついたみたいだね。あ、これ飲む？」

男の子は持っていたカップの一つを私に差し出した。

「あ、ありがとう・・・」

「どう致しまして。」

私は渡された甘い香りの飲み物を飲んだ。

口の中に甘さが広がる・・・

「・・・美味しい」

「お口にあって何より。」

男の子は私の寝ているベッドに腰を下ろした

「俺は影乃終夜、君の名前は？」

「・・・フェイト。フェイト・テストロッサ。」

「フェイトか、いい名前だね。」

「・・・あなたはあの人の弟なの？」

「あの人？・・・ああ、あれね。あれは俺自身。デバイスの変身魔法の一種。」

「！？」

この子が！

「何も取って食べる訳じゃないから構えなくていいよ？今は丸腰だ

し。」

そう言つて手をひらひらと動かした

「あなたは・・・何が目的？」

「・・・ねえフェイト。せつかく名前を教えたんだから『あなた』じゃなくて『終夜』って呼んでくれない？まあ影乃でもいいけど。」

「・・・しゅ、終夜？」

「・・・疑問型なのは引つ掛かるけどまあいいや。」

終夜は姿勢を整えた

「俺の目的は君の心の闇を払うこと。」

「私の・・・心の闇？」

「そ。フェイトぐらいの年頃だと親に関することかな？」

「・・・」

「言いたくないならそれでいい。」

「え？」

「なに？尋問されると思った？そんなことはしないよ。」

終夜はにっこり笑って―

「俺は君の味方だよ。」

と言った

「・・・」

終夜は私の味方？

敵じゃなくて、味方？

私は母さんの為にジュエルシードを集めてて・・・

終夜達もジュエルシードを集めてるのに・・・

味方？

「君に悩みがあるなら聞かし、何か困った事があるなら解決に協力する。」

「俺、影乃終夜は君、フェイト・テストロッサの味方だよ。」

終夜はにっこりと笑ってこちらを見ている

何故だかこの人の笑顔を見てると心の底が暖くなる。

『安心する』

何故だかそう思った。

「今日はもう遅いし、家に泊まっていいよ。」

「え．．．でも終夜の家族に悪いんじゃないあ．．．」

終夜は「ああ、そのこと？」と言うと寂しそうな笑いを浮かべた

「俺、両親３年前に死んだんだ。だから１人暮らし」

「あっ．．．その．．．ごめんなさい．．．」

「気にしてない。夕飯持ってくるから、ちょっと待ってて」

終夜は部屋をでた。

「終夜は・・・両親、居ないんだ・・・」

私には母さんもアルフもいる。

でも終夜は1人。

それでも終夜は力強く生きている・・・

私は・・・どうだろう？

私は・・・何がしたいんだろう？

「私は・・・寂しいのかな？」

私が母さんの言うことを聞くのは・・・
母さんに誉められたいって思うのは・・・
寂しいからなのかな・・・？

ガチャッ

「はい、夕飯」

「ありがとう」

終夜の持ってきたお盆の上にはご飯、味噌汁、豚の生姜焼き、キャベツの千切りが乗っていた
私はそれを受け取り、食べ始めた

「俺が作ったんだけど・・・どうかな？」

「淒く・・・美味しい」

「それは良かった。」

私が夕飯を食べてる間、終夜はにっこり笑っていた

「ご馳走さま。」

「お粗末様でした。っと、そうだ。風呂なんだけど・・・」

「？」

「入ったあとも同じ服ってのもなんか・・・さ。だからいま着てる服を洗濯しと思うんだけど・・・寝るときの服、どうする？」

「私何時もワイシャツ1枚で寝てるからワイシャツでいいよ。」

「・・・わかった。風呂場にタオルと一緒に置いとく。下着は？」

「あ・・・」

「ないの？」

「う、うん・・・」

さ、流石に余所の家で下着なしは・・・

「・・・従姉妹のなら女の子用の下着一応あることはあるんだけど・・・使う？」

「うん、無いよりはましだから。」

「わかった、洗面所に置いとくな。」

終夜は風呂場の場所を言うと、皿洗いを始めた

私は着ていた服を脱ぎ、風呂に入った

「・・・なんか『家族』みたいだな。」

私はそう言っで自分の頬が熱くなるのを感じたでも、悪い気はしなかった。

「また来たいな・・・今度はアルフと母さんも一緒に・・・」

私は体を洗い終え風呂から上がり部屋に戻る途中・・・

「終夜？」

「・・・何だ、フェイトか・・・」

リビングで終夜が巻物の前で暗い顔をしていた

「どうしたの？」

「・・・フェイトには話しておくべきだな・・・」

終夜は自分の両親の事、忍の事、闇の力の事・・・

終夜自身の『闇』について話してくれた

「・・・これが俺の過去さ・・・さあもう寝よう」

「終夜は・・・寂しくないの？父さんも、母さんもいないのに、寂しくないの？」

「寂しいさ。でも、止まってなんかいられない。俺は決めたんだ。」

「太陽の上がるまで、夜を照らす月になる。」

「・・・／／」

振り返った終夜の顔は哀愁が漂う大人な雰囲気があり、とても格好良かった

「・・・お休み。」

終夜は自分の部屋にもどろうとした
その背中には何か、寂しさがあって・・・

ギュッ

「フエイト？」

私は終夜の手を捕まえていた

「え？あれ？私、何で・・・？」

「・・・フエイト、今日一緒に寝ないか？」

「え？べ、別にいいけど・・・急にどうしたの？」

「一人で寝るのが寂しいだけさ。」

「・・・」

「先に行つててくれ」

「うん、わかった。」

私は部屋に向かった

「・・・ありがとうな」

- ・ その日、私達はお互の心の隙間を埋め合うように寄り添って寝た・

第14話 あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？b y

明後日から修学旅行かゝめんどい。

大「厳密には日本文化体験で名前だけだな」

ああゝタツグフォース6進めなきやゝ

大「続きを書けよ・・・」

りょーかい

感想やらなんやらお待ちしてます。

ガンガン書きちゃってください！

じゃあまた来週。

「「またな！！」」

第15話 大地とアリサの憂鬱？（前書き）

HA HA HA。

気が付いたら書いていたZE

なぜだ！？なぜなのだああ！？

名（迷）言コーナー

『希望はだれが持っても構わない。だが！結果は同じなのだ！！』
…ザキラ（デュエルマスターズ）

第15話 大地とアリサの憂鬱？

「ちくしょー！！」

「ちよつ待て！！うわあああ！？」

ドコオオン！！

ただいま俺！絶賛ぶち切れ中だぞお！！
くそつまた避けられた！！

「逃げるな兄さん！！叩き斬れない！！」

「落ち着け大地！！冗談になってない！！」

「死にさらせえ！！」

「ギヤアアア・・・」

・・・スッキリ。

「・・・大地。朝から何をしてたんだ？」

朝の食卓で父さんがさっきの一件について聞いてきた

「イヤだな」ただちよつと悩み（ストレス）が有ったから兄さんに
試合（八つ当たり）をしただけですよ。」

「・・・（口から魂）」

まあ、確かに兄さんはぼろ雑巾みたいになつてゐるけども。

「そ・・・そうか！！なら仕方ないな！！」

あれ？何でみんな震えてるのナ？

「大地君・・・怖い。」

「美由紀姉さん？何か言いました？（ニコオ）」

「ヒイイイ！？」

うーん・・・何が怖い？

俺の顔か？

まあ、いいか。

俺はそのまま食卓の上の朝食を食べた。

しばらくして朝食を食べ終わり、鞆をもってバスに乗り込んだ

「おはよーさん」

「うん。おはよう。」

一番後ろの座席にはすずかと・・・あれ？

「すずか、アリサは？」

「アリサちゃんは今日は風邪ひいてお休みみたい」

「まじ！やிரい！！今日は学校で爆睡出来る！！」

アリサには悪いが俺は今日を満喫する！！

「（チャンス！！）」

後ろでなのはがガッツポーズしてるが、まあ、気にしない。

「お兄ちゃん！！」

「ゴハア！？」

なんか油断してたらなのはがいきなり背中にタックルして来やがった

「何すんだ！？」

「むふふ（スリスリ）」

・・・アリサが居なくても俺の平穩はないのか？

なのははこの日の大地をこう語った

「何時もと違って元気が無くて、まるで魂が抜けたみたいでした。」

、と

具体的な様子をお見せしよう

体育の授業

「大地！危ない！」

（ぼけー）

ドゴッ！（サッカーボール顔面直撃）

「大地お兄ちゃん！？」

（ぼけー）

「・・・大地お兄ちゃん？」

弁当の時

（ぼけー）

「大地お兄ちゃん？そのお茶どうするつもりなの？」

ビチャビチャ

「ちよっ・・・大地君！？何でお弁当にかけるの！？」

パクッ

「・・・マズウ！！ってお茶あ！？一体誰が！？」

「「・・・」」

数学の授業

（ぼけー）

「大地君、この問題わかる？」

「ラッキーダーツ・ヘブンズゲート・ロマネスク・ロマネスク・ド
ラグハリケーンエナジー・ロマネスク・ロマネスク……」

「ちょっと！？大地君！？大丈夫！？」

「強靱 無敵 最強オオオオ！！」

「誰か！大地君を保健室に！！」

「……果てしない狂いっぷりだ。」

さあ、この小説を読んでいる人なら理由の予測がすんだらう。

「……ダメだ。アリサがいないと如何せん調子が狂う。」

大地は軽くアリサ依存体質になっていたのだ。

・・・本人は自覚無いようだ。

「はあ、あいつがないとゲームもつまらないわね・・・」

・・・どうやら、アリサも大地依存体質気味らしい。

「よし、早退して会いに行ってみるか。」

アリサのために凄く決意だなおい

「・・・あいつなんかお見舞いに来るわけ無いわよね・・・」

・・・こっちはこっちでお見舞いを期待しているようだ。

と、言うわけで。

「やってきましたバニクス家。」

（わざわざあいつのどこに行くのはしゃくに障るが・・・気になつてしかたない。）

（・・・アリサの事が気になって仕方ない・・・？俺が？）

「ははっ・・・まさか、んなこと有つてたまるか。」

（・・・くそっ、今、多分顔が赤いな）

「俺はこの世界のイレギュラー。恋だの何だのは、厳禁だ。」

（さて、お見舞いしますか。）

大地はバニクス家の呼び鈴を鳴らした

『どちら様ですか？』

「アリサの友達の高町大地です。アリサの見舞いに来ました。」

『！？・・・そうですか。少々、お待ち下さい』

（・・・俺が来たことに驚いた？）

しばらくし、バニクス家の扉が開き、中からいいかんじに歳を取った執事が出てきた

「初めまして。バニクス家に仕えております、執事の鮫島で御座います。」

「此方こそ初めまして。」

お互いに挨拶をすると鮫島さんの案内に従い、アリサの部屋に向かった。

「・・・お嬢様は何時もあなたの事を楽しそうに話しております。」

「アリサが？・・・何時も俺に突っかかってくるのに？」

「ええ、あなたと一緒に居れる事を心から楽しんで居るようです。」

「・・・信じられないな・・・」

「お嬢様は素直になるのが苦手な様なので。」

鮫島さんにはにつこりと笑い言った

「・・・」

「つきました。」

鮫島さんは扉のノックした

すると、扉の向こうからアリサの声が聞こえた

「どうしたの？」

「お嬢様に会いたいという人をお連れしました。」

「今はそんな気分じゃないの。帰ってもらって」

「しかし・・・」

「鮫島さん。」

大地は鮫島さんの前に立ち、声を遮った。

「・・・随分元気なみたいだな？学校はズル休みか？」

「！？その声・・・大地なの！？」

「心配して損したぜ。じゃ、帰るな。」

大地は扉の前から去ろうとした時、扉が開き、アリサが出てきた

「ちよっ！ちよつと待ちなさいよ！！」

「んだよ？そんな気分じゃ無いんだろ？」

「い・・・今変わったの！！」

「そうかい。じゃ。」

「待ちなさいってば！！」

「それが人に物頼む態度かな？」

「・・・ま、待って下さい。」

「お？意外に素直だな。いい子だ。」

撫で撫で

「撫でないで！」

「わりいわりい（笑）」

「まったく・・・」

「それでは、邪魔者は去るとしましょう。それでは、どうぞお二人でごゆっくり。」

近くで様子を見ていた鮫島さんは一礼すると去って行った

「とりあえず部屋に入ろうぜ？」

「そうね。」

パタン

2人は部屋に入り扉をしめた

「・・・意外に女の子らしい部屋だな」

「あんだねえ・・・私は女の子よ」

「そついやそうだったな」

「聞いてんの!？」

大地は一通り部屋を見て、何かを見つけた

「ん? なんだこりゃ？」

「!?! ダメ〜〜!?!」

アリサは大地が見つけた物を横からかつさらった

「・・・何すんだ。気になるだろ？」

「これは秘密なの!?!」

「ほほう・・・秘密と言われると余計に気になる・・・」

「な・・・何をする気？」

大地は両手をワキワキさせながらじりじりとアリサに近寄った

「お前の全身に尋問^{くすぐり}」

「セクハラじゃない!?!」

「セクハラじゃない。尋問^{くすぐり}です（笑）」
↑ 確信犯

「くっ・・・」

「尋問^{くすぐり}されたくなければそれを渡せ。（ニヤニヤ）」

「それはイヤ！」

「ならば仕方ない・・・」

大地がじりじりとアリサに近寄り、アリサも少しずつ後ずさりする。
が、しかし

「キャッ!？」

丁度後ろはベッドだったため、ベッドに仰向けに倒れる結果となった

「・・・自らベッドに倒れるとは・・・尋問^{くすぐい}を楽しみにでもしているのか？」

「んなわけないでしょ!？」

「じゃ、お邪魔します」

「ちよっ!キャー・・・」

「ここから先は皆さんのご想像におまかせします」

一部音声

「ここか!?!ここなのかあ!?!」

「そ、そほはらめえ!!!／／／」

くしばらくして」

「満足。」

「ハアハア・・・い、息が・・・／＼」

「にしても、意外にすぐ呂律が回らなくなったな？いささか手応えがなかったぞ？」

「あ・・・あなたが上手すぎるのよ・・・／＼」

「・・・２人とも何をなさっておられたのですか？」

いつの間にか鮫島さんが扉の前に立っていた

「少々じゃれて遊んでました。」

「・・・一応そくなるわね。」

「さ、左様で御座いますか・・・」

はい、ここらでいかかわしい妄想をした人は、あとでマツクのスマイルを最寄りのマツクで１００個注文しなさい。

「大地さま、旦那様がお呼びで御座います。」

「アリサの父さんが？」

大地はベッドから降りた。

「んじゃ今行きます。」

「・・・大地。」

「何を心配してんだか。」

「・・・」

「はいはい。わかってますよ。俺だってお前といるのは楽しいからな。」

2人は少しの間見つめあっていた

「大地さま、そろそろ。」

「わかりました。んじゃ行ってくる。つっても、戦場に行くわけじゃないけどな。」

「行つてらっしゃい。」

鮫島さんと大地は部屋から出て、アリサの父親の本に向かった

「旦那様、大地さまをお連れしました」

「入れ」

「失礼します。」

その部屋の奥に一人の男が座っていた

「君が・・・高町大地君かね？」

「はい」

「君の事はアリサから良く聞いているよ。」

「・・・」

「そんなに警戒しなくても構わない。ただ、少しの質問に答えて欲しい。」

「わかった」

男は手をテーブルに置き、指を組んだ

「得意な事と苦手な事は？」

「得意なのは技術数理科学・・・つかパソコンと数学。苦手なのは勉強だ。」

「そうか・・・では、アリサの事はどう思っている？」

「うーん・・・大切な人、であることは間違いないだろうけど・・・よくわからねえな。」

「そうか。十分だ。次に、君の夢は？」

「ない。俺はなにがおこるかわからない人生を楽しみたい、だから自分で未来を決めるような事はしない。」

「では、最後。アリサか100人の民間人、どちらかしか救えないなら、どちらを救う？」

「・・・どちらも救う。」

「・・・話は聞いていたかい？」

「もちろん。だからこそ、両方助ける。」

「何が何でも全部助ける。」

「ふっ・・・はははは！面白いな、君は。」

男は急に笑い出した

「そうか。両方助けるか！！」

男はしばらくわらっていた。

「・・・やばっ！ごめんなさい、用事でもうそろそろ帰ります！それじゃ、お邪魔しました！」

大地は急いで部屋を出て行った

「・・・鮫島、彼のことどうおもう？」

「とても面白い少年です。将来が楽しみですな。」

「全くだ。案外早く孫の顔が見れるかもしれんな。」

「ですな。」

「・・・鮫島、彼をバニクス家に迎える用意だ。」

「かしこまりました。」

男は椅子にもたれかった

「アリサの事を頼んだぞ。大地君・・・」

帰り道

「あ、終夜」

「大地か。今、なのはがお前を探してたぞ？」

「げー・・・面倒だな・・・」

「全く・・・まあ、早く家に帰れよ？」

「オッス。じゃあな」

「賑やかなやつだな・・・」

第15話 大地とアリサの憂鬱？（後書き）

くそがあ！？この年で親に許可だとう！？

大「なんのことだ？」

リア充滅べえええ！！

大「ちよっ！！あぶなっ！？」

第16話 家族旅行。終夜視点だよ？（前書き）

名（迷）言コーナー

『俺の遊びは半分じゃねえ！全部だ！』・・・明石タギル（デジ
モンクロスウォーズ）

・・・ああ、書くことがない・・・

第16話 家族旅行。終夜視点だよ？

side 終夜

今俺は森の中を駆け抜けている

時速は・・・45？／時ぐらいかな？

隣には高町家の車が見える

え？状況が飲み込めない？

仕方ないな、少し時間を遡ってみようか？

〈2日程前〉

「・・・家族旅行？」

ガッ

「そ、今週末にね。アリサ達も来るぜ？」

バシィ

「でも、なんで俺に話すんだ？」

ドシュ
ガイン

「？来るんだろ一緒に」

シタタタタ

「大地、話が飛んでるぞ・・・詰まり俺をその旅行に誘いに来たってことだな？」

ビュッ

キーン

「そゆこと」

ゴウッ

「わかった、行くよ。」

ドギヤーン

「おう、待ってるぜ？」

シタッ

「・・・だけどな」

シュバッ

「？」

ドオオン

「気の使い方の稽古中に言わなくても良くないか!？」

「その発想は無かった。」

「今気付いたのか!？」

「回想終了」

ってなわけ。

え？走ってる理由？

単純に定員オーバーだよ。

「おほお！氣つて慣れるとヤバいおもしろい!!」

「・・・お前はまだ氣の細かい部分は未熟だからあまり調子に乗るなよ？」

「了解い」

氣つていうのは個人差はあれど、人には必ずある。

魔力とかとは別物っぽい。

大地が俺に氣の使い方を教わりたいたったから、教えた。

・・・はつきりいつておかしい。

氣の量が尋常じゃない。

ドラ。ンボールのスーパーベジットの50倍程だろう。

かめ。め波も打てると思ったりするよ、本当に・・・

さて、話を戻そう。

「着いたかな？」

やっと宿に着いたか・・・

「うおー！！使い足りねー！！」

「・・・かめ。め波でもしてみたら？」

「それだ！」

冗談何だけどな・・・

「か」

あれ？本気？

「め」

気が高まってく・・・

「は」

・・・これ、やばくね？

「め」

ちよっ！なんていう気の量！？

「波ッ!!」

ドギヤアアアア...

「!？」

蒼い光の柱が大地の手から出て、天を貫いた。

「撃てた!ヤッホー!!」

・・・規格外過ぎる

いつか地球が壊れるかもな・・・

「大地。気の修行、しっかりやるぞ」

「おう!」

（風呂前）

「大地様、如何なされました？」

「旦那もだ、何を呆気にとられてるんだ？」

今回の旅行はガイアと佐助も人型で参加している。

・・・のだが。

「何故戦闘用の服!?」

佐助は忍装束だし、ガイアは腰に刀差してるし！

「これ以外の服は無いんだぜ？」

「嘘だな。買い物の際は普通の服だった。」

「ソウダツケナ〜？」

はあ・・・まあいいか。

「お風呂楽しみだね、大地君？」

「すずか？なのは？なんで俺の腕を掴んでるんだ？」

大地はすずか達に引きずられて女風呂に入る羽目になりそうだな。

「大地、先行くぞ？」

「え！？嘘！ちよっ！待てよ!!」

「大地君はこっち。」

「H A N A S E!!」

・・・頑張れ大地

「大地、なのはには触るなよ!」

「恭也さん。落ち着いて下さい。いいから風呂に入りましょう?」

「見捨てるな!」

〽数分後〽

俺と大地は体を洗っていた

「死・・・死ぬかと思った・・・（社会的に）」

因みにユーノは俺が洗っている

「きゅー」

「良かったな。変わり身の術使えて。」

「きゅーきゅー」

「ユーノはなのは達と入りたかったのかな?」

「きゅ!?!きゅ!きゅきゅー!!（ちがうよ!?!）」

あ、洗い終わった

「そうか?」

「きゅー（ほっ）」

「じゃあ転送してあげよう。」

「きゅきゅ！？（何故！？）」

理由？面白そうだから

「はい、転送。」

「きゅーー！！」

良し、成功。

「・・・便利だよな。魔法って。」

「大地は使えないんだっただよな？」

「いーなー俺も使いてー！」

「諦めなよ？」

「わかってますよ。それはそうとお前随分細くて白い体だな？」

「余分な筋肉は重いだけだからね。それと、白いののは母さんからの遺伝。」

「遺伝ねえ・・・」

「さっさと体洗って風呂に入ろう？風邪ひくぞ」

「そうだな」

風呂からあがったあと、子供組は宿を探検する事になった。

アリサの強引さには呆れるよ・・・

「アリサ」

「はい、水。」

「ありがとう」

最近、大地とアリサが阿吽の呼吸を習得したらしい
大地がアリサを呼ぶだけでアリサは大地の要求がわかっている
因みにアリサの定位置は大地の隣だ

・・・早退した時何があったんだ？

そうこうしていると前から女の人が歩いてきた

「はあくい失礼？」

「おばさんだれ？」

「お、おば・・・！？」

「大地！失礼だろ！」

「すまそ」

「たく・・・」

「すみません。こいつ馬鹿でして・・・」

「馬鹿？ 誉め言葉じゃないか！」

「黙ってる！！」

「ぐぬう・・・外せぬ。アリサく慰めて」

「はいはい。」

「・・・」

「気にしないで下さい。で、何か俺達に用ですか？」

女性は一瞬はつとした

「いや、うちの子が世話になったらいいね？ そんな時のお礼を言おうとね？」

「・・・フェイトの仲間だな。」

「揺さぶってみるか？」

『無理に隠すな。魔力でバレバレだ。』

『！？』

『いきなり念話ですまないな。フェイトは来てるのか?』

『ああ、来てるよ。』

『なら、会うことになるだろう。じゃあな?』

「それじゃ、またいつか」

・・・フェイトは今どうしてるんだろうな?

く夕飯く

あの後、いろいろ探検したけど特にこれといったものはなかった。そりゃ、ただの宿なんだから当たり前か。

「ひゃっはー!」

「静かに食え!」

「うっはーい! テンションの上昇率がおかしーや!」

「大地様! 落ち着いてください!」

「アリサ! 今日は一緒に布団で寝よーぜ!」

「な! ななな、なんでそうなるのよ! / / /」

「もう勝手にしろ・・・」

「ガイア！佐助！ついて来い！」

「承知！」

「了解い。」

・・・いったか？

「つかおい！佐助は俺のデバイスだろ！？」

・・・はあ、全く・・・

「・・・？魔力反応か？」

しかし・・・デバイス無いし・・・

まあ、なのはやフェイトがいるからジュエルシートの心配は無い。

「ねるか。」

フェイトには又いつか会えるよな？

おまけ

大「俺！スーパーサイヤ人みたいなのになれるかな!？」

佐「それは無理。」

大「うおおおおおおおおお!!！」

ポオウ!!

コオオオオオ

大地の髪が黄金に輝いている！

大「・・・できた?」

佐「うそん」

ガ「ただ、気を大きく解放しただけでは?」

てろれろれ♪

大地はスーパー転生者に覚醒した！

大「名前にひねりがねえ!!！」

第16話 家族旅行。終夜視点だよ？（後書き）

前書きにも書いたけど書くことがない。

うん。

さて、今度ノリでVividの嘘予告でもしようかな？

第17話 再対決!! 大地対終夜!! (前書き)

はい。少し更新送れました。

すみません。

というわけで名(迷)言コーナー

『謀ってなどいないさ。』

あの地球に書いた紙芝居こそ。

スパイでも將軍でも連蓬でもない・・・

エリザベスの最初で最後の真実のプラカードだ!!』・・・エリザベス(銀魂)

大「ちょ・・・www声アムロ・・・www」

確かにアニメはやばかった。うん。

第17話 再対決！！大地対終夜！！

「なかなか見つからないな・・・」

「この辺りのはず何だけど・・・」

「にやははは・・・もうすぐ帰らなきゃいけないのにね・・・」

「まあ、そしたら俺が残って探すよ。」

「わりいな」

よっ！俺、高町大地。

絶賛搜索中だ！

『すみませんガイアさん、お役に立てないで・・・私には探知機能が付いてないので・・・』

【気にする事はない。俺や猿飛ではジュエルシードを封印出来ない。詰まり、お前は居なきゃならないんだ。搜索と戦闘は任せろ、だが、封印は頼んだぞ。】

『・・・はい！！』

【・・・レイちゃん？俺様もいるんだけどな？】

デバイス達のリーダーはガイアみたいだな？

「佐助？レイちゃんって誰なんだ？」

あ、確かに。

【レイジング・ハートちゃんのニックネームだぜ。】

『猿が、気軽に勝手に呼ぶな。』

【酷い！】

【まあしかしい呼び方だな。俺もそう呼んでいいか？】

『ま、まあガイアさんなら・・・』

あるえ〜？心なしかレイハが赤くなってる気がすんな？

【ありがとうな、レイ。】

『~~~~~！~！~』

あれ？レイハってこんなに赤いつけ？

【俺のことも呼び捨てで構わない】

『し、しかし・・・』

【構わない。】

『じゃ・・・じゃあ・・・・・・・・ガ・・・・ガイア・・・・』

【何だ？レイ？】

『にゃ！？』

ポヒュン

【レイ！？】

「ありゃ？」

何か気の抜けるような音がして、レイジングハートが以上に赤くな
った

「レ、レイジングハート！？大丈夫！？」

『だ・・・大丈夫です・・・』

（大地とガイア。なのはとレイジングハート・・・持ち主が持ち主
なら相棒も相棒・・・か）

【もしかして俺様、空気？】

「大丈夫。僕の方が空気だから。」

・・・頑張れ、ユーノ。

閑話休題

あれからしばらく探してみたがジュエルシードは見つからなかった。

「流石に今日は帰るか？」

「そうだね・・・」

「後は任せろ。探して・・・」

「「「！？」」」

「え！？なに？どうしたのみんな！？」

「近くに魔力反応・・・！？」↑魔力ある人

「こんな街中で強制発動！？」↑同じく魔力ある人

「にゃ！？そそんなの危険過ぎるよ！！」↑同前

「エ？ナニソレ？俺気づかなかったよ？」↑魔力無い

【・・・大地の旦那、諦めなよ・・・】

「みんなひどいや！！」

渡る世間は鬼ばかりだよ！！

もういいよ!! いじけてやる!!

そうこうしている内にユーノが結界をはった

「いくぞ! 大・・・ち?」

「みんな頑張つて俺、どうせ役たたずだから。」

「(暗っ!?) い、いや、この中で一番強いのお前だろ!? 役立たずなんかじゃあ無いって!」

今俺は猛烈に落ち込んでいる。
どのくらいかというと・・・

道の端にいき、膝を抱えて座り込み、地面にのの字を書くぐらいだ

「俺は魔力無いしさ・・・空飛べないしさ・・・魔力も感じられないしさ・・・ガイアが居ないと結界の中に入れないしさ・・・それに(ブツブツ)」

「・・・はあ。んで? 行くの? 行かないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・行く」

(まるで子供だよ・・・)

「ユーノ? 大地は子供だぞ?」

「え！？終夜！？」

「考えを読んだだけだよ。そこまで驚くことかな？」

「・・・（もう何でもアリなのかな・・・）」

・・・あ、ツツコミがいるのにボケし忘れた。

sideなのは

お兄ちゃん達がぐずぐずしている間に私は暴走してるジュエルシードの封印をしたの！
でも・・・

「あの時の・・・」

「・・・今日も終夜は居ないんだ？」

「・・・ねえ、お話・・・聞かせてくれないかな？」

「悪いけど・・・それは出来ない・・・ジュエルシードは渡しても
らいます。」

むう・・・なかなか頑固なの

「だったら！倒してでもお話を聞くの！」

私はレイジングハートを構え、魔力弾を作った

『デイベインシューター』

「シュート!!」

「バルディッシュ、フォトンランサー」

私の魔力弾をあの子の魔力弾が相殺した

「行くよ!!レイジングハート!!」

side out

「・・・終夜?なんでお前はそっち側に居るんだ?」

「なんでって、俺がフェイトの味方だからだけ。」

俺と終夜の間には沈黙が流れる

・・・どうやら彼奴は俺の敵になるみたいだな

「あ・・・あんた、一体なんのつもりだい!？」

「全くだ。」

「俺は大地の味方だけど、フェイトの味方でもある。俺は心に闇のあるものの味方になり、より闇の強い者の味方になる。」

???

「何がなんだかさっぱり分かん。」

「要するに……今は俺はお前の敵。って事だ。」

ほうほう。

つまり……………

「つまり……お前と戦えばいいんだな？」

俺は戦闘体制を取った

「え！？ちよつ！！大地！？」

「大丈夫。終夜が言ったんだ。もとより倒すだけさ？」

「疑問型！？本当に大丈夫なの！？」

「大丈夫さ」

「多分」

「多分かよ!!」

side 三人称

「アルフさんはユーノを取り押さえて下さい。大地は俺がやります。」

アルフは終夜の発言に怪訝な顔をした

「・・・敵のあんたを信じろって言うのかい？」

「ええ、信じて下さい。さもないと、大地に瞬殺されますよ?」

「それってどういう・・・?」

「先手必勝おおおお!!」

「ダッシュパンチ!!」

ドゴオオオン!!

「!?(速い!?)」

「くっ・・・アルフさん!速く下がって!」

「わ・・・わかったよ!」

(・・・止められたか)

終夜は不敵な笑みを漏らしながら受け止めた大地を弾き返した

「っと」

大地は空中で体勢を立て直し、器用に着地した

「会話中に攻撃って・・・失礼だぞ?」

「いいだろ?手加減でガイア使わねーでやるよ。ガイア!バリアジャケットだけ展開!んで、あの女の相手して来い!」

『御意』

大地はバリアジャケットを展開し、ガイアを人型にした

「・・・背中には任せませ」

「このガイア!大地様の背中には傷一つつけさせはしません!」

終夜は少しため息を吐いた

「ガイア無し。か。随分舐められたものだな?」

『旦那！準備は出来てるぜ！！』

「シャドウ・・・set・up」

終夜はバリアジャケットを展開し、印を結んだ

「魔力拡散・・・」

「終夜、おまえにすげえもん見せてやるつか？」

「術式展開・・・」

「なに？無視？」

「魔力素整理・・・」

「おい？終夜ー？」

「空間把握・・・」

「魔力充填・・・」

「・・・・・・・・・・（ぶちっ）」

「話聞けよー！！」

「ダッシュパンチ!!」

大地は地面を強く蹴り、終夜に拳を繰り出した
が、

スカッ

「あら!？」

大地の繰り出した拳は終夜をすり抜け、終夜の姿が消えた

「え!？どこ行つた!？」

大地は辺りを見回すが姿は見えない

『影は掴めない・・・』

「声!？くっそ隠れてないで出て来いよ!!」

『・・・いや、これも立派な戦法だからね?』

「ひきよーだ!ひきよー!!」

『・・・』

「そつちがその気なら・・・」

「悪いけど、隙だらけだぞ」

「後ろ!？」

ガキイン

「流石。」

「しゃらくせえ!!」

ドウッ

終夜の奇襲を気で作った盾で防御し、気の波動で攻撃した

「つて!また消えた!!」

『この技は高等技能の《我が身影ノ如ク》。闇夜に紛れ、奇襲する技だ。本来ならこんな大通りじゃ無理だけど、空間に俺の魔力の充満させて、俺の位置をわからなくしてるのさ。』

「空間に自分の魔力を充満!?(そんな事・・・尋常じゃない魔力量と魔力を操作するだけの強靱な精神が必要なはずだ・・・でも終夜の魔力量はそんなに大きくないし・・・)」

『魔力って便利だな?』

（これは・・・便利だから出来るなんて簡単なレベルじゃない。終夜は一体何者なんだ・・・）

ユーノは終夜がサラッとやってのけた芸当に驚きを隠せないでいたが、この馬鹿は更にその上を行った

「・・・面倒だ、まとめてぶっ飛ばす。」

『「!？」」』

「ハアアアアアアア!!」

『これは・・・!?!?気が膨れ上がってる!!』

「ダア!!」

ゴワァッ!!

「だ・・・大地の髪が・・・金髪に・・・」

『おいおい・・・どこの戦闘民族だよ・・・』

「こいつが俺のスーパーモードだ!」

『スーパーモードって・・・スーパーサ○ヤ人のパクリ・・・』

「この姿を舐めるなよ．．．！！こいつを食らえ！！」

「超 爆 波！！」

大地は気を一気に放出し、爆風を起こして辺り一面を吹き飛ばした

「粉碎 玉砕 大喝采！！」

「相変わらずの規格外だな．．．？」

「これに耐えたお前もな？」

だが、瓦礫の上に無傷の終夜が立っていた
がらっ

「し．．．死ぬかと思った．．．」

「お、ユーノ。無事だったか？」

瓦礫の中からユーノが顔をだした

「誰かさんが僕の防御魔法にかめはめ波をぶつけて特訓してたから

ね!!（怒）」

「ついにユーノの防御魔法も規格外になったか・・・」↑忍術を使
って影に潜れたりする人

「人を人外みたいに呼ぶの止めない？」↑ビルを吹き飛ばす程の爆
風に耐えきったフレット

「そーだそーだ!」↑ビルを吹き飛ばす程の爆風を起こせる人

・・・お前ら全員常識外れだ。

終夜はニヤリと笑った

「さて、大地？お前はスーパーモードっていう隠し玉を見せた。」

「急になんだ？」

「俺の隠し玉も見せてやるよ!」

『旦那！準備は出来てるぜ！！』

「いくぞ！」システム起動！」

終夜の声に反応するように終夜の籠手に付いた宝石が光を放ち、その光は終夜の体全体に広がった

「どう？ジュエルシードの願いを叶える力を魔力として引き出してるんだけど。ああ、そうそう。この姿は動体視力が底上げされるから、遠距離技は全部避けるよ？」

「オルタナティブモードかよ・・・」

「しかも・・・！」

「忍体術・疾風！！」

ビュン

「ぐあっ！？」

終夜のボディブローが大地に直撃した

「身体能力も上がるから、接近の高速戦闘も出来る。ただ、3分しか持たないけど。」

「上等・・・やってやるよ！！」

「そう来なくちゃ！」

「ハアアアアア！！」

二人は同時にバックステップをして距離をとり、相手に突貫した

「うおおりゃ！！」

「くっ・・・！」

一瞬の均衡直後、大地が終夜を押し返した

「（いくら身体能力が上がったとはいえ、まだ大地の方が力は上・・・なら！）疾風っ！！」

「後ろ！？」

「ふっ！！」

「がつ・・・！？」

終夜は高速で回り込み大地に一撃を加え、大地から距離を取った

「スピードで攪乱からのヒットアンドウェイ・・・厄介だな」

「やっぱり決定打にはなりえないな・・・3分過ぎたら勝ち目はない・・・」

「やっぱりスーパーモードをさらに超えるしかないか・・・？」

「秘術・封・・・行けるか？」

次回に続く！

え！？続くの！？

第17話 再対決！！大地対終夜！！（後書き）

いやー終わった終わった。

え？前回のなのは対フェイトの続き？

原作どうりですよ？

・・・書くのがめんどかったわけじゃないからな！？

大「うう・・・貧血が・・・」

終「アリサの裸エプロン。（ぼそっ）」

大「ぐぼお！？や、やめろ！？それ以上は本格的に（鼻血が）やばい！！」

終「セーラー服でポニテ。」

大「愚はあ！？」

どさっ

ほんと、変態め。

あ、このくだりになる原因は活動報告にあります。

番外編 バカとテストとG H Q（前書き）

勢いでやった

後悔もしてるし。反省もしている。

だが、満足だ。

番外編 バカとテストとG H Q

この物語は、大地たちが“もし”「バカとテストと召喚獣」の世界にいたら。
というお話である。

ここは文月学園のとある教室…

その教室の扉が開き少年と少女…ではなく2人の少年が入ってきた

「よお吉井^{バカ}に秀吉、遅いな！」

2人に少々ひどい挨拶をしたこの少年は高町大地。

3年の高町なのはの弟にあたる。

「…ねえ、大地？何も直接言わなくてもいいんじゃないかな？」

「事実だろ？」

「ちがうよ！ほら、能ある蛙は尻を隠すって言うだろ！！」

「素晴らしい勘違いだな。能ある鷹は爪を隠してるんだな。」

「そう！それだよ！！そのとおり！今のはわざとさ！！」

「明久…それは自分がバカだと言ってるようなもんじゃぞ…」

このバカ丸出しの少年は吉井明久、大地の悪友、というかバカ友達だ。

その隣りにいるのは一見すると美少女にしか見えない木下秀吉（^お）。

そして…

…常識外れのバカの巣窟、Fクラスだ。

「おら!! その蛆虫ども! さつさと席につけ!!」

「? 坂本ゴリラいつの間にそこにいたんだ?」

「大地? 今のは喧嘩を売ったんだよな? それでいいんだよな!!」

この教壇に立っているのは坂本雄二。悪鬼羅刹と言われた男だ。

「落ち着けよ。バナナやるから。(どやあ)」

「ふっざけんな!! なんだそのドヤ顔!!」

「オー怖い怖い。」

「ところで、何でそんなとこに立ってるの?」

坂本はいったん大地とのやり取りを止め、明久の疑問に答えた

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。何せ俺がこの最高成績保持者……つまり、代表なんぞな」

「こんなのが(ゴリラ)が代表ねえ……」

「ンだとコラア!?!」

因みにこの三人、学校の問題児とされている。

しかも仲がいいからさらに達が悪い。

…とまあ、いろいろとあったわけだが基本原作と同じだし割愛ってことでby作者

時間が飛んで自己紹介!!

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」
（相変わらずの美少女具合…今度はどんなコスプレをしてもらうかな…？）

大地が不純なことを考えているが、それも仕方がないほどの美少女なのだから仕方ない。

……一応男だが。

「…土屋康太」

次にムツツリー二、ムツツリ商会のトップ。

この学園の風紀委員会とも傭兵集団とも言われている組織、G H Qの敵F F F団の協力者でもある。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

当人は先ほど時間飛ばしの間に受けた4の字固めのダメージが再発したのか、膝を抑えガタガタ震えていた。
そのあとは、ただ単に名前を告げるだけの作業が進んでいった。

そしてしばらくすると明久の番になった

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださ

いねっ」

『ダアアーリインー!!』

男らしい野太い声の大合唱が、Fクラスの教室に響き渡った。
当然明久はめちやくちゃ笑顔をひきつらせた。

「…失礼。忘れてください。」

「ヴァカメ!」

「…エクスカリバー?」

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ?」

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。
その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声
上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、
姫路さんもお願ひします」

「は、はい! あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします
!」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

「はいっ、質問です!」

「あ、はいっ。なんですか?」

「何でここにいるんですか?」

傍から見れば失礼な質問ではあったが、ほぼ全員（明久を除く）が
そう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「HA HA HA 甘いな！貴様ら！！」

『誰だ！！』

急にクラスに響く声にクラスの全員（坂本、秀吉、姫路、担任を除く）が反応した

「いいだろう…貴様ら愚民に教えてやろう…とおう!!」

すたっ

ばきい

ごしゃっ

「痛っ!!」

クラスのどこから飛び出したそいつは空中で10回ほど前転し教卓の上に着地。

…までは良かったが。

着地した瞬間、教卓は崩れ落ち、そいつは地面に倒れた。

『うわぁ…』

「くっ…予想外だった…」

そいつはなりをただと二度咳ばらいをした

「俺の名は高町大地!!俺は俺の信じた道を進む!!自分を信じて進む者たちよ!この設備に不満はあるか!!」

『大有だぁぁ!!』

「よし!貴様らの気持ちしかと受け止めた!この俺がお前らをこの学校の底辺から助けてやろう!この俺についてこい!!希望の光を見せてやる!!」

『うおおおお!!』

「俺のことはアニキとでも呼ぶといい!!」

『アアアアニキイイイ!!』

「なんか…俺のときとは大違いだな…」

「相変わらずじゃな…大地は。」

「なんか…すごいですね…このクラス。」

「貴様ら！ペンを執れ！！試験召喚獣戦争だああ！！」
『おおおおお！！！！！！』

Fクラスがバカの下、一つになった瞬間だった。

「一応クラス代表は俺なんだが・・・」

哀れ坂本

閑話休題バカテスト。

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

(1) 得意な事でも失敗してしまう事

(2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

(1) 弘法も筆の誤り

(2) 泣きつ面に蜂

影乃終夜の答え

(1) 河童の川流れ

(2) 弱り目に祟り目

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”などがありますね。

吉井明久の答え

(2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

高町大地の答え

(1) A B A ↓ B A B ← ← A B ↑ B B A B A → C A ↓ ↑ A B A B
(2) 泣きつ面に滅びのバーストストリーム!!!!

教師のコメント

コマンド入力はいりません。

「さて、お前ら、試験召喚獣戦争をするにあたって心配事があるか？」

『ありません!!』

「ならば!…坂本。作戦などは任せた。」

「いきなり交代かよ!」

大地が後ろに下がり交代で坂本がクラスの前に立った

「一応このクラスの主戦力を説明しよう。」

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ!」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。

顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがあ有名なムッツリー二だ」

「……………!! (ブンブン)」

ムッツリー二と言う名に、クラスがざわめいた。

その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。

……とされていた人物が、今日の前にいる。

「バカな、奴がそうだと言うのか?」

「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。

「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

「えっ？ わっ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

その容姿と共に知られている彼女の成績を考えれば、もっともな話である。

「そうだ、俺達には姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらない」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」

次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。

そして自身もまた、代表として名乗りを上げた。

「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るってことかよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めて来た。そこへ雄二の一言

「それに吉井明久がいる。」

一瞬、クラスに沈黙が訪れた

「だれそれ？」

「ちよつと雄二！　どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？」

「明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

「ちつ違つよっ！　ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で……」

「そのとおり、バカの代名詞だが、うまく使えばいい捨て駒だ。」

「ひどくない！？」

それまで口を開かなかった大地がようやく口を開いた

「それに俺はGHQのメンバーだ。」

ざわっ

「G……GHQ……あの伝説の傭兵集団！？　アニキはそのメンバーだったのか……！」

「すげえや！　これならぜってー勝てる……！」

「GHQに増援を要請すればBぐらいまでなら行けるだろ。」

説明コーナー

G H Qとは！

G H Qとは学園が決めた唯一他の試験召喚獣戦争に傭兵または、不正（風紀を乱すこと）を行った者の粛清として干渉できる組織である。

彼らは召喚獣の実験を受ける代わりに総合科目のみだが、フィールドを展開できる。

部長と副部長の正体は謎に包まれている。

どちらもありアルの喧嘩が強く、部長は忍者のような戦い方。副部長はパワー押しらしい。

部長に粛清された者もそれなりにいる。（ムツツリー二君とか）見た目は真っ黒な装束で顔はわからなかったが、とても長い金髪らしい。

噂では部長はテニ部との兼部とか…。

「…帰宅部ごときに何ができる」

「うるさいぞムツツリ助。お前、一回部長に負けたことあるだろうに。」

「…次は…勝つ」

「いい度胸だな？部長の代わりに俺が粛清してやろうか？」

「望むところ…！」

ムツツリー二と大地の間に一触即発なかんじの空気が流れる。

「いいだろう。G H Qふくむ…もがつ！？」

「何をしてるんだ大地？」

「…？」

しかし、それは教室に入ってきたある異分子によって防がれた。
ついでに大地の口もふさがれた。

「ふ…ふうが！？（しゅ…終夜！？）」

「大地、G H Qの規則で個人単体での肅清は禁止されてるはずだが？」

「ふんがせん。（すんません。）」

突然の来客にクラスのメンバーがざわめき始める。

「おい…あれって学年首席の影乃じゃねえの！？」

「確かに大地と仲がいいって話は聞いたことはあるけど…」

「つーかもしかして影乃もG H Qなのか！？」

これに重ねてさらなる来客が来ていた

「まったく…アンタはいつも喧嘩ばかりして…尻拭いすることこの身になってよね…？」

「アリサあ！？」

『アリサ・バニングスだとおお！！』

「才色兼備！金髪美乳！ツンデレ！この三拍子がそろった完璧美少女！！」

「なんでこんな所に！？」

「まさか俺への告白！！」

「んなわけないでしょ。思いあがるのもいい加減にしなさい。」

クラスが一瞬騒がしくなったがアリサの一声であっという間に静まった。

「に、してもなんでここに？お前らAクラスだろ？」

「今日はホームルームだけだろ？だから一緒に帰ろうかと思ったのさ。」

「あんた一人で帰るのなんて見てられないから仕方なく私も来たのよ。感謝しなさい。」

「言い出したのはアリサだけだな。」

「ちょ！？言わない約束でしょ！！」

「心配してくれたのか？ありがとな。」

ナデナデ

「いきなり撫でないでよ！」

「いいだろ？これが初めてなわけでもあるまいし。」

「…し、仕方ないわね。少しの間撫でてもいいわよ。／／／／／」

「了解しました。お嬢様？」

『異端者を始末しろおおおおお！！』

大地とアリサのイチャつきに嫉妬した覆面集団FFF団が文字通り沸いて出てきた

「お前ら！？このアニキにたてつくのかよ！？」

「それとこれとは話は別だ！！」

「なに！？」

「ずいぶんと身勝手な集団だな…」

終夜はポケットから携帯を取り出した。

PI PI PI

プルプル…

ガチャッ

『はい、こちらG H Q。』

「終夜だ、これよりF F Fとの交戦を開始する。西村先生を呼んでおいてくれ。」

『了解しました。戦闘の許可を取った上で、増援を送ります。』

「いや、増援はいらない。」

P I

「大地、戦闘許可が下りた。ついでに武器の使用許可も下ろそう。」

「マジ！？久方ぶりに暴れられるぜ！」

『異端者に死を！！』

F F F団がカッターを構え、大地は槍を床下（！？）から取り出し、終夜はクナイを懷から取り出した。

「掛かれえええ！！！」

『だあああ！！！』

「H A！！返り討ちだぜ！！！」

「この後フェイトとデートがあるんだ。悪いけどさっさと終わらせるぞ。」

「アタックフアンクション：グングニル！！！」

「忍奥義 絶！！！」

『ぎゃあああああ！！！』

（10秒後）

「弱いな！俺を倒すならこの3000倍は持つて来い！！」

「あ、西村先生。こいつらの補修、お願いしますね？」

「…お前ら、いったい何したんだ？」

そこにはFFF団だった男たちの死体が積まれていた

「あ、そうだアリサ。これ」

「…映画のチケット？」

「そ、この前買ったんだが、この後一緒に見に行かないか？」

「そそそ、それって！！／＼／」

「ん？まあ、はたから見ればデートかもな。んで？行くのか？」

「…あ、あんたがどうしてもっていうならいいわよ！」

「どうしても。だ。」

「し…仕方ないわね。一緒に行つてあげる。勘違いしないでよ！あんたに誘われたから仕方なく行くのよ！！」

「なんか…すごくイチャついとるんじやが、わしらのこと忘れとるんじやろうか…？」

「私もいつか明久君と…」

「？姫路さん、何か言つた？」

「ひゃひゃい！？なんでひょう！？」

「なんじゃ、口の中に甘い何かが広がつてお「…うぶっ」

「どうしたひでよs…うぶっ」

これが俺達の日常。

騒がしいけど楽しい毎日だ。

ずっとこんな日々が続けばいいのにな。

でも番外編だから続かない!!...BY作者

番外編 バカとテストとG H Q（後書き）

大「こんないいから本編進めろ!!」

すんません!!ほんと!気が付いたら書いてただけで!!

終「全く、ほんとに!殺されたい?」

え?あ、ちょ!なんでB S Mモード!?

大地君もスーパーモード!?

終「シャドウ・レイ!!」

大「かめはめ波!!」

ぐぎゃああああ!!

第18話 実は地味キャラが最強だったりする。(前書き)

名(迷)言コーナー

『^{キサナドゥ}X_ゴごときが…、この私に一瞬でも恐怖を与えるとはな。

ほめてつかわす!!』…ザキラ(デュエルマスターズ)

大「作者…この俺に一瞬でも敗北の恐怖を与えたこと、ほめてつかわす。」

作「彘?」

大「DETHドラゲリオン召つつ喚!!」

作「え?まじで?」

グぎゃああああッああアああッあああああ!!!!!!

作「しかも実体化!?!」

大「くたばれ!!」

作「NOおおおお!!」

第18話 実は地味キャラが最強だったりする。

終夜は距離を取った後、大地にクナイを投げた
だがそれは明後日の方向に飛んでいった

「・・・どこを狙ってた？俺はここだぞ？」

「いいや・・・これで正解だ！」

『シャドウバインド』

「しまった!？」

終夜はニヤリと笑った

「準備は出来た。」

パチンと指を鳴らすと大地を取り囲むように文字が浮かび上がった。
そして、全ての文字の中心にはクナイが刺さっていた

「まさか・・・クナイは!？」

「御名答。今までのクナイはこの術式を作る為のもの。まあ、成功したのはお前が単純な攻撃が多かったからだけど。」

「（くそ・・・このバインドかてえ・・・）」

「シャドウバインドは特殊でね、そう簡単には外せないよ。」

終夜は最後のクナイを術式に突き刺した

〔奥義・・・封!!〕

同時に術式から黒い光の柱が立ち上がり、大地を襲った

「ぐっ・・・わ、割にあんま強くない技だな？こんなもん余裕で耐えてやるぜ！」

「ま、即席の儀式用クナイじゃそんなところだろ。でも、封の真骨頂は・・・」

終夜は掌を地面に乗せた

「ここからさ！」

〔奥義・・・大封!!〕

封の術式に加えて新たな術式が地面に広がった

「!？」

「まだまだ！」

〔奥義・・・神封!!〕

更にその周りに術式が展開された

「そして！」

「我流・闇棺！」

漆黒の結界が大地を包んだ

「結界！？」

「最後！」

「我流・分身乱舞！！」

「行け。俺の影！」

終夜の作り出した影分身が結界の中を縦横無尽に駆け回り大地に攻撃を仕掛けた

「がっ！・・・畜生・・・こんなもんぶっ壊して・・・」

「無駄だ。4重結界術・神封・闇棺はそう簡単には破れない。お前の気を解放してもせいぜいちょっと形が歪むだけ。」

（あいつの言葉ははったりじゃない・・・だったら！！）

「この技、本当なら儀式用クナイでやるんだけど。意外に魔力を込めたクナイで代用出来るんだな・・・」

終夜が自分の技に終夜が感心しているとシャドウが話しかけてきた

『旦那・・・ちょっとやり過ぎじゃね？』

「大丈夫。これ位しないと大地は倒れない。」

終夜は舞うように攻撃している自分の影を見ながら詠唱を始めた

『もう次の準備・・・？心配性だねえ旦那も・・・』

（・・・ちよつと結界に魔力素使いすぎたか・・・魔力散らしておかないと。）

『ま、何にせよ。これで旦那対大地の旦那2回戦は旦那のか・・・
・・・ち？』

ズドオオ！

尋常ではない量の気が大気を震わす

「！？結界内から壊す気か！！」

其処にあるのは

ピシピシ・・・

『罅が・・・』

ただ圧倒的なまでの

パリン

「・・・スーパーモード2。」

．．．．．力のみ。

（っ！？あれが大地なのか．．．？確かにあいつは大概規格外だけど．．．）

終夜は目の前の黄金に光る男をみて、冷や汗をかいた

（こんなには無かったぞ！！）

「悪い終夜。」

「？」

「この姿はどうやら気が高ぶって好戦的になるみたいだ。つーわけで、全力で防御してくれ。加減出来そうにない。」

「おいおい．．．スーパーサイヤ人まんまじゃないか．．．」

「防御しろよ？友達殴り殺すなんて嫌だからな？」

「大袈裟なっ．．．！！」

10 m以上あった筈の距離は一瞬で零となり、終夜に拳が叩き込まれた

ストレート

蹴り上げ

裏拳

蹴り

蹴り

蹴り

ボディブロー

気合包

最早それは闘いではなく一方的な暴力となっていた

(ぐっ・・・)

終夜を蹴り飛ばし

高速で回り込んで

蹴りで宙に打ち上げる

気を地面に放出し、飛行

回り込んで、叩きつけ

更に回り込んで、また打ち上げる

そして、だめ押し

「・・・超かめはめ波。」

打ち上げられた終夜に青い光の奔流が迫る

「っ!!」

終夜はとっさに地面にワイヤーを食い込ませ巻き取り、上手く回避した

「結界が割れるってええええ!!」

余りの攻撃に、結界が壊れて・・・

「どおおっせええい!!」

無かった

どうやら耐えたらしい

ナイスファイトだユーノ！（b^ー。）

「ハアッ・・・ハアッ・・・」

「・・・」

（っ・・・強過ぎる・・・）

『システム終了』

「！」

（・・・積んだ俺の負け・・・「あーミスった」は？）

ドサッ

「へ？大地？」

『一体なんなんだ！』

「すぴー・・・」

「・・・寝てる」

ズルツ（ユーノとシャドウがコケる音）

大地はもとに戻り地面に突っ伏して寝ていた

『これって・・・旦那の勝ち・・・だよな？』

「・・・多分。」

「大地、散々暴れて・・・」

「ユーノ？」

ユーノはふるふると震え始めた

「僕は結界維持（地球を壊す威力を止めた）とか衝撃波の防御（気弾の流れ弾込み）とかで大変だったんだぞ！！」

『よく耐えきったな・・・』

「もしかしてユーノが防御最強・・・？」

終夜は小さな体で大地を一生懸命叩いている、大きな力をもつフェレットを見ていた

ドゴオオオン！

「今度はなんだ！」

その爆発音はフェイトとなのはが戦闘しているほうから聞こえてきた

「まさか・・・大地の気に当てられてジュエルシールドが暴力したのか！？ったく次から次へと・・・シャドウ！！ウイング展開！」

『了解！』

終夜の背中に黒い羽が現れた

「急ぐぞ！」

終夜は羽を羽ばたかせ、高速でフェイトのもとに向かった

side out

sideフェイト

封印したジュエルシールドを巡って白い女の子と戦っていたら、急に凄い衝撃波が来て、それに反応してジュエルシールドが暴走したんだ

「くっ・・・」

私はジュエルシードをとめる為に近づいた

「フエイト！」

「なのは！離れる！」

近くにいたアルフが止めるけど、いまは・・・

私はジュエルシードを両手で掴んで、魔力をあてる

「止まって・・・！！」

余りの魔力量に腕が切れていく。

「くうう・・・！！」

でも、それはあまり長くは続かなかった

「・・・無茶はすんな。お前が傷つくのなんて俺は見たくないんだ。」

「終夜・・・？」

あの、不思議な男の子が私の抱いてジュエルシードから離れた

「こっついう危険な仕事は男がやるもんだ」

そう言うと終夜はジュエルシードのほうへ飛んで行った

「待つて！」

終夜は此方に背を向けたままで立ち止まった

「大丈夫。ジュエルシードはわた「違う！」・・・」

「なんで・・・なんで私を助けるの！！」

「・・・さあて。何でだろうな？自分でもわからない。ただ・・・」

「ただ？」

「君みたいに綺麗な女の子の綺麗な笑顔を見たい。つてのはあるかな？」

終夜は振り返った

「もっと笑いなよ。君は、笑顔の方がもっと可愛い。」

凄く綺麗な笑顔で笑っていた

「私が、か・・・可愛い／＼」

「君が何を心に抱えているのかわからないけど、それが原因で笑えないなら、俺がそれを無くす。無くせないなら、せめて、一緒に担いであげる。だから、心配しないでいい。」

私の頭に人の掌の暖かみがあった

「俺は君の味方だよ」

その暖かみも笑顔も言葉も私の心に安らぎを与えてくれた
終夜は少し私の頭を撫でるとジュエルシードに向かった
・・・終夜の手が離れたとき少し寂しく思ったのは内緒だ。

s i d e o u t

s i d e 三人称

終夜はジュエルシードの前に佇んでいた

「・・・」

戸惑いも無くそれをつかむ

手が干切れるような痛みが走る

魔力がジュエルシードに吸われる用な感覚

油断すれば意識が飛んでしまう

満身創痍。

先ほどのダメージがまだ残っている

だが、それを離す訳には行かない

自らの力でその持つ魔力をコントロールする

それに意識を集中させる

そして、その時

それを掴む手から今までの魔力よりより黒く、呑み込まれるような
漆黒をした魔力が出た

漆黒はそれを包み込み、侵食し、自らと同じ色に染め上げた

ちからの暴走は止まり、終夜は落ち始めた

だが、地面にぶつかることは無く

金髪の少女によって助けられた

「・・・ありがとう」

「・・・どういたしまして。こっちこそ、助けてくれてありがとうな・

・・」

そして、意識を手放した

終夜の手の中には黒い宝石が握られていた

第18話 実は地味キャラが最強だったりする。(後書き)

わーテスト前日に何やってんだ俺

大「仕方ないさ。書きしまったんだから。」

だよね？

にしても、ユーノの防御力がバグキャラ並みに…

大「…特訓の相手に選んでたからな…」

さてと、これでやつと話が多少進む。

大「管理局との接触ももうすぐだな。」

そこでは大地が重要だから、がんばれよ？

大「ったり前だ！！この俺を誰だともって居やがる！！」

んじゃあこのへんで

「「またな！！」」

先倒しアンケート（注！：下手なイラストあり）

A、S編終了後に登場するオリキャラの名前について意見を募集します！

それは…こいつです。

> i 3 7 2 8 7 — 3 7 3 2 <

設定

二つ名…常識の破壊者
ルイル・ブレイカー

魔力量…B級〜EX（感情により変化）

気…C級（使用不可能）

魔力変換素質…轟爆（必要に応じて爆発する）

希少能力…龍ヲ友トシ呼起スオ（異世界、現実世界、並行世界問わず龍を呼び出し、友とする）

はじけ
二代目破地華組、組長。

竜の一族最後の生き残り。

体に龍の遺伝子を宿していて、それを活性化させると風貌が龍人に変化し戦闘力が増加する。

おおざっぱな性格で、アニキオーラがハンパなく、多くの人に好か

れる。

仲間が傷つくのは大嫌い。

竜の一族は成長が早く、5歳にして12歳の大地たち程の姿になっている。

戦闘は龍之爪（鍵爪つきの籠手）主体の肉弾戦を得意としている。

また、デバイスのモードセカンドである大剣は3段階にサイズが変わる。

基本は肉弾戦で戦うが、最も得意な武器は自分の身の丈より大きい大剣。

竜の一族は異常なまでの筋力を持っていて、傷の治癒速度も異常。死にかける度に強くなる。

龍王拳闘の使い手

例・龍王昇波紅撃

ブルトレイカー

なお、常識の破壊者の異名はたった一人で時空管理局の時空艦を落としたことがあるから（笑）

パートナー
相棒

名前未定

見た目…東洋の龍をデフォルメし、小さくした感じ。体毛は真っ白。

（♀）

モード1…龍之爪

モード2…大剣（1・2）150m、魔力刃込みだと180km

しっかりもので、ビイトの事を何時も心配している。

ビイトの肩に頭を乗せ、腕に巻き付くのがお気に入り。

デバイスと言うよりは、武器に変身出来る動物。

生き物として生きているので、武器として扱われるのを嫌う。

竜の一族は生まれてすぐ自分の武器であり、パートナーとなる竜を

探す。

元々、神の使いのような扱いだったけど、ビイトに適応、パートナーとなった。

以上です。

因みに、キャラのセリフは

「おいおい！俺を忘れてんじゃねーよ！？」とか、「お前ら！ハジケよーぜー！」とか、「お前は…少し…やりすぎた…後悔しろよ…くそ野郎…！」とか、「コーラが…足りない…ガクッ」
ですね。

ちよつとギャグ要因です。

龍のほうは「ちよつと！落ち着いて…！」とか、「全く、しょうがないわね…」とか、「行くよ！『オリキャラの名前』…！」です。

締め切りは来年の3月上旬までを予定しています。

協力お願いします！！

因みに本編と特別編は現在急ピッチで執筆中です。

特別編は今までにない長さなので、もしかしたら前半だけ今日更新するかもしれません。

それでは！！

エー。コラボ前篇です。

この作品には前奏曲さんの魔法少女リリカルなのはStriker
S\The nostalgic melody\もとい魔法少女
リリカルなのはStrikerS\The melodious
blaze\に登場する散空刹那さんが登場します。
つまりコラボです。

この作品は65パーセントの悪ノリと、25パーセントの前奏曲さ
んの協力と10パーセントの作者の妄想でできています。

それを理解したうえで。読んでください。

それでは、前篇どぞ。

正直、足取りが軽い

この前の試験戦争でAクラスに勝ったはいいが、G H Qの規約により引き分けになった。

あー俺がG H Qでなければなー

ま、別にいいけど。

んで、本来ならFクラスのままなんだけど。ある良心的な先輩が学園長をおどしてゲフンゲフン説得してくれたお陰で、Aクラスの設備をコピーした新しい教室に移る事になった。

まだ完成してないから今はBクラスの予備設備にいるけど。

「失礼しまーす」

俺が扉を開くと、中には軍隊の司令部みたいな場所があった
先代の部長がこれまた学園長を説得して作らせたらしい。

…そういう事にしといて。

因みに、先代はフィギュアスケートのためのアイスリングも作らせている。

この学園のどこにそんな大金が…

あ、だから偶にG H Qが建設業の手伝いをしてるのか。納得。

「で、部長。今回は何の為の召集で？」

「わざわざ堅くなるなよ副部長。今回はただの学園祭の風紀をどう守るかについて話し合うだけだ。」

俺と話しているのはG H Qの部長。
先代には気に入られていて、アイススケート部に誘われている。
因みに俺は副部長。

この事はG H Qの内部メンバーしか知らない。

「隠す理由が分からないけどな。」

「何を言っているんだ？」

「隠した方がかつこいいだろ？」

「お前ってちよいちよい馬鹿になるよな？」

ま、それは置いといて…

「一つ言わなきゃならない事がある。」

「何だ？」

「この前開発した腕輪があるだろ？」

「お前が暇つぶしに作った召喚フィールド生成システムか。」

「そ、今までの迷惑料として学園長に渡したんだけど、最近になつて不具合が発覚してな。ばれないように回収したい。」

「わかった。取りに行ってくる。」

「まてまてまて！！」

そのまま暗殺業に行けそうなオーラを纏っていたのでそれを止めた

「大丈夫！そんな事しなくても取れるから！」

「どういう事だ？」

「学園祭で開かれる大会の優勝賞品になったんだよ。だから、俺と組んで参加してくれ。頼む！この通り！！」

俺は顔の前で掌を合わせた

「…はあ。仕方ない、参加しようか。俺とお前なら負ける筈が無いしな。」

「サンキュー！」

その頃三年の教室にて…

「へえ。召喚獣で闘う大会か…」

「刹那くん？何見てるの？」

「いや、ちょっとね。そうだ！なのは、一緒に出てみないか？面白そうだ。」

「なになに…試験召喚獣を闘わせて学園1の称号を目指せ！優勝賞品は…」

「遊園地のチケット。面白い上に優勝すればデートも出来る。一石二鳥だよ?」

「うん! そうだね! 刹那くん、頑張ろう!」

「勿論。」

戻ってG H Q本部

「問題は刹那先輩となのはさんのペアが参加したときだな…」

「姉さん一部の輩から『白い魔王』って呼ばれてるからな…」

「刹那先輩は『魔神鬼』だしな…」

「「はあ…」」

『聞こえてるよ? 2人とも?』

本部のメインモニターに魔王と魔神鬼の姿が映し出された

「っ!! 刹那先輩!? 姉さん!? 総員、極限非常事態シフト!!! 気を抜くな!!!」

「通信回線のハッキングか!? 急いで回線を閉じる!」

「ハッキングではなくただの通信ですが無理です！魔王に殺されま
す！！」

「仕方ない…みんな急ぎ撤退だ！命を無駄遣いするなよ！！」

『イエス・サー！！』

「逃がさないよ？」

「くそっ！もう来た…！なら裏口から…」

ドカアアン

「む、無理です！！魔王が居ます！！」

「ちっ…魔王からは逃げられないってか…」

「ねえ、みんな…」

「一体誰が…」

「「誰が魔神鬼（白い魔王）なんだい（なのかな）？」」

（おまえ等だ！）

目の前にいる2人は最早人ではなかった

「ちょっとOHANA SHIしよつか？」

此処に、死刑判決がなされた

「うゝアアアアア…」

「んじゃ、ウチのクラスの出し物決めるぞー」

『ゴリラごときが勝手に仕切るな！兄貴はどこだ！』

「大地は休みだ。つかおい、誰がゴリラだ。シバくぞ。」

「んだよ兄貴休みかよ……」

「…つまらない。」

「せつかくメイド服の素晴らしさについて語ろうと思ってたのに……大地のセンスってなかなかいいからね。」

「…同感。」

「明久くん！？駄目ですよ！！そんな事！！」

クラスが五月蠅くなった時に割り込む者が現れた

「落ち着け、五月蠅いぞ。そして、席に着け。」

『こじゅ先生！！』

「だから！その呼び方止めろ！！俺の名前は片倉^{かたくら}地陸^{ちりく}だ！」

このクラスの担任教師で、大地の兄貴分だ。因みに新任教師で担当教科は地理以外。補習担当でもある。

見た目がB A S A R Aの片倉小十郎なので『こじゅ先生』

「で、出し物決めるんだろ？今日の時間全部使っていいから速くやれ。」

「流石こじゅ先生！！解ってる！鉄人とは一味も二味も違う！そして渋い！！」

因みに副担任鉄人

「だから！こじゅ先生じゃねえ！！いい加減覚えろ！！」

「そこにしびれる憧れるううう！！」

「いい加減にしろおおお！！」

今日もFクラスは平和だった。

「…んで、どうすんだ？出し物？」

「はい！遊　。王の体験会はどうですか！」

「遊び場じゃないので却下」

「ラノベの朗読会！」

「クラスの奴らが協力しなくていいから却下」

「ラノベ図書館！」

「用意するのが大変だ、却下」

「ラノベの劇！」

「いい加減ラノベから離れろ！！」

「…自主制作のゲーム（主にエロゲ）の公開」

「あくまで対象は全年齢でな」

「同人誌制作！」

「版權を侵害しないように」

「一体なんならいいのさ!？」

「喫茶店とか、占いとか、縁日もどきとかならな。」

「そんな!」

「テメエ等学園祭何だと思っていやる?」

「じゃあさ、チャイナ服着ての喫茶店なんてどうかな?」

『ナイス馬鹿!』

「あまり誉められた気分がしないんだけど…」

「お前等なあ…まあそれならいいだろう。頑張れよ?」

こじゅ先生、以外に生徒の意志を尊重しながら正しい方向に導くいい先生だった。

「だから!こじゅじゃねえ!」

がらっ

「あ、こじゅ先生。遅れました」

「…大地、足はどうした？」

「やだな～ちゃんとあるじゃないですか。」

「つーか透けて見えるんだけど、壁が見えるんだけど！？つーか浮いてないか！？かお青白いし！」

「あ、そうだ。今ちよつと事件があつて体がズタズタなんで、精神だけ抜け出してきました（笑）」

「おい！誰か！救急車呼べ！！」

…今日もFクラスは平和だった。
嘘じゃないぞ！

学園祭当日

Fクラス更衣室

「嫌じゃ！何故わしがこれを着なければならん！？」

「いや、だって…ねえ？」

「そもそもこれは男が着る物では無かるう！」

「うん、じゃあ秀吉ならOKだな。」

「何故！？」

「ほら秀吉、観念しなさい。」

「アリサ！？」

「俺が呼んだ。」

「仕方なくわね…こうなったら…」

「な…何をする気ナノじゃ…？」

「「実力行使。」」

「あ、ちょ…止め、アッーーーー！！」

外

「くっ…秀吉とアリサさまと一緒に兄貴が入ってるあの空間…」

「きつとあのなかでは「ピーー!!」とか「バキューン!!」とかが
…!!」

「うおおおお!!突入だあ!!」

「いや、させないし。」

「げ!影乃!？」

「乱暴は駄目だよ?」

更衣室に乱入しようとした者達の前に金髪の男女が現れたっ!!

「あ…あなたは!!」

「金髪巨乳!さらに天然でドジっこという萌え要素をもった我らが
女神!!」

『フェイト・テストロッサさん!!』

「ひっ!」

「オイコラ、俺のフェイトが怖がってんだろぅが!潰すぞああん!
?」

「性格が豹変した!？」

「っーか何が「俺のフェイト」だよ!!いつからフェイトさんがあ

んたの物になつたんだよ!!」

『そーだそーだ!』

ガチャ

「あれ? 知らなかったのか?」

最早カオスな状況下で仕事がすんでスッキリした雰囲気の大池とアリサが現れた

「かなり前から2人はつき合ってたぜ?」

「確か小6の時点で夫婦みたいな関係じゃなかったかしら?」

「なん…だと…」

殆どの男子の顔に絶望の色が浮かんた。

「小6かぁ…懐かしいな。確か発たいk「言わせないからな!」?」
「ぶーせつかく思い出に浸ってたのに…」

「フェイト、今日の夜にしっかり思い出して貰うから。覚悟しとけよ?」

「終夜? いい加減落ち着け。」

「うん…楽しみにしてるね… / / / / /」

「おい、誰かコイツ等止めろ。」

「無理よ大地。諦めなさい。」

閑話休題

「秀吉！これを11番テーブル！！」

「わかつたのじゃ！」

「姫路は新しい客の案内！ムツツリーニはお冷やのおかわりをして来い！！他の男子は宣伝行つてこい！」

「わかりました！」

「…了解」

『任せて下さい！アニキ！！』

「明久は須川と料理だ！」

『了解！！』

「さて、俺は…！」

ギター片手に教室の端へ

（ギター弾いて暇つぶしー）

何ともてきとうである

ボロロン ♪

ギターの音色が響く

（俺はあんま料理出来ないし、クラスまとめなきゃいけないから宣伝出来ないし…）

ボーン ♪

ボンボンボンボロロン ♪

（特技は裁縫だけだし、やることないな〜）

因みにチャイナ服の製作はムッツリーニと協力して作った。

ボボボローン ♪

ボロロボロン ♪

ジャーララロン ♪

（うん！ゆーつべで見た「魔王決戦」のアレンジ版は上手く弾けるな。）

大地は黙々とギターを弾き続けた

ジャジャッジャッジャジャーラン♪
ジャッジャッ♪
ジャジャッジャッジャジャーラン♪

(ゝ♪たのしゝ♪)

ジャーン…

「ふうっ…」

パチパチパチパチ

「へ？」

気がつくと客は全員大地に拍手をしていた

(あつれゝ？いつの間にか大人気…)

「ど、どうも…」

『アンコール！アンコール！』

「え！？あ、いや！そんな事言われても…」

『アンコール！アンコール！』

(絶賛演奏中！！ってアピールしてた訳じゃ無いんだけどな…あ、

絶賛って凄い久しぶりに言ったかも。）

「じゃ、じゃあもう一曲だけ…」

『流石アニキ！乗りがいい！』

（あいつら…！！（怒））

「じゃあ、ゲームのBGMのアレンジ版を…」

そんなこんなで大地もFクラスの売り上げ上昇に貢献するのだった

所変わってスケートリンク

「ふうっ…久しぶりに楽しく滑れたかな？」

「お疲れ様。」

刹那はその天才的な滑りを客の前で披露していた。
勿論大成功で、客も楽しんでいた。

「で？先輩。なんで俺が呼ばれたんですか？」

「ちょっと一緒に滑ってみたいな〜って思ったから。」

「話の筋が読めません。帰りますよ?」

「いや、だから、終夜君にもフィギュアスケートして貰おうかなー
って思ったから呼んだんだよ。」

「練習無しで?」

「うん」

「観客のいる中?」

「うん」

「先輩のフォロー無しで?」

「うん」

「嫌がらせのつもりですか?」

「うん(黒)。」

終夜はこの無茶ぶりに思わず呆れていた

「大丈夫。滑り方とジャンプ、ステップ位は教えたでしょ?」

「いや…だからって」

「いいからいいから」

「ちよっ！？先輩！？」

刹那は終夜をリンクに押し出した

『さあて次は期待の新人！刹那部長の愛弟子…影乃終夜だあ！』

（俺は何時あなたの愛弟子になったんだ！？）

終夜は司会に心の中で突っ込んだ

『ワアアア…！』

期待に胸を膨らませる観客を見て終夜は腹をくくった

（みんな期待してるし…やるしかない…か。）

綺麗な水の流れる小川のイメージが出来る音楽が流れ始めた

（…心を静めて…自分の感性に従って…感覚的に…）

終夜は単純だが、美しい滑りを始めた

「やっぱり…なかなかいいね…うちの部に欲しいな…」

「まだ荒削りな感じが出てるけど、上手上手。」

「でもちよつと単純すぎかな？育てがいがありそうだ。」

終夜は見様見真似の演技でプログラムを滑りきった

『ワアアアア！！』

（…疲れた。）

終夜がリンクから戻ると刹那たちがそれを迎えた

「お疲れ様。凄いね。トリプルアクセルなんて教えた記憶はなかったけど？」

「俺もあなたの愛弟子になった記憶はありません…っと！もうすぐ大会か。すみませんお「あれ？終夜君も出るの？」…“も”？」

「召喚獣バトルの大会でしょ？私達も参加するんだ。お互いに頑張ろう？」

「そ…そうですね（苦）」

思わず苦笑してしまった終夜だった

続く！！BY作者

はい、大会は次回に持ち越しです。

え？合宿編？

盗撮なんかしてG H Qにしかれたいバカなんて文月学園にはいませんでしたので。何にもありませんでしたよ？

因みに終夜のスケートがうまいのは作者の

「忍って身軽だからスケートとか得意そうだな」

っていう妄想から出た設定です（笑）

因みに、G H Qの話だったら気軽にキャラ出せるんでなんか出してほしかったら言ってください。

本編のアンケートのほうの協力もお願いしまーす！！

では後編で！！

前奏曲さん、刹那さんってこんな感じでいいですか？

第19話 親って何だと思っ?・・・BY終夜(前書き)

本編が完成したんで更新です!

今回は終夜がプレシアさんに遭遇します。

ついでに、おまけはなるべく甘くしてみました。

・・・うまく甘くなっているだろうか?

名(迷)言コーナー

『君たちには罰を受けてもらうよ』

1つはアクノギアを呼んだ罪

もうひとつは・・・

僕に命の重さを忘れさせた罪だ

悔い改めよ。

♪

…黒魔導士ゼレフ(FAIRYTAIL)

第19話 親って何だと思う?・・・BY終夜

「っ・・・ここは?」

終夜は上半身を起こし、まわりを見渡した

(結構豪華なマンションの寝室ってどこか・・・)

「おっと。」

体に上手く力が入らず、立ち上がるのに失敗し、またベットに倒れた

「そういえば俺・・・無茶して気を失ったんだっけ。」

終夜は目を閉じて辺りから“何か”を補充した

(・・・もうそろそろ大丈夫だな)

しっかりと自分の足で立つ終夜の顔に疲労は感じられなかった

「さてと、此処がどこだかのだいたいの予想はできたけど・・・だとしたらフェイトはどこだ?」

終夜は寝室からでるとリビングに向かった

「フェイト?居るのか?」

フェイトを探す終夜の目にあるものが止まった

「インスタント食品・・・しかもそこそこ新しいし、数もある・・・」

終夜は何を思ったのかキッチンに入り、冷蔵庫や食品の入ってそうな場所を漁った

「・・・あるのは開いたドッグフードだけ・・・って、やっぱりちゃんとしたもん食べてないな・・・はあ。」

（今度食事を作ってあげよう。うん。決定）

緊張感のない事を考えていた終夜の目にある物が止まった

「・・・これは・・・フェイトと・・・母親の写真・・・」

満足そうな笑顔で笑うフェイトと紫の髪的女性が映っていた

「いや・・・コイツはフェイトじゃない？」

理由は無く、根拠もなかった

ただ・・・その写真に映る人がフェイトには見えなかった

「・・・まあ、とりあえずフェイト達を探るか。」

終夜は目を閉じてフェイト達の気を探った

自分よりうえに2つ・・・フェイト達のものと思われる気を見つけた

「シャドウ。起きて。」

【・・・】

（返事なし・・・これじゃあ移転出来ない・・・仕方無い。壁蹴りで登ろう・・・雨が降ってるか、濡れるのは嫌だけど仕方無い。）

終夜はしぶしぶベランダにでて、窓の合間の壁を蹴り上がり始めた因みに壁蹴りとは三角跳びの発展型で、壁に張り付いた後壁を蹴り、また壁張り付いて・・・

を繰り返して、壁を登る技法

影乃家に伝わる技の一つだ。

因みに、すずかの家の掃除に一役かっている（終夜がノエルさんに教えた）

「そろそろ屋上だな。よつと！」

終夜は少し力強く壁を蹴り、屋上へとでた。

「フェイト、アルフ。何をしてるんだ？」

「終夜！？」

side out

sideフェイト

「フェイト、アルフ。何をしてるんだ？」

母さんに報告をするために、時空の庭園に移転する準備をしていた

私達の前にベットで寝ている筈の終夜がいきなり現れた

「えっと・・・これから母さんに会いに行こうと思って・・・移転を・・・」

「フエイトのお母さんか・・・」

終夜はしばらく考えるとパンと手を鳴らし、私にこういった

「会ってみたいな。俺も付いて行ったら駄目・・・かな？」

うつ・・・男の子なのに上目遣いが違和感ない・・・というか私より可愛いんじゃないだろうか？

「でも・・・」駄目に決まってるだろ！！あんたは敵だ！」アルフ・・・」

「じゃ、敵らしく行こうか。」

「へ？」

ちやき

「動くな。」

終夜は一瞬で私の後ろに回り込み、クナイを私の首に当てた

「フエイト！？」

「動くな。敵らしくって言ったのはあんただ・・・」

終夜の声に優しさは無く、有るのは威圧感だった

「ま、本気じゃないけどね」

「どういつ事だい・・・」

「まあまあ、構えるな構えるな。」

「っ！！いつの間に！」

シャドウも佐助の姿でアルフを拘束していた

「これはあくまで俺が脅迫して連れて行かせたっていう事実を作るだけ。これならフェイトも連れてってくれるだろ？」

「あ・・・」

「た、確かに・・・」

終夜って頭の回転速いんだ。かつこいいな・・・

「じゃ、決まり。行こうか。」

こうして終夜は私の母さんに会う事になった

side out

side 終夜

移転が終わり、不思議な空間に浮かぶ島みたいな所についた

「此処か・・・」

さてと、作戦決行としようかな？

「フェイト、悪いんだけど・・・」

「？なに、終夜？」

「影、貸して。」

「はひ？」

いや、とぼけた顔も可愛いけどさ。

それにしてもフェイトって可愛いよな。所々天然だし、髪の毛さらさらだし、声も綺麗だし、目もクリクリしてるというか・・・おっと、今はフェイトの可愛さについて語ってる場合じゃない。（此処までの思考時間約0、1秒）

「いや、フェイトの母さんにバレない為に必要なんだ。」

俺の予想が正しければ、こっちの方が都合いいし。

side out

side 三人称

「母さん、ジュエルシードを持ってきました。」

あれからしばらく歩き、いまフェイトは母親の前に一人で立っていた

『プットアウト』

バルディッシュから4つのジュエルシードが排出された

「・・・たったこれだけ？」

「・・・ごめんなさい。」

「悪い子にはお仕置が必要ね。」

フェイトの母親は赤い魔力の糸でフェイトを縛り付け、持っていた杖を鞭にかえ、振りかぶった

（させないけどっ！）

フェイトの影から二つの大手裏剣が飛び出した。

「!?!?くっ・・・」

フェイトの母親はとっさに障壁でガードし、はじき返された手裏剣はそのままフェイトを縛る糸を断ち切った

「よっど。」

影から飛び出した終夜がフェイトを抱きかかえた

「終夜……ありがとう」

「気にするな。……にしても頑張った自分の娘を誉めるならまだしも、鞭で叩くのはいただけないな？」

終夜はフェイトの母親を睨みつけた

「あなたはだれ？」

「まずはじぶんから名乗ったらどうだ？」

フェイトの母親は歪んだ笑みを浮かべた

「私はプレシア・テストロッサ。魔導師なら名前ぐらい聞いたことがあるでしょう？」

「俺は影乃終夜。忍だ。残念だが、魔導師じゃない。」

「デバイス持つ魔導師では無い存在……あなたは何者なのかしら」

終夜は少し笑うとフェイトに念話をした

「フェイトの友達さ」『フェイト、鳴海に帰れ。俺も後から帰る』

『でも……早く。』……わかった』

フェイトは部屋から出て行き、アルフに事情を説明して移転した

「フェイトの友達・・・？あんな人形のどこがいいのかしら？」

「自分の実の娘を人形扱いか・・・」「それは違うわ」「何？」

「あのこは私の娘のクローン・・・失敗作よ。」

「クローンだつて！？」

「そうよ・・・私の娘はアリシアだけ・・・」

「そのアリシアってのは隣の隠し部屋の生体ポッドの中の死体か？」

「！？・・・あなた、何故それを・・・」

終夜は手裏剣を鋼線で回収し、腰につけた

「忍の仕事は潜入でね。この建物はあらかじめ調べた」

「あなた・・・ほんとに何者？」

「だから言っただでしょ？」

不敵な笑みを浮かべる終夜はプレシアを恐怖させた

「忍だよ。」

得体のしれないアンウノンが目の前にいる。

実力も、能力も、目的もわからない。

ただ、敵に回すのはまずいことは明白。

（だったら・・・）

「あなた・・・私と手を組まない？」

「ジュエルシード集めを手伝えと？」

「あなたならあの人形より」「あなた・・・ホントにフェイトの事を人形だと思ってるのか？」・・・ええ、あれは私のアリシアの姿をしたただの人形よ。」

終夜は俯いた

「いい加減にしてくれ、聞いてて悲しくなる。」

「どついう意味かしら？」

「あなた、アリシアって娘を事故で亡くしたからクローンの手を産んだんだろ・・・」

「だから？」

「何となく分かったはずじゃあ無いのか？いくら体が同じでも、記憶が同じでも、同じ人間なんていないって。」

「・・・」

「あんたはアリシアの命を弄んだ。しかも、自分の作ったフェイトにアリシアを押し付けて、違うから人形扱いして・・・結局全部過去を認めたくないだけじゃないのか？」

「うるさい」

「フェイトだって自分の娘なんだって気づいてるんじゃないのか？」

「うるさい」

「今更後に退けなくてこんな事・・・」

「うるさああああい！！」

プレシアは終夜に雷を放った

しかし、それは見当はずれの場所に飛んでいった

「フェイトはアリシアの偽物！それがい何でもない！私は全部アリシアの為に動いてきた！わたしはっ「ならなぜ泣いている？」・・・っ！！」

プレシアの瞳からは涙が出ていた

「なん・・・で・・・？私は・・・泣いてる？」

プレシアはその場に泣き崩れた

「その涙の意味を考えろ」

「そして、これまでの事より、これから自分の2人の娘に何が出来るかを考える。」

終夜は一枚の紙をプレシアの前に投げた。

「答えがでたら其処に連絡しろ。俺が出る。」

終夜はプレシアに背を向け、歩き始めた

「シャドウ・ワープ」

影に包まれ、終夜は姿を消した

「私は・・・何をすれば・・・」

その疑問に答えるものは

いなかった

おまけ

「眠い・・・」

「お兄ちゃん！寝ちゃ駄目！ほら！ゲームお兄ちゃんの番だよ！！」

俺絶賛眠気と戦闘中。

今はアリサの内に遊びに来てるんだが・・・眠い。

「アリサ！ちょっと来い・・・」

「なによ？」

・・・チャンス

「てりゃ」

「キャッ!？」

俺はアリサを強制的に女の子座りさせて
ていうか声が可愛い・・・

「お休みなさい。」

「・・・お休み。」

あゝやっぱりアリサの膝枕は最高だな。

え？プライド？

ナニソレ？美味しいの？

ぐうー

「あ！ズルい！アリサちゃん代わって！」

「駄目よ。あんた、大地が一番好きな撫で方してる？」

「そんなの関係無いもん！」

「じゃあ、やってみなさい。」

あら？枕の感触が変わった？

撫で方下手だし。

「むー」

「あれ？お兄ちゃん？」

「アリサ」

「はいはい。」

俺はアリサの膝枕に頭を乗せた

「にゃ！？」

「だから言ったでしょ。」

うん．．．やっぱりアリサの膝枕が一番安心するな．．．
なんか．．．こう．．．心が暖かくなるような．．．

「ありさ．．．」

「何？」

「呼んだだけ．．．」

「そう？じゃあ大地？」

「．．．何？」

「ふふつ。呼んだだけ。」

「何だろこの敗北感」

第19話 親って何だと思う?・・・BY終夜(後書き)

イチャついてんじゃねええええ!

大「寝てたただ。」

そんなんだから本編でフェイトと一回も会わないんだよ!!

大「金髪はアリサで十分です。」

終「聞き捨てならないな…大地はフェイトを見たことないからわからないんだ。」

大「んだと?」

終「フェイトが一番。それ以外は認めない」

大「てめえ…アリサを侮辱すんなや、ああん?」

はいはい、喧嘩すんなよ?

終・大「フェイト(アリサ)が一番だろ!?!」

うるさい!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6545v/>

リリカルなのは～中2病な（元）中2の異世界転生記～

2011年12月20日18時45分発行